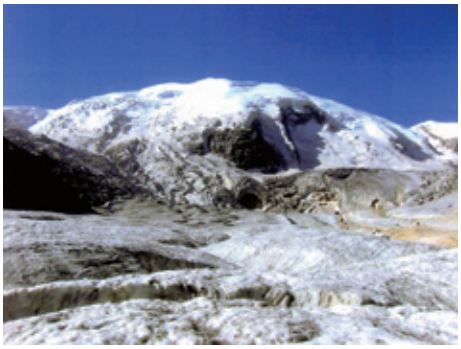
不盡

創立70周年記念誌

公益社団法人 日本山岳会

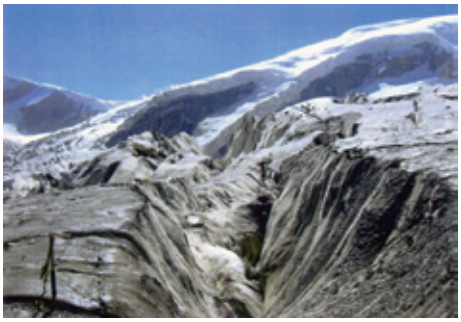
静　岡　支　部

海　外　遠　征



【2002年：天山山脈】

チャゥカラガイ・ムズターク=仮称



ベースキャンプ

【2004年：モンゴル】

キャラバン3日目

アスラルトハイルハーン(2900m)登頂の朝

【2011年：モンゴル】

アルタンウルギー

トピックス（年次晩餐会）

2011.12.03　特別表彰される實川欣伸氏

2016.12.03　挨拶する新入会員の大島わかなさん

ハイキングセミナー

2011.11.27　見月山

2015.12.13　沼津アルプス

2017.06.04　見月山

2019.06.02　天城八丁池

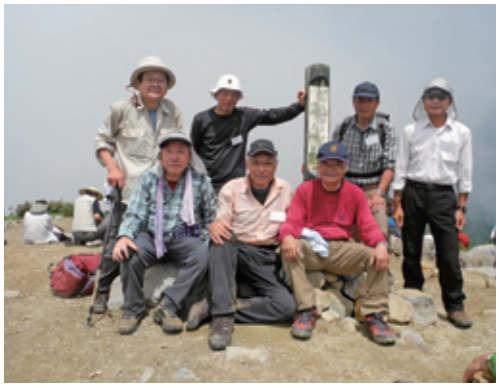
山の日記念　親子登山

2018.08.18　富士山宝永火口

2019.08.10　山伏

交　流　会

4支部(山梨、信濃、越後、静岡)



2012.07.23　焼岳北峰

2017.05.21　田部重治碑、西沢渓谷

神奈川支部との交流

2017.11.19　長者ヶ岳

2017.07.14　大根沢山

懇　親　山　行

2010.11.14　七ッ峰

2012.11.11　四尾連湖

2013.05.26　下双子山

2015.01.30　山伏

2015.10.25　黒法師山行(バラ谷の頭)

2016.11.27　富士見岳

2017.06.11　稲又山

2019.11.16.　黒沢山

懇　親　会

2011.12.11　みかん狩り

2015.01.11　新年会

不盡

創立70周年記念誌

公益社団法人 日本山岳会
静　岡　支　部

題字の謂れ

題字　不盡（ふじ）　　牧野　衛 書

不盡は富士の古名、万葉集巻三、山部宿禰赤人の望不盡山歌一首井短歌でよく知られている。

富士の語源は、アイヌ語のフチ（火）にあると言われる。天空にまで達する純白壮麗な山頂から赤熱の炎を噴き上げる富士山に、古代の人びとが深い畏敬と篤い信仰の念をいだいたのも当然のことと思われる。

題字を書いて下さった牧野衛名誉会員（会員番号3194）は、第２代静岡支部長として昭和30年代の困難な時期の支部運営に多大な功績があった大長老である。90才を越えても現役登山家として活躍されたが、平成19（2007）年６月、101才の天寿を全うされた。

本文は、静岡支部会報「不盡」の名付け親である安間　荘永年会員（第４代静岡支部長、会員番号5576）が、50周年記念誌に執筆されたものを一部編集して転載した。

目　次

静岡支部創立70周年を迎えて　日本山岳会 静岡支部長　有元　利通　4

静岡支部創立70周年に寄せて

日本山岳会会長　神奈川支部長　越後支部長　5

歴代支部長の一言　7

1．静岡支部20年を振り返る　9

前支部長　大島　康弘

2．私の足跡

- 厳冬期大井川源頭回廊山脈の縦走　小川　正育　18
- 古い山日記から　白鳥　勝治　28
- 南アルプスと毛無山の思い出　加田　勝利　37
- ヒマラヤの白い風　青野　興喜　41
- 生かされ、生きる、生涯の山　實川　欣伸　44
- 中央分水嶺縦走　大島　康弘　53
- 邂逅の山「サラグラール西壁」　永野　敏夫　60

3．山旅への誘い　67

- 渓谷美と歴史を訪ねる黒部川「下の廊下」　諏訪部　豊

4．随筆　78

- 狩猟　静岡支部会友　山崎　郁郎

5．特別企画　83

アンケート「静岡支部に期待すること」

6．文珠山荘物語　85

建設から寄贈まで　諏訪部　豊

こぼれ話　「泣かない犬：タロー」　増田　孝治

7．資料　92

- 年表
- 静岡支部在籍者名簿
- 静岡支部会員の出版物一覧
- 静岡支部会員の海外遠征史
- 静岡支部会報発行状況

8．編集後記　編集委員長　長野　和義　122

静岡支部創立70周年を迎えて

日本山岳会静岡支部　支部長　有元　利通

静岡支部は昭和25年２月に誕生し、今年、令和２年２月26日に満70周年を迎えました。初代支部長に大室貞一郎氏を迎え、第二代・牧野衛氏、第三代・山本朋三郎氏、第四代・安間荘氏、第五代・大石惇氏、第六代・児平隆一氏、第七代・久保田保雄氏、第八代・大島康弘氏、そして私で九代目になります。長い歴史です。この間、支部会員、準会員、会友として338名の個人と団体の方が支部に関わり活動されてきました。

そのうち、団体会員として現会員の静岡大学山岳部の他に、静岡城内高校（現、静岡高校）山岳部、掛川西高校山岳部、山の会「ラカポシー」の３団体がありました。個人は334名の方が静岡支部会員として活動されました。これまで支部活動を盛り上げて頂いた会員の皆様に、故人となられた方、退会された方を問わず、改めて敬意を表し厚く御礼を申し上げます。

日本山岳会は平成24年４月に社団法人から公益社団法人に変わり、かつてのサロン的雰囲気を残しながら、広く公益事業にも力を入れる会になりました。静岡支部でも公益事業としてハイキングセミナーや「山の日」記念事業としての親子登山や他の団体との共催する形で「南アルプス写真展」等を実施してきました。

三代目・山本朋三郎支部長の時代からは、各支部長の意向に従って海外登山も行われるようになりました。今年も70周年記念事業の一つとして海外登山も行い、今後も海外登山を継続していきたいと考えています。

当支部では、平成12年11月に支部創立50周年を迎え『創立50周年記念誌』を発行いたしました。その後の20年の活動は公益社団法人化に加え、平成28年の「山の日」制定などで登山が一般市民により身近なものになって来ました。また、オリンピックを控え登山のスポーツ化が一段と進む状況にあります。そのことは若い会員の増員につながる要因にもなっていると思います。まだ道半ばの状況ですが、この『創立70周年記念誌』の発刊がその牽引力になればと思います。編集にも若い会員が加わり、新しい会員の声を聞くことが出来たことも大きな喜びです。

今後、新しい人を迎えて80周年、90周年、100周年を元気な活発な支部として迎えられるように会員一同奮闘していきたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

静岡支部創立70周年に寄せて

日本山岳会　会長　古野　淳

このたび、創立70周年を迎えられ、心よりお祝いを申し上げます。ひとえに70年と申しても、戦後復興の最中、登山活動がようやく再開された頃の創立で、ご苦労の連続であったかと拝察いたします。

私も生まれる前のその空気はわかりませんが、先輩方の強いお気持ちの上に今日の日本山岳会が存在すると思いますと、背筋の伸びる気持ちです。静岡という土地で、富士山の話題なしでは語れません。私も仕事柄、東京から富士山に足を向けて寝られないほどの存在でもあります。冬の富士山で雪上訓練を行った学生時代の経験は、今日の基礎になったことに違いありません。幾度かの遭難事故遭遇では、冬富士の怖さを,身をもって理解しているつもりでもあり、学生たちには毎年初冬に口を酸っぱくアドバイスしております。

宗教登山としての富士登山は多くの人が知るところでございますが、英国初代公使、ラザフォード・オールコックの富士登山記録を読んだ時は考えさせられました。幕末の1860年桜田門外の変の年、100人もの奉行他サポートがついて、高輪の東禅寺にあった公使館から馬で箱根を越え、台風をやりすごして村山道より９月10日に登頂。山頂でユニオンジャックを掲げ、女王陛下に対してピストルで21発の祝砲を上げ、ゴッドセーブザクイーンを歌ってシャンパンを開けるという儀式を行っています。山頂ではクロノメータ、六分儀、温度計を使って、緯度経度、気温、標高を計測し、詳細な学術記録を本国に持ち帰るという、当時の日本の科学技術レベルでは考えられない行動を通常業務としてその当時にやっていたことに驚きました。そして帰路、熱海で出迎えるはずの戦艦カミラ号が函館から出航して台風で遭難行方不明になった事実など。知らなかった記録に驚くばかりで、その後のアーネスト・サトウの南アルプスの登山記録など、夢中になって読んだ記憶があります。黎明期の日本の登山界では、競って未知の南アルプスの記録をねらっていた記録が残っております。

冬の伝付峠から北岳への縦走や、塩見岳で暴風雪の経験等、楽しい思い出、しょっぱい思い出もございます。山の大きさ、深さは他に比べるものはなく、物理的に人を遠ざけていることが結果的に原生自然を残すことにもなっており、そ

の地下深くを新交通システムがとおることになるとは夢にも思っておりませんでした。

丹那トンネルが水脈を切ってしまい、丹那盆地では湧水がなくなってしまったことを、ジオパークで知りましたが、同じ過ちを起こさないことを祈るばかりです。県民性なのか、穏やかな方々が多い中で、しかしながら南アルプスで鍛えた支部の方々がヒマラヤやカラコルムを目指した歴史は、今日の活動の心のよりどころになっているのではないかとも思います。若い会員の中からさらなる高みを目指す登山家が出てくることを期待しております。

神奈川支部　支部長　込田　伸夫

此度は静岡支部創立70周年、誠におめでとうございます。静岡支部様は私ども神奈川県の隣の県ということもあり、過去何度か合同の山行をさせていただいたことがありますが、長い伝統を持つ静岡支部は企画や行動の手際の良さは非常に優れていて、さすがだと関心した思い出があります。私たち４年に満たない若い支部として大いに学ぶところがあり、今後とも多くをご教示いただきたく思います。

日本の山岳会において、数々の輝かしい功績を残してきた日本山岳会静岡支部の益々の発展を心から祈念する次第です。

越後支部　支部長　桐生　恒治

有元支部長のリーダーシップで静岡支部の活発な活動が、非常にうらやましく越後支部の参考とするところです。確か山本良三さんが記念講演をされると記憶しておりますが、学生時代にいろいろご指導を受けた方です。

ご盛会と貴支部の益々のご発展をお祈りいたします。

歴代支部長の一言

「不盡」の謂れ

支部会報の題字の謂れについて、原稿を頂いた。その詳細は紙面の都合で不盡No.87号に掲載します。

第４代支部長　安間　　荘

三動

山登りには人間が生きてゆく過程での大事な三動が詰まっている。

それは「行動」、「運動」、「感動」である。

第５代支部長　大石　　惇

ＪＡＣ支部70周年

50周年の記念式は平成12年11月、静岡駅前のビルで開かれました。以来20年、壮健だった創立会員の諸先輩方も多くが鬼籍に入られました。

昨秋には創立時の常任委員で、自宅医院に支部事務局を置いた塩田一二さん（後に退会）も99歳の天寿を全うされました。

富士山、南アルプス、そしてヒマラヤの高き嶺へ…。多くの足跡を印した先輩岳人たちに敬意と感謝の意を表しつつ、70周年を皆さんとともに祝いたいと存じます。

第６代支部長　児平　隆一

日本山岳会員として

私と静岡支部との縁が始まったのは東京での学生生活とその後の就職活動を終えて帰郷した50年ほど前のことです。富士市内で整形外科医院を開業されていて日本山岳会の会員でもあった田辺恵造先生と誘いあい静岡の例会に参加するようになってからです。その当時の支部長は山本朋三郎さんでした。

私は1979年に静岡県山岳連盟が編成したネパールのアンナプルナⅠ峰（8091m）登山隊、1997年には静岡市山岳連盟が計画したパキスタンのブロードピーク（8051m）登山隊のメンバーとして参加することが出来ました。また富士市では日本薬剤師会の会員として処方せん調剤による医薬分業の確立のために、薬剤師としての使命を果たすべく全力を注ぎました。

今後も　スポーツにも　あるいは仕事にも命ある限り活動を続けてゆきたいと思っております。

第７代支部長　久保田保雄

70周年記念誌発刊に寄せて一言

静岡支部創立70周年、おめでとうございます。

1983年入会し、37年間JACにお世話になり、多くの知己を得、様々な山に登ることが出来ました。巡り合えた幸運に感謝し、JACの益々の発展をお祈り申し上げます。

第８代支部長　大島　康弘

青春とは人生のある時期ではなく心の持ち方を言う

（サミュエル・ウルマン　1840～1924　アメリカの実業家）

静岡支部20年を振り返る

前支部長　大島　康弘

◆始めに

過去20年の歳月は支部に大きな変化をもたらした。月に一度の座談会が支部の主な活動であった当時からは隔世の感がある。ITの普及に呼応するかのように支部の活動も忙しくなり、イベントが目白押しである。最近は会員歴の浅い会員の活躍が目立つようになり、静岡支部は新たな時代に移行した。

支部創立70周年の節目に、支部の20年の歴史を改めて振り返り、先人たちがどのような思いで支部を運営し、今日に至ったのかに想いを致し、今後どのように継承発展させるべきか、この記録が伝統ある日本山岳会静岡支部の将来を考えるよすが(縁)となれば幸いである。

◆主な出来事(2000-2019年)

2000年４月　支部設立50周年を記念企画
　海外遠征登山第１回、雪山(3884m、台湾)登山、参加者：10名
　11月　支部創立50周年記念集会　出席者：70名
　講演：西丸震哉会員(3059)　『山で出会った様々な動物たち』
　ニッセイ静岡駅前ビル、井川青少年自然の家泊。山伏登山
　11月　50周年記念誌『不盡』発行
2001年10月　海外遠征登山第２回、雪岳山(ソラクサン)(1707m、韓国)　参加者：6名
2002年３月　支部会報『静岡支部通信』を『不盡』と改め第51号発行
　４月　『日本山岳会静岡支部報第１号～50号合本』発行
　８月　海外遠征登山第３回、天山山脈の未登頂無名峰(5192m)チャウカラガイムスターク(仮称)、中国新疆ウイグル自治区　4150mにて登頂断念。登山隊長：大石惇支部長(5834)、副隊長：久保田保雄会員(6270)外隊員：９名
2003年　日本山岳会百周年記念『新日本山岳誌』発行　静岡県の山133座と９峠を支部会員19名が執筆。
2004年７月　海外遠征登山第４回、アスラルトハイルハーン(2751m、モンゴル)

登頂、参加者：10名
2007年５月　第３代支部長　山本朋三郎会員(3313)逝去。86歳
５月　第６代支部長　児平隆一会員(9580)　就任
６月　第２代支部長　牧野衛会員(3194)逝去。101歳
2009年５月　第７代支部長　久保田保雄会員就任
2010年９月　静岡支部創立60周年集会、184名出席
シンポジウム：「静岡県の山」
①『富士山大量遭難』安間荘第４代支部長(5576)、八木功会員(6737)
②『南ア深南部の自然保護』塩沢寿雄氏(県岳連)、加藤正俊氏(県岳連)
③『南アの鹿の食害』鵜飼一博会員(14433)、原田勉氏(市岳連)
講演：山際壽一京都大学大学院教授（現 京都大学総長）
『アフリカの山とゴリラの魅力』　あざれあ
2010年９月　支部創立60周年記念山岳展：会員保有のコレクション98点、
入場者763名　静岡市民ギャラリー
2011年７月　海外遠征登山：アルタンウルギー(2656m、モンゴル)登頂
参加者：８名
2011年12月　實川欣伸会員(14228)　JAC晩餐会にて富士山1000回登頂
会長特別表彰。
2013年４月　第８代支部長　大島康弘会員(9379)就任
10月　第29回全国支部懇談会静岡大会　参加者：179名　ホテルアソシア
記念講演：
①長田義則(5465)会員『日本山岳会の今昔』
②安間荘第４代支部長
『富士山におけるスラッシュ雪崩と雪崩による大量山岳遭難事故』
③児平隆一第６代支部長『大量遭難事故その報道と波紋』
懇親山行：①「富士宮新５合目から御殿場口新５合目へ」
②「２合高鉢から西臼塚へ」　③日本平・久能山
2014年５月　第４回中部ブロック４支部交流会
講演：①山口康裕会員(11375)『天城山の現状』
②加藤弘司会員(11575)『南アルプス南部源流域の森と人』
ホテル伊東ガーデン泊
懇親山行：①万三郎登山、②遠笠山登山
2014年９月　静岡県山岳４団体(市岳連、県岳連、静岡労山、JAC静岡支部)合同
で知事、市長に『リニア新幹線南アルプストンネル工事に関する申

し入れ書』を提出
2016年１月　荻野恭一会員(5466)所有の文珠山荘と敷地1000坪を日本山岳会へ寄贈
８月　『山の日制定記念山岳４団体合同祝賀会と写真展』
記念講演：①松島信幸飯田市美術博物館顧問『南アルプスの地質』
②野口いづみ会員(12105)『山の怪我と病気』
2017年１月　『日本山岳会静岡支部報「不盡」第51号～75号合本』発行
４月　第９代支部長　有元利通会員(9703)　就任
10月　文珠山荘碑文除幕式
2018年３月　荻野恭一会員逝去。104歳
11月　中部ブロック４支部合同交流会
記念講演：照内豊会員(5027)『松濤明氏について』美保園ホテル泊
懇親山行：満観峰ハイク
県内山岳４団体主催第１回南アルプス写真展、静岡市民ギャラリー
2019年11月　県内山岳４団体主催第２回南アルプス写真展、静岡市民ギャラリー

◆支部報

支部創立50周年記念事業(2000年実施)の一環として『静岡支部通信』第１～50号が『日本山岳会静岡支部報』として一冊にまとめられた。支部発足当時を記録する貴重な一冊である。

静岡支部の会報は初刊から18年間(1986－2005)は年４回の発行であった。西郷正郎会員(4986)(『北八ヶ岳の黒い森』の著者、ペンネーム千坂正郎)を中心とする『静岡支部通信』は優れた編集者に恵まれて、数ページながら旧き良き時代の先人たちの山への真摯な想いが語られている。

1995年、大石惇支部長就任の年から有元利通会員(9703)が編集長を引き継ぎ、デザインを一新して年２回の発行に改め、38～50号の編集を担当した。

支部創立50周年を機に『静岡支部通信』の名称を50周年記念誌『不盡』(富士の古称、題字は牧野衛第２代支部長(3194)の揮毫)にあやかり『不盡』に変更しようと大石支部長より提案があり、第51号(2002年春季号)より『静岡支部通信』を『不盡』と改め、編集を筆者が引き継いだ。

以後、事情があって片山健会員(12632)が第64号を担当し、再び筆者(第64～75号)、熊岡達雄会員(14124)(第76号)、永野敏夫編集長(9494)(第77～80号)、2017年より長野和義編集長(15666)に引き継がれ、現在に至っている。

第51～75号は『静岡支部報第２巻』として合本された。(2017年)

会員の貴重な体験から学ぼうと『シリーズ・恐怖の体験』の連載が2002年（第52号）より始まった。このシリーズは2008年で途絶えたが2015年（第78号）に復活し16話を数える。

また自分の登山を振り返る『山への想い』の連載が2010年（第67号）に始まり、現在まで13名が執筆している。2017年からは新たに『私のお勧めの本』の連載が始まった。今後も読み応えのある品格高い内容を期待したい。

さて、過去20年の『不盡』の記事で特筆すべきは『静岡百名山、制定に関する考察二題』（第54号2003年秋）であろう。

静岡県でも百名山を制定しようという論議が起こり、これを憂えた大石支部長、永野敏夫会員（9494）が静岡百名山制定反対の論陣を張り、この記事は本部の編集委員の目に留まり、JAC本部会報『山』に転載された。

児平隆一会員（9580）が『「静岡百名山」顛末　反対運動の経過と成果』（第58号2005年秋）で報告した通り、知事委嘱の懇話会で議論の末、静岡百名山の制定は見送られた。

この件については以下に詳しく述べる。

◆静岡百名山棚上げ

山梨県は1998年、山梨百名山を制定し、群馬県でも2004年に百山が出そろうという各県の動きを受けて2003年２月、静岡県議会でも静岡百山制定の提案がなされ、石川知事は大いに乗り気で百山完登者には認定証の交付も検討したいと答弁したのがきっかけとなり制定の機運が高まった。

支部でも静岡100名山は話題になったが、大方の会員は批判的であった。大石支部長と永野敏夫会員に執筆をお願いし、『不盡』第54号（2003年秋季号）で『「静岡百名山」制定に関する考察二題』と題して論陣を張っていただいた。

大石支部長は「人間の存在以前から鎮座し、人の信仰の対象になって来た動かしがたい存在の山に、人間ごときが序列をつけて良いものか。山に言わせれば『思いあがるな、人間ども！』というだろう。私は世界でも、日本でも県内でも自分なりの基準の名山を作って、愛することには何ら異論を唱える者ではない。人が定めた百でなく思い出を刻みながら自分自身の心の名山を作って欲しい。」と訴えられた。

永野会員は、山梨県が静岡県との県境の山11座に『山梨百名山』と銘打つ統一規格の標識を新たに設置したことで、標識ばかりが目立つ山頂の景観を憂え、「行政が先導して決めるとなると“これが百名山だ”と押売的になり想像にタガをはめ

ることになる。百名山を推進する課は山梨と同じく観光課である。経済的効果、平たくいえば金儲けが主たるネライ。山を売り物にしてひと稼ぎしようという魂胆である。」と批判した。

二人の主張はJAC本部編集委員の目に留まり、会報『山』に転載されて静岡百山制定に反対する静岡支部の姿勢が全国の会員に伝えられた。

こうした状況下で知事委嘱の『山とツーリズムを考える懇話会』が2003年に発足した。当懇話会の進み行きは児平隆一会員の報告『「静岡百名山」のてん末、反対活動の経過と成果』（『不盡』第58号2005年秋季）に詳しく述べられている。

懇話会は土隆一静岡大学名誉教授を座長に12名で構成され、山岳界からは大石支部長、児平会員、滝田博之県山岳連盟会長（8276）等、三名のJAC会員が名を連ね、2003年９月に１回目の会合が開かれた。

百名山推進派が多数を占める中、児平会員は大石支部長、永野会員の主張を掲載した『不盡』第54号を出席者に配るなどして３人は精いっぱい制定に反対した。

児平会員は支部会員から寄せられたパブリックコメントなどの力強い援軍のお陰で「官の愚挙」を瀬戸際で阻止することが出来たと『静岡百名山の顛末』の中で述べている。

JAC静岡支部の制定反対の姿勢が大きな力になって、静岡百名山制定に歯止めをかけたことをしっかり記憶に留めておきたい。

◆浜石岳青少年野外センターの活用と《不盡文庫》消失事件

安間会員（5576）は支部長時代に定例会を掛川市生涯学習センター、富士市在住の田邊恵造会員（6304）の医院の一室を借りて開催するなど、普段出席できない遠方の会員に配慮された。大石会員は支部長時代に会員が親しく交流できる場として、支部のルーム創設に腐心された。

その二人が2001年10月、由比町役場を訪れて、浜石岳青少年野外センターを山岳博物館またはビジターセンターのような機能を持たせて施設の活用を図ってはどうかと持ち掛けた。JAC会員の所有している貴重な山岳図書や登山装備品を展示し、浜石岳登山者や自然愛好者に自由に閲覧して貰う。維持管理には支部会員も協力するのでJAC静岡支部の拠点として施設を活用させて欲しいと申し出たのである。

利用者が減って閑散とした施設の活用に由比町が反対であるわけがない。話はトントン拍子でまとまり、温めていた構想は実現に向けて動き出した。

折りしも、その翌年入会された由比町在住の豊島宏始会員（13625）と望月福次会員

(7736)の協力もあって、2002年には支部総会を浜石岳青少年野外センターで開催し、二火会と称していた月例会を同センター開催時は二土会として４、７、10月に開催する進み行きとなった。以後、同センターを会場にして年２回の二土会が定着した。

図書の寄付も徐々に増え、安間会員から古木の板に《不盡文庫》と大書した看板の寄贈があり、書棚も購入して山岳図書館としての体裁を整えていった。

更に2004年からは駿河湾越しに富士山が見える浜石岳南面の豊島会員所有のミカン畑で氏の厚意により、会員とその家族対象のミカン狩りが支部恒例の行事となった。

陽だまりで長谷川廣司会員(9286)の手打ち蕎麦、長田義則会員(5465)の汁粉が振る舞われたり、水野恵子会員(13453)と豊島会員のお嬢様によるオカリナ演奏、久保田支部長(6270)の奥様の琵琶の弾き語りなど楽しいイベントが催され、ミカン狩りは年を追うごとに賑やかになった。しかし、気の毒なことに豊島さんは体が不自由になりミカン狩りは2012年に中止となった。

今思えば、浜石岳野外センターを拠点に活動した６年間(2002～2007)は、中国西域の無名峰を始め海外遠征も盛んに行われ、支部20年史の中で最も輝やいた時代であったと言えるだろう。

話を《不盡文庫》に戻す。

2008年12月、ミカン狩りを楽しんだ後、定例会を開くべく浜石岳野外センターに移動したところ、建物は改装され、会議室の図書は書架ごともぬけの殻となっていた。全員狐につままれて戸惑うばかりであった。

翌日、大石支部長と豊島会員が同年11月１日静岡市に編入されたばかり清水区由比支所を訪ね問い質したところ、センターの改装は合併前の３月に行われ、担当者はその際、「表紙が汚い本などを処分した」とのこと。支所には『山と渓谷』と『岩と雪』が階段下のミカンケースに10数冊幾残っているだけであった。木製の立派な看板も購入した書架もただのゴミとして所有者に一切連絡なしに廃棄されてしまったのだ。

運の悪いことにこの年の７月二土会は雨で中止となり、１年近く、誰もセンターに足を運ばなかったので異変に気付けなかった。とは言へ、由比町も静岡市も図書の処分については事前に所有者である静岡支部に連絡するのが当然ではないか。

《不盡文庫》消滅を目の当たりにした時、由比町は静岡市との合併で消滅し、センターを引き継いだ静岡市も当事者意識はなく、ただ形式的に謝罪しただけで、責任の所在もうやむやなうち、《不盡文庫》は霧消したのである。

会員の高齢化に伴い、愛用してきた登山用品や収集した山岳図書を有効処分したい会員の声をよく聞くが、『南アルプス山岳図書館』が寸又峡温泉翠紅苑の主人

望月孝之氏と山本良三会員(5768)の尽力により2006年７月に開設されたので、取り敢えず貴重な書籍の散逸は免れることになった。

◆リニア中央新幹線問題

2014年９月10日、滝田博之県岳連会長、松永義夫市岳連会長(12828)、竹本幸造静岡県勤労者山岳連盟理事長とJAC静岡支部長(筆者)の４名が県庁を訪れ、池谷暮らし環境部長に面会し、川勝知事宛『リニア新幹線トンネル工事に関する申し入れ書』を手渡した。

静岡の山岳４団体が初めて歩調を合わせて行動した記念すべき日である。この日は県庁で記者会見が催され、山岳４団体の主張が翌日の毎日新聞と静岡新聞で報道された。

申入書はJR東海のトンネル工事の残土処分と湧水対策について杜撰であると断じ、

１)残土を大井川渓谷に投棄しないこと

２)大井川の水量を低下させないこと

を申し入れた。

「私たち静岡県の山岳関係者は南アルプスの大自然を享受してきた者として、その豊かな生態系を私達の子孫に手つかずのまま継承することが最も大切と信じるからです。」とその理由を述べている。同文の申し入れ書を後日、田辺静岡市長宛にも提出した。

その年の１月21日、「あざれあ」で初めてJR東海主催の公聴会が開かれた。毎秒２トンの大井川本流の減水、トンネル工事廃土360万㎥の処分、電磁波問題、在来新幹線の３～５倍の電力消費、等々に関して11人が懸念を表明したが、JRの対応はあいまいで誠実さに欠け、環境アセスメントもおざなりで公聴会は紛糾した。

リニアのトンネル工事が南アルプスの自然破壊につながることを危惧する専門家の反対意見が高まる中で、大自然の恵みを享受している登山者が何もしないでいいのか、支部の中でも危惧する声が高まった。

県山岳４団体が足並みをそろえて行動することを提案されたのは久保田保雄第７代支部長であった。四者の間でとんとん拍子に話がまとまり、支部会員でもある多家一彦県会議長(13015)が池谷暮らし環境部長との会見を手配してくれた。

申し入れ書提出に先立って、JAC本部に意向を問い合わせたところ、「理事の中には賛成派もいるのでJAC本部が関与することはないが、支部が自主的に行動することは差し支えない」との回答であった。 私見だが、内閣府公認の公益社団

法人としては体制に異を唱えるのを憚ったかもしれない。

それはさて置き、県の有力な山岳団体が共同でリニア新幹線建設に異議を申し立てたのは画期的であった。そして、これが機縁になって『山の日』のイベントも山岳４団体が共同で主催することが決まり、『山の日』制定記念講演会と写真展が2016年８月11日「あざれあ」で盛大に挙行された。その後も山の日のイベントは４団体の連携で継続している。

県の同意を得られないままJR東海は準備工事に着手し、2019年には二軒小屋ロッジと登山小屋はリニア工事関係者で満員となり、登山者はテント場しか利用できなくなった。

それに追い打ちをかけるように各地に災害をもたらした台風19号(2019/10/12)は二軒小屋に通ずる東俣林道を寸断し、現在は河床に作られた仮設道路でつないでいる。井川からの南ア入山は以前のように徒歩に頼るしかない状況だ。

筆者が支部長の頃、有志が提唱した『井川登山観光基地構想』（井川の西山平に駐車場とバスターミナルを建設し、井川の活性化と南ア入山者の足の確保を図る構想)はうたかたの夢となりそうな気配である。

当初、川勝知事がリニアに反対するのは新幹線静岡空港新駅構想をJR東海に認めさせる作戦だと冷笑する向きもあったが、川勝知事と難波副知事の一貫した姿勢に大井川の恵みにあずかる８市２町が呼応して減水を認めないと表明した。マスコミの論調も変化し始め状況は混とんとしてきた。

気候変動がこの世界を破壊する現実の脅威となった今、膨大なエネルギーを消費する(＝大量の炭酸ガスを排出する)リニア新幹線を建設することが次世代を資するとは思えない。地球温暖化防止の観点からリニア問題を検証する時、その答えは明らかである。

リニア構想の危うさに気づき、他に先駆けて2014年JAC静岡支部が山岳４団体と共に工事着工に異を唱えたことは、静岡百名山を退けた実績と同様、記憶に留めておきたい。

◆公益法人化のもたらしたもの

1957年静岡で行われた第12回国体が機縁となって山本朋三郎第３代静岡支部長(3313)が『鹿肉を喰う食う会』を開催したのが始まりで、５年後には『もみじ会』と改めJAC会長を始め、全国からそうそうたるメンバーが集う懇親会が静岡支部の主催で30年に亘って開催された。

30年間の詳細な記録を長田義則会員が『もみじ会 山と人』と題して一冊の本に

まとめられた。貴重な写真や著名な諸先輩の投稿が『もみじ会』が如何に愉しい会であったかを如実に物語っている。

1987年、二軒小屋での第30回集会を最後に『もみじ会』は幕を閉じた。以後、『もみじ会』は『秋の懇親山行』と名を改め、『もみじ会』にちなんで11月第２土日曜日、静岡支部会員が集い現在に至っている。

前置きが長くなったが、静岡支部はもみじ会の影響を色濃く残すサロン的雰囲気の支部であった。二土会と称した当時の定例会には細江町在住の鶴見敏彦会員(6371)が電車を乗り継いで欠かさず出席された。筆者も先輩の山の話を聞くのが楽しみで、その日を心待ちにしていたものである。

そのサロン的静岡支部が大きく方向を転換したのは本部が打ち出した公益法人化であった。古参の会員からは山は本来個人が思い思いに楽しむもの、山岳会に公益法人はなじまないと反対意見が多かったが、尾上会長始め本部役員の意思は固く、総会の議決を経て2012年４月、「公益社団法人日本山岳会」が発足した。

公益法人は支出の50％以上を公益的支出に当てなければならない。本部からの交付金のみでは静岡支部の財政を賄えないとの意見が出て、支部費を追徴するか否かで喧々諤々の議論になった。また、このままではJACは財政的に10年持たないと本部役員からは会員増の檄が飛び、静岡支部も会員を増やすことに躍起になった。

会員の努力、準会員制度の導入等により会員数の減少は微減に留まり、永年会員を中心に寄付金も増え、ここ２年ほど財政は黒字という。公益的支出を巡る当時の騒ぎは何だったのか、いま思い返すと虚しさを禁じ得ない。

公益法人化を機に静岡支部は公益事業委員会、集会山行委員会、会報編集委員会を発足させ、役員会がイニシアティブをとるようになった。定例会は談論風発の座談会から実務的な会合に代わった。本部は公益法人化に伴って70歳定年制を導入し、有識者、長老で構成する評議委員会に代わって理事会が決定権を握ることになり、先達の意見が反映され難くなった。公益法人化の必然的帰結であろう。

JACの特質は、現役を過ぎた高年齢者、山に登らなくても山に関わる文化・芸術に関心のある人にも門戸を開く懐の深さと活動領域の広さ、会員相互の親密な全国ネットワークの存在ではないだろうか。

IT社会の現在はめまぐるしく情報が飛び交い、支部活動も役員の努力のお陰でスピード感に溢れ活発化した。一方、定例会は登山やイベントの打合せが主となり、夫々の事情で活動に参加しない会員にとっては疎遠な存在となりつつある。

組織が時代と共に変化することは仕方ないとしても、山岳文化を育み語ることが主体であった頃の静岡支部のDNAが今後も受け継がれていくことを願う次第である。

私の足跡（１）

厳冬期単独縦走

― 大井川東俣源頭 回廊山塊、周回

小川　正育

はじめに

70周年記念誌に拙文を載せて頂くことになった。長野編集長に当時の新聞等への掲載文をそのまま提出したが、編集長曰く「もう少し詳細な行動記録が必要、また動物等との遭遇、冬季ならではの描写もあった方が良い」と助言を戴き再提出となった、山行記録は当時そのまま、そして数次にわたっての踏破だっただけに、写真やルート図も含めて膨大なものになってしまった、如何様にまとめて下さることになろうか。

還暦を迎えようとしている今、区切りの山行きを何処に。

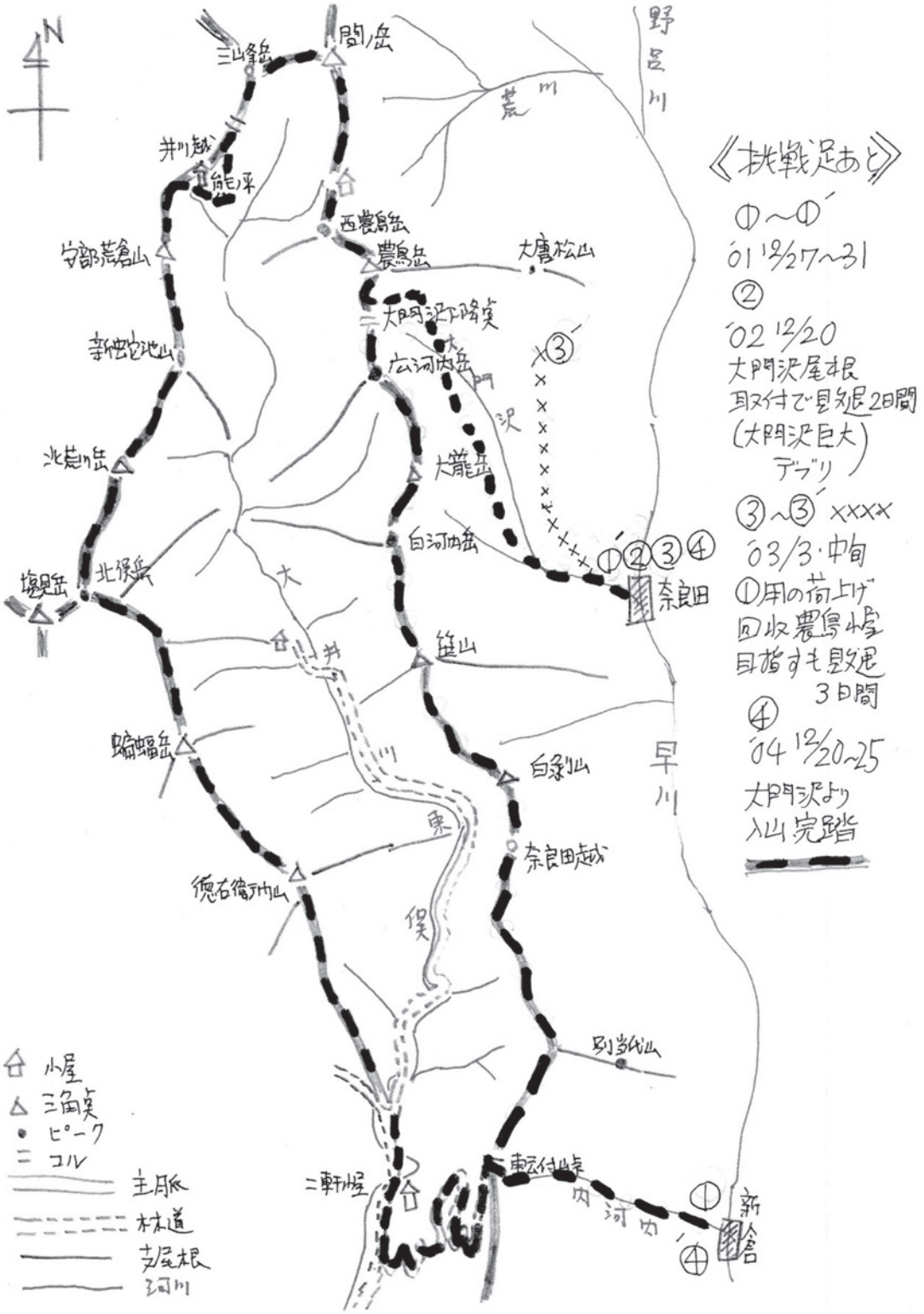
還暦、一つの区切りである。名古屋から掛川に移り住んで30年余、50歳を過ぎたころから集大成山行を何処へ！が常に念頭にあった。目標はこの地に来てから深く親しむことが出来た深南部～南ア主脈に自然と心が至った。そしてこの大山嶺に相応しい厳しさを伴ったものにと、60歳を前に燃える自分があった。方法として冬季単独縦走（名古屋を離れてからは冬季と言えど単独の山行が多くを占めた、またこれは山に染まり始めた頃の愛読書・加藤文太郎の影響はあろう）で光岳から甲斐駒迄、しかし今の私は10日以上の行動は不可能、そして辿りついたのが転付峠を起点に大井川源頭東俣を囲む回廊山塊の縦走だった。秋季に予定コースをトレース、’01 12／27～’02 1／3とし、新倉集落・田代発電所に向かった。燃料はEPIガス、足元は和カンジキ、２人用アライテント、時に54歳。

その１　（’01 12／27～31）

転付峠～白剥山～大籠岳～広河内岳～大門沢～奈良田

12月27日　曇り　田代発電所（8:35）－保利沢見張所（10:20）－転付峠（13:30）－2160mP（15:15）BP

１台の車も停まっていない田代発電所に、計画書を貼り付けた愛車を置き歩き出す。２～３日前の降雪で内河内川の河原は真っ白だ。左岸沿いに84もの橋が


N
三山峰岳
間ノ岳
井川越
能ノ平
西農鳥岳
農鳥岳
大唐松山
安部荒倉山
大門沢下降点
新蛇抜池山
広河内岳
大門沢
北荒川岳
大籠岳
白河内岳
塩見岳
北俣岳
奈良田
笹山
蝙蝠岳
白鳳山
奈良田越
徳右衛門山
別当代山
東俣付山
二軒小屋
新倉
野呂川
荒川
早川
東俣
内河内
小屋
三角点
ピーク
コル
主尾根
林道
支尾根
河川
《挑戦足あと》
①～①'
'01 12/27～31
②
'02 12/20
大門沢尾根
取付で見延2日間
(大門沢巨大
デブリ)
③～③' ××××
'03/3・中旬
①用の荷上げ
回収農鳥小屋
目指すも見延
3日間
④
'04 12/20～25
大門沢より
入山完踏

架かっておりツララのトンネルを経て二股になった保利沢見張所に着く、冷たい。尚も沢沿いに詰め小屋が現れる、沢から解放された山腹をジグザグに登れば尾根上となり僅かで転付峠着、左に笊ヶ岳に突き上げる大黒尾根が大きい。転付からはさすが白峰南嶺の主脈、烈風がまともに吹き付ける。ヤッケ上下を着て緩やかに上る林道を黙々と進む。前面に蝙蝠尾根の徳右衛門岳が裾を見せており、2000mを過ぎるころには蝙蝠岳も遠望できるようになった、回って来られるだろうか？　右に笹山が大きく迫る2100mで２つのピークを林道右上に確かめ下りに入る、ワッパを履く、林道終点が割と近くに臨まれる樹林帯にテントを張る、白剥山は近い！？

<u>12月28日　曇りのち雪</u>　BP(7:10)－白剥山(10:50)－2460m(12:55)－テント地(14:30)－2570mまでトレース作り－テント(16:40)BP

明けて主脈の概念を確かめながら登高を続け奈良田越へ到着、右尾根上に白剥山をやり過ごす。ここで林道は終わり樹林の尾根道となる、登り口には右に鉄のコンクリート基礎、赤布が正面に打たれておりカラマツの中木帯を緩やかに上りひとつのピークに着く。何！なんと！ここが白剥山である。転付峠からの延長12Kmの林道は水平という事でコースタイムを甘く見積もっていたが容赦はなかったのだ。先行きを考えるとガクッと来たが、気を取り直してラッセルを繰り返す。2570mピークを目指し所々急登が混じり始めると重荷ラッセルは厳しく空身で先行、再びの往復でルートを延ばす、幸いにも視界が良好で目指す笹山(黒河内)も右前方に聳える。今日中に笹山までと願うも腰までのラッセルに、今日は早めに設営し明日のトレース作りが賢明と高度2500mの中木帯に格好のテントサイトを確保、テントを張り終えた後、空身でルート作りに精を出す。やっと広河内が見えるところまできた！　30kgのザックは厳しく先の行程が思いやられる。空は明るくなった。

<u>12月29日　曇りのち雪</u>　BP(7:25)－笹山(10:15)－2700m(12:45)－広河内岳(14:30)－大門沢下降点付近(16:00)BP

先ず先ずの好天に感謝し昨夕のトレースに助けられ笹山を正面に臨む露岩帯へスムーズに到着。暫くは平坦になった尾根を辿り、のち樹林帯へとラッセルを繰り返す(昨日のパターンを多用)。やっと着いた笹山の山頂で「よっしゃ～」と気合を入れる。北西の方向に黒雲が現れ始める、今日は何としても大門沢下降点付近まで行こうと１日遅れの行程を気遣う。笹山から２つのピークを越し広河内が近くなる早川側に張り出した雪庇を持つ稜線と北西斜面の中木帯の潜りの少ない所を選んで一旦下り2740mPを目指す、目標１時と踏んでいたが少し前に到着約３Kmに１時間、やっと計算できるコースタイムを確保でき嬉しい。やはり上りが

少ない事で得られるコースタイムなのだ、足元はアイゼン＆ワッパ併用。

この辺りより北西面の埋まったハイマツ帯を選びながら広河内の末端2800mに到着、あと少しだ。広河内岳は烈風吹きすさぶ中、夕陽を背に立つ。農鳥岳西尾根が重量感のある白い尾根を東俣に落としている。この辺りは広大でガスられたら的確なルートファインディングが求められよう。大門沢下降点を確認し農鳥を目指すが何処まで行っても目印の鉄塔はなくここから農鳥への登りと思うコルに樺の大木がありぼろぼろの白テープがはためいている。ここが大門沢(夏道)の下降点ではなく急斜面の下り尾根への出だしであることを確認し二段になった早川サイドの雪棚を削りテントを張る。張り終える頃には夕陽も顔を覗かせるようになった。明日は農鳥～間ノ岳を目指し農鳥小屋が使えれば大門沢下降点をしっかり確認しておいてから、もう一晩ビバークしよう。熊ノ平から先はとても無理だ。白剥～広河内間の約14kmに12時間を要していることからして、13Kmの行程はスムーズにいって２日間は必要であろう。結果今回、私の力量からして目的の周回完踏には10日間は必要、果してどうか　('19の今、回顧するに、とても危険かつ未熟なプランであったことに驚きをもって知る。敗退は必然がもたらしたものと、感謝のみである)

<u>12月30日　雪</u>　BP(7:20)－2300m・沢のど真ん中(10:40)－沢芯・2200m(11:30)－樹林帯(12:00)－赤布発見(12:15)－大門沢小屋(12:40)泊り

目覚めればテントが入り口の方から1／3埋まっている。小用も我慢して明るくなるのを待って入り口を開放する。雪がどっとテント内へ入り込み掻き分け外へ出る。猛烈な風雪、視界も50mくらい。テントの北(上)側は８割方が埋まり、あと２時間もすればポールが折れただろう。決まった！ここでもう一晩を明かすのは風雪対策に終始するのみで体力の消耗のみ(粘る心がなく、弱いのだ)。ならば図るに昨夜の降雪50㎝くらいの内に安全圏へ逃げよう即ち大門沢下部樹林帯へ。完全装備に身を固め(足元はワッパのみ)数回耐風姿勢に身を屈め這うようにカンバの尾根に飛び込む。ワッパでも腰まで潜り知らず知らずのうちに足もとは固い雪を求めて左の沢へと入る。時々上部を仰ぎ表層雪崩を警戒しながら(弱層テストをして表層雪崩無し、と判断しての)鈍牛の如く下る、下る。2300m地点で急傾斜が二段になって落ち込んでいる“滝だ”右の急俊な細い尾根に逃げる。尾根途上から左を見る。二段の滝そのもの。尾根を斜めに伝い降り右の沢そして再び滝

の沢に合流し少し軽くなった雪を落としながら下り続ける。沢中の雪にうねりが目立つようになるとズボッと落ち込むようになり氷結した沢芯が出始める。雪崩の危険性は減ったが捻挫や骨折そして水没などの危険が潜みヤバくなってきた。外れたワッパを履き直し右の尾根に逃げる。部分的に60度はある細い尾根は時々６㎜のシュリンゲを垂らしザックを先に降ろして逃げ切る。やっと安心できる傾斜に出、樹間の白い雪面を拾いながら尚も下る。この辺りで大門沢本沢を左に特定できるようになるが、雪のうねりがさらに大きくなって沢芯の雪の詰まりが少なくなったこと物語る。沢へ降りないようにしなければ！

やがて細い沢が本沢と並行して降りてきているが、出来る限り尾根筋を外さないように下る。やっと傾斜も緩やかになり始めシラビソの高木帯に入る。嬉しい。５時間を費やし危険地帯を脱出出来たことに思わず「ありがとう」を絞り出す。そして右から小さな沢が合い、益々正規の（夏道）ルートらしくなってきた。そして初めて赤布に会う。何という嬉しさ、無事沢を下り切れたことを山の神に感謝する。赤布に出会って直ぐ、初めて３人パーティの入山者に会う。やがて前方にレンガ色の屋根、大門沢小屋に着いたことを知る、ありがとう。粘り切れない弱い心の結論の果て、経験に基づいた判断？により全力で沢伝いに下ってきたものの高見さん（広島山の会、同世代の傑出クライマー）の冬季大山での下降遭難の追悼がダブって、絶対遭難しちゃいけない！一心での下降だった、２度とやっちゃいけない！！　小屋では立川高校山岳部OBの忍田さんと村山さんの好意に心から感謝したい、他に１パーティ計５名の同宿者。

12月31日　快晴　　大門沢小屋（8）－奈良田（11）

小屋前から富士のご来光を拝めた寒い朝、昨夜の風雪が嘘のような快晴。白峰南嶺・黒河内～広河内のスカイラインを振り返りながら下山３Pで奈良田着。行き交ったのは１パーティのみ。一緒に下った。忍田さん＝村山さんには田代発電所まで送って貰い心から感謝したい。下山後早川温泉で汗を流し鰍沢警察へ下山届を済ませ帰途へ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ワンプッシュでは不可、荷上げを兼ねた偵察行　（’02 11／6～8）
大門沢より農鳥岳

初見で踏破が出来ようもなく、心身共の未熟さを思い知った。しかし“繋ぎ切り完踏を”と逆に闘志は燃えた…。農鳥小屋に後半の食糧をデポ、次回で完踏を期し大門沢より入る。（行動記録省略）

その2　（'02 12／24～26期間中、雪）　大門沢より挑むも敗退

食糧もデポし万全の状態で臨んだ。出で立ちはEPIコンロ、和かんじき、アライ冬用テントと前回と変わらず。深雪と大門沢を洗う、デブリ群に恐れをなす。（行動記録省略）

デポ食糧の回収、農鳥岳大唐松尾根、敗退　（'03 3／25～26）

昨年末の大デブリ&深雪に敢え無く敗退した同ルートの戦後処理、農鳥避難小屋のデポ品の回収に雪崩を避け大唐松尾根に登路を求めた。（行動記録省略）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その3　完結（'03 12／20～26）

大門沢～農鳥岳～間ノ岳～仙塩尾根～北荒川岳～蝙蝠尾根～転付～新倉

'01年末に端を発したノンデポ単独を試みるも、同時期北アに比べ降雪は少ないものの2000m超は深雪、そして3000mの稜線は、甘くはないよ、出直して来な！と跳ね返された４年間だった。干支が亥年である私は来年が還暦、ラストチャンスである。30kgの荷と共に登山口である奈良田温泉に向かった。

12月20日　晴れのち曇り　奈良田発電所（14）―大門沢小屋（16:50）

今日は大門沢小屋までとしている。１日目の行動を軽いものにするのは我々中高年としては前提条件、３年前のカンジキを履いて腿までのラッセルが嘘のよう、潜っても踝までで夕闇迫る大門沢小屋着、出で立ちはスノーシューとMSRガスストーブ、アライテントは変わらず。食事中にストーブのトラブルに遭う（MSRタイプ、タンクとポンプ栓の間がきっちり締まっていなかったため予熱中の皿から引火、プラスチックポンプ栓を融着させてしまいウンともスンとも動かない、結果加圧が出来なくなり致命的）情けない。手の平でタンクを包み込み圧力を加える真似事でしのいでいくしか無し。

12月21日　晴れのち曇り　大門沢小屋（7:15）－2450m（10:45）－
冬季ルート下降点（15：10）BP

出発が遅い、因はパッキングにあり。まだまだ未熟だ。ツボ足で支障なく川原歩きの後、シラビソ帯に入る。ここまでは夏道通し、ここからも同じく夏道、シラビソ帯のジグザグで高度を上げ１P、ここからスノーシューを履く、快適、傾斜にも強い。2450m、2555mとプレート表示をやり過ごしダケカンバの尾根に取付く。傾斜は30度はあろうか。４～５日前のだろうか？ここまで薄い下降跡ありカンバ尾根の直登もこれに助けられ感謝（夏道は2555mから左へトラバース、岩

礫を縫いハイマツ尾根の腹をたどる）ここで11時前、予定通り今日は農鳥小屋までかな？と思いきや雪崩回避のために採ったカンバ直登尾根は重荷で足元も崩れ体力消耗、空身になって足場を作り再びザックを背負って上る、何回も喘ぎ休む、やがてカンバも疎らになり上部が見渡せるようになる、空は鉛色になって来た。何としても目印の下降点まで登り切りテント場を確保せねばと吹き曝しの斜面をアイゼンに変え木柱のある下降点に登り切る。「ありがとう」を発し四方に手を合わせる、この感謝なくして前進はない。少し下って凹地にテントを張り稜線まで赤布５本を立ててテントに戻る。昨夜のガスストーブのトラブルに泣く思いで、手のひら圧で２時間の炊事を終える。

<u>12月22日　曇り時々晴れ</u>　BP（7:30）－農鳥岳（8:45～55）－農鳥小屋（11）－
間ノ岳（13:45）－三峰岳（14:35）－熊ノ平（18）BP

ストーブの不調で重苦しいスタート、今日は熊ノ平迄。白根２山を踏破の今日、曇りだけで風はない幸運に心から感謝。アイゼンを履き僅かで主脈へ立ち農鳥岳を目指す。夏道のマークは見えず右に入り込まないよう主尾根に沿い乍ら農鳥山頂着。間ノ岳、北岳が間近に迫る、山頂標柱を入れ自撮りの後、尚も主脈を行く。前方に仙塩尾根の樹林を交えた豊かで白い稜線が大きくなる。西農鳥からの下りは吹雪いていたらそのまま直進しそうな所、雪面を選びながら下るも急斜面に阻まれる。アイスバイルに持ち替えトラバースを試みるが20m下からは垂直に落ち込んでいる。Ｋ先輩の”危険は回避し困難は乗り越えなければならない”を思い出し、西農鳥のピークへ上り返しアイスバーンと化した夏道を後ろ向きで下る、50ｍ２Ｐ、やっと傾斜から解放され農鳥小屋へ降り立つ、そこは足元に２ｍ四方の赤い屋根を見せるだけの冬の光景、そのまま間ノ岳を目指す。この頃から風も出てきたが晴れ間も時々覗くようになり何よりのプレゼントだ。間ノ岳はさすがに大きく其処に見えているのに２時間を要して山頂着。「ここまで来ました、ありがとう」と四方へ合掌。はるか南には塩見、赤石そして聖が強風の中見守ってくれる、「気を付けて行けよ」と。眼下には源頭の大井川東俣が白い圏谷で広がる。間ノ岳から西に採り三峰岳を目指す。雪稜を時々現れる岩塊に注意しながら2999m・三峰着。ビバーク予定地熊ノ平が近くなる。ただ滝雲（尾根を滝の流れのように覆いながら垂れ谷を覆う雲）が熊ノ平付近の尾根をすっぽり覆っている。

30分ほどで尾根は平らになり三国平に出る、この辺りから先ほどの滝雲ガスの中に入る。コンパスを出し南南西と呪文のように唱え深雪を下る視界は100mほど、対岸が見えなくなり先程及び偵察時のイメージ確保が困難になる。一旦上り返し視界の回復を待つが見込み薄、コンパスを頼りに再度ラッセル開始スノーシューの威力(感覚的にワカンの２倍のパワー)は絶大だ、しかしイメージはだんだんに熊ノ平から遠のき沢が眼下に見える。それでも時折覗くようになった対面を度々凝視する。結果少し西(左)にずれていることを知る。こから集中しての井川越方面への脱出行。スノーシューを持て余し気味なるも助けられてのトラバース気味の斜め下降３時間、夕闇迫る井川越近くの沢に降り立つ。足元の安定しない沢芯の雪に苦戦、ほぼ源頭まで詰め、やっとテントの張れる小平地を確保６時。ライトを取り出し小屋を探すも見つからずテント張り終え７時、また絶望的な夜(ストーブ故障)が来た。ガスタンクは“手のひら圧”もとうとう受付けなくなりチョロチョロ燃焼のみとなり果てた。明日からの作戦を練る。燃料はメタ７本、これで２日間を何とかしのぎ二軒小屋まで行かねばと思うと悲壮感漂い、改めて未熟さを嘆く。就寝10時。

<u>12月23日　快晴</u>　BP(8)－仙塩尾根頂稜・2650m(8:45)－新蛇抜山付近(13:50)BP

ここ数年で一番うれしいことが今朝起こった、ガスタンクのポンプ栓を駄目もとでアイスバイルの刃で静かにこじ開けようとする、静かに、静かに何回か繰り返すうち、動いた！　この時の嬉しさ、何度「ありがとう」を言ったことか。一つの動作がこれほどまでに光明を与えるとは！　ややもすれば極限状態だからこそ得られた歓喜だろう。そしてテント越しに差し込み始めた朝日の何と温かいこと、しっかりと湯を沸かしラーメンを食べ結果８時出発となるが心は晴れ晴れ、そして快晴。昨夕の難渋下降の分析も完膚なまでに見渡せる朝だ、出だしの１mの誤りは100mの展がりとなってしまっていた。視界不良の怖さをまざまざと見る。感謝のみ。BP地からカンバ斜面をジグザグに登り稜線に立つ、ピークとなっており高度計は2650mを指している、一気に視界が開け北ア、中アそして南アのジャイアンツたち、とりわけ昨日踏んだ農鳥～間ノ岳が神々しい。ここからは一層深雪との戦いが待つ。幸いにも頂稜・尾根道が豊かな雪稜となっておりスノーシューが威力を発揮する。僅かで安倍荒倉岳を過ぎ南に延びる尾根を行く、だが雪の頂稜は乏しくなり突き出したハイマツやカンバに遮られ夏道に戻る。しかしここでもスノーシューに助けられザックは担いだままでしのぐことが出来る。東俣の全容が確認できる切開きからは夏道どうしにラッセルを繰り返す、トレールは獣との共存、彼らの踏み跡をスノーシューで辿る。やがて左に広大な分布のダケカンバ斜面を見、尾根どうしに登り新蛇抜山と思しきピークの登りに入

る。途中の緩やかな棚地で今日はここまでとする。コンロの回復と昨夜のハードワークの休養も兼ね早めのビバーク、シェラフを干ししっかりとストーブを炊く、元気回復。

<u>12月24日　快晴</u>　BP(7:40)－北荒川岳(8:45)－蝙蝠尾根分岐(10:20)－岩峰＆ナイフリッジ終了・2845mP(11:10)－蝙蝠岳(13:20)－徳右衛門岳手前ピーク(16:10)BP

今朝も快晴、もう感謝のみだ。仙塩尾根は北荒川岳で広い尾根となり一旦下って塩見の登りに吸収される。途中牛ほどのニホンシカとばったり、近づくに50度ほどの岩壁(荒川側)を横断し遥かの尾根に悠然と立った、凛々しい。この辺りから陽の当たっていない塩見や天狗岩のバットレスが荒々しく迫り何回かシャッターを切る。スノーシューをアイゼンに、ストックをバイルに持ち替え蝙蝠尾根分岐迄の雪壁と化した夏道に挑む。登ること20分でさしもの傾斜も落ち左に延びる蝙蝠尾根の付け根に出る。岩峰、ナイフリッジとアップダウンが手強そう。但し風がないのに感謝のみだ。西農鳥からの下りに続く核心部屈折点ピークまでのリッジに、落ちたらお終いだと呪文のように唱えながら、岩峰は東俣側の雪壁を、ピークに立ってからは後ろ向きのクライムダウンそしてナイフリッジはアイゼン刃先を分けてしっかり踏みしめ気の抜けない50分でやっと広い2845mPへ辿り着く。ザックを下ろし荒天なら何倍も苦労したであろうこの区間に感謝し、しばし休む。ここからは４年に亘って辿って来た転付からの大井川東俣源頭山嶺がグルっと大画面で見渡せる。四方に手を合わせ「ありがとう」と発す。

スノーシューに履き替え(30㎝程のプレートを後ろに繋ぎ、一層浮力が増す)、蝙蝠岳を目指す。程良くクラストした雪面は夏道と変わらぬコンディションを提供してくれ、グイグイと進む蝙蝠は近い。そして蝙蝠岳着、徳右衛門を目指す。この1時間で雪原は終わりカンバ帯に入る、固い面を拾いながら広い尾根を緩やかに下る。この辺りからは夏道通しが得策。カンバ帯に入って最初のピークからの下りは一面のカンバ幼木、この好天なのに喘ぐ。徳右衛門山塊迄のこの鞍部は平坦地になっており高木帯を目指し左に左に潜りながらもがむしゃらに前進。ワカンジキなら３倍は掛かっていよう。また繋げたプレートが有効だったのは言うまでもない。やっと徳右衛門岳に向けての上りとなる。西俣側の細い尾根にラッセルを続ける。僅かな登りなのに応える。徳右衛門岳までは諦め、一つ手前の

ピークにテントを張る。尾根は細くシラビソ帯、BP好適場は少なし。５時に日が沈む。

<u>12月25日　曇り時々晴</u>　BP(7:35)－徳右衛門岳(7:45)－蝙蝠尾根登山口(11:05～35)－二軒小屋(12:10～30)－転付峠(14:00)－田代発電所(16:45)－田代入口バス停(17:45)

先ず先ずの天候の朝に最終予定日を迎える。何と感謝していいのだろう。僅かで徳右衛門岳、四方に感謝。富士山を本山行で初めて拝む。正面には転付峠が招く。“頑張るぞ！”徳右衛門岳からの下りで偵察時に付けたペナントに導かれる。何という共有感、幸せを感じる。夏道どうしの下りはシラビソに付けられた赤マルで迷うことはないが急下降が続き、“落ちるなよ”を唱え気を引き締めての下降１時間ほどでアイゼンを外す。高度計は2100mを指す。傍らに気配！見るとキツネが右前方を斜めに行く「ここまで来れば一安心だよ」と言ってくれている。兎も角転倒しないようひたすら下る。暫くで発電所に出る。春のような陽気のもと、最後の急下降を終え無事蝙蝠尾根登山口に降り立つ。

登山口標を入れザックと共に残り一枚になったカメラのシャッターを押す。この山行で初めての大休止。先ずは辿ってきた山に手を合わせ深々と頭を下げる。そして身軽になった分重くなったザックを背負い直しゴールを目指す。PM6の奈良田行き最終バスが目標だ。誰もいない静寂の二軒小屋着、猿が左のコンクリート壁で迎えてくれる。水を補給し転付峠へ登り出す、雪がないのが何よりのプレゼントで嬉しい。転付から終点の保利沢川(沢沿いの登山道は80数ヶ所の橋が架かっているも老朽化が著しく危険)を明るいうちに通過すべくノンストップで田代発電所に着く、薄暮の５時前良かったなあ。ここから１時間、６時15分前にバス停着。６日間の集大成ストレッチを行い、バスを待つ。来ない！どうした！？ここからは３人の方の好意(奈良田発電所まで乗せてくれた青年、奈良田の白根館の主人＝ダム上に停車の車、バッテリーが上がり再び奈良田温泉まで歩く、泣けてきたね)に助けられ奈良田で車を回収後PM9に再び新倉に返ってきた。素泊まりで新倉の温泉に泊めてもらう。明けて外は土砂降りの雨、天の神に心から感謝、ありがとう！

思い返すに５年前の計画“ワンプッシュでの周回は到底不可能だった”。結果繋ぎ切りなるも目標を完踏出来たことは天地の神の思し召しだったのだ。単独の厳しさ、謙虚になること、何かあればお終い、最善万全の準備をすること、万物に感謝すること、多くの事を教えてくれた大井川東俣源頭回廊山塊を周回することが出来た。すべてに感謝、有難う。

私の足跡（２）

古い山日記から

― 冬の南アルプスの山々に残した足跡 ―

白鳥　勝治

2017年に傘寿を迎えてから人生の終焉を考えるようになった。自分が生きてきた足跡を残すには何があるかと考えたが、やっぱり好きでやってきた山歩きの足跡を見つめ直すのが良いと思った。そして、物置から古い山歩きの記録を書いたノートを探し出した。

私は1952年（昭和27年）４月に次郎長で名前が知れた港町、旧清水市に事務所を置く清水山岳会へ入会した。それからの山行記録を大学ノートに綴った「山日記」として、書き残している。その「山日記」には里山を始め多くの記録があるが、毎年計画され忠実に実行されていた清水山岳会の合宿記録の中には、興味深い話になるような南アルプスの冬山合宿の記録があった。それは次に記述した標高3000ｍ以上全ての冬山の記録である。

◎その１　北岳（3192m）（昭和28年12月31日～29年1月4日）

１月１日（晴）　先発隊に指名された二人の大学山岳部員の会員（渡辺さんと小泉さん）と私（当時、高校１年生）の三人で、前夜泊まった芦安の岩園館から夜叉神峠を越えて野呂川へ下った。釣吊尾根の取り付きに向かって遡行しているうちに、渡辺さんが、野呂川の飛沫が氷付いた丸木橋から、重い荷物の片桐のキスリングを背負ったまま滑って深みのある川へ転落した。（渡辺さんは最近見かけるようになったゴム底の新品の山靴を履いて来た）残った私達二人で何とか引き上げたが、気温が下がった谷間の夕暮れ時、渡辺さんは全身ずぶぬれで行動が出来ず震えて着物を脱いだ。その間に近くの河原へ急いでテントを張った。そして、濡れたものを乾かしながら本隊を待つことにした。（翌２日は、そこで停滞）

１月３日（晴）　本隊と一緒に一日遅れで釣り吊尾根に取りつき新雪に覆われた池山の池を通り抜けて亡魂（ぼーこん）沢の頭手前の針葉樹林の中にテントを張った。釣吊尾根の登りは急斜な山路で雪は少なかったが、きついアルバイトで全員がバテ気味だった。

１月４日（曇り）　北岳山頂のアタックは日帰りの支度で出かけた。ガスで景色

が見えない強い風の中を亡魂沢の頭へ登り、釣吊尾根をたどって八本歯を越え全員登頂した。記念写真を撮ってから頂を下りテントを撤収して池山の池まで下げた。夜は全員登頂の成功を喜び、祝宴を開いて遅くまで飲んで騒いだ。

・この合宿で忘れられない事は、大学山岳部員の渡辺さんが、飛沫氷で覆うはれて覆われている丸木橋で滑り野呂川に転落したが命拾いをしたことだ。渡辺さんは合宿にヴィブラムと称するゴム底の山靴を履いてきた。それは、今まで履いていたクリンカーやムガー等の鉄鋲打ち底の山靴と比べて雪が付着せず、氷の上も滑ららないと自慢していたのだが、それ以来この話はしなくなった。やはりヴィブラム底の山靴も氷の上は滑るようだ。

・この合宿で印象に残ったことは、たった一つ出合ったパーティーの静岡山仲間山岳会の田中照久さんが中心になって創作したという詞を、ロシヤ民謡の「ジグリー」のメロディーに乗せた「北岳の歌」として、帰る途中、夜叉神峠の小屋で教えて貰い一緒に楽しく夜を過ごしたことだ。最近になって、この歌の詞は、作者不明として伝えられていることを知った。

◎その２　悪沢岳（3141m）（昭和29年12月31日～30年1月4日）

12月31日（晴）　清水駅から５時17分の汽車に乗り、富士から身延線に乗り替えて身延駅で降り、西山温泉行のバスに乗り新倉で下車した。そこから重いキスリングを担ぎ徒歩で富士川の支流早川の支流、保利沢発電所がある内河内から伝付峠（2060m）を越えて大井川へ下り、日が暮れてから二軒小屋（地名）へ着いた。そして、年末年始だけ新倉の旅館「浜田屋」の隠居した親父が子供連れの若い女と一緒に来て営業する、大井川源流域の田代ダム横にある一軒家の山宿（二軒小屋の浜田屋）へ泊まった。

１月１日（晴）　宿の少し上流から大井川の吊り橋を右岸に渡り、すぐ急斜の山路を登って万斧（まんのー）沢の頭（2515m）へ幕営した。雪上で新人達に充てられた夏用のテントは底も付いておらず屋根の布が一枚で非常に寒く、グランドシートを敷いた床の上に教えられて持ってきた空の炭俵を敷いて米軍放出の寝袋で寝た。

１月２日（晴）　朝、寒くて起き、温度計を見たらマイナス20度の温度計が目盛りの無いところ迄下がっていた。又、ピッケル等の金属物に素手で触れるとベト付く事を始めて経験した。４時に起きたのだが雪を溶かして食事用の水を作るのに時間が掛かり、７時にテントを出て万斧沢の頭から千枚岳と丸山を越えて悪沢岳（3141m）の山頂を往復した。真っ白な赤石岳が光って美しく輝いていた。

・この山行で印象に残る事は、二軒小屋の宿で徒歩渓流会（とほけいりゅうかい）

の川上晃良氏と会った事だ。二軒小屋の親父が言うことには、この時期に東京から冬の伝付峠を越えて宿泊する登山者は少ないそうだが、二軒小屋の「浜田屋」に同宿した夜、川上氏は食事の席で笑いながら「東京には、徒歩渓流会（とぼけるかい）と言って、当会のような面白い名前の山岳会もあるのですよ」と前置きをして自己紹介をされた。確か若い谷崎さんと言う男性と、菅原さんと言う女性と三人で、聖岳へ行くと言っていたように思う。後日、先輩から徒歩渓流会の川上晃良氏は、有名な登山家であることを聞いた。

◎その３　塩見岳（昭和30年12月31日～31年1月5日）

新倉から伝付峠を越え二軒小屋に入って泊り、翌日、西俣を遡行し慣合（なれあい）の小屋場をBCとして、南稜（北俣尾根）から塩見岳へ登り、標高3047mの塩見岳山頂を往復する計画を実行した。

昭和31年１月１日（晴）　二軒小屋を５時20分に出て、西俣を三伏峠に向かって辿ること約６時間、小西俣の出合いにある慣合の小屋場に着いた。そこには同じような伐採人夫の小屋が何棟かあった。誰もいなかったがBCに使わせて貰った。伐採人夫の小屋は間口５間、奥行き10間程の平屋で、棟下中央に通り抜ける１間の土間があり、両側の出入口に１間の引き戸がある頑丈な造りだ。小屋内の板床には草で編んだ敷物が幾つか丸めてあった。昼飯を食べて、サポートで先に入った渡辺さんが荷揚げをしてくれたテントを担ぎ、南陵へ取り付いたが、雪が深く急登でなかなか進めず、予定の2680mのピークには到達できず針葉樹の林の中にテントを張った。

１月２日（晴）　塩見岳の山頂を日帰りで往復する予定で朝早く起きたが、食事当番の新人がもたつき朝飯が遅れた。気温が低く冷えたので、雪を溶かして水を作るのに時間が掛かったようだ。出発が遅くなり７時半を過ぎていた。森林帯の積雪は深く、登りも相変わらず急で厳しいラッセルが続いた。昼を過ぎても2680mのピークに届かず尾根の途中で時間が足らず引き返して来た。

１月３日（晴）　前日、ACよりアタックをした先発隊は、深雪のラッセルで時間が掛かり、森林帯を抜けたところまで行ったが、何人かのメンバーが勤めの都合で登頂を断念し、引き返してきた。そしてACを撤収し慣合の小屋場のBCまでテントを下した。慣れ合いの小屋場には本隊が入っていて合流した。テントがガリガリに凍り付いて開けず、全員で小屋に泊まった。小屋は広く相変わらず寒いので、土間で焚火をして部屋を温めて寝た。

１月４日（快晴）　先発隊で居残りの私は本隊と一緒にロングアタックをすることになった。午前２時起床し、３時に懐中電灯をつけてBCを出発した。ラッセ

ルもなく良く踏まれたトレールを、アイゼンを効かして順調に登り、11時前に塩見岳の山頂についた。無風快晴で見晴らしが素晴らしい山頂で食事をしていると、北側から山梨大学山岳部のパーティーが登ってきた。又、間もなく三伏峠方向から静岡頂山岳会のパーティーも登ってきた。山頂は冬とは思えないほど温かく静かで、素晴らしい景色に見とれて時間を費やしBCの慣合の小屋へ戻った時にはとっぷり日が暮れていた。

1月5日(晴)　慣れ合の小屋から西俣を下り二軒小屋から伝付峠を越えて帰ってきた。

・最近(2015年の秋)慣合の小屋場跡を見た。二軒小屋から西俣を遡行してリニア新幹線が地下を通過する予定で、渓流の枯渇が懸念される小西俣を静岡県山岳連盟の滝田会長と、JAC静岡支部の大島支部長の２人に声を掛けて現地視察に行った時の事である。嘗ての慣合の小屋場は、平成７年(1995)西俣に中部電力が建設した水力発電所の水取口堰になり景色が変わっていた。その水取口堰も既に半分程土砂で埋まり河原になって昔の面影は全くなかった。

・慣れ合の小屋場までの西俣は、両側の山肌の崩落の為か、頻度が高くなった土石流の為か、良く分からないが往時より川筋が荒れたと観察した。しかし、清流の渓谷小西俣は、流水量が豊かで両岸の山腹の崩落もあまり無く、ヤマトイワナが棲むと言われる自然豊かな美しい小渓谷であった。このような渓谷は自然保護としても大切にしなければならないと強く感じた。

◎その４　聖岳(3011m)(昭和31年12月30日～32年1月4日)

聖岳へ大井川源流域から登る一般ルートは、聖沢に沿って聖平を経て登る路が１本あるが、東海パルプの椹島の人達から、奥聖岳より東へ延びる大きな尾根に伐採作業に使う山路があると聞いていた。今年の冬は、そのルートを登る計画を実行した。

12月30日(晴)　いつものように清水駅を一番の汽車に乗って富士で乗り換えて、身延線の身延よりバスで新倉迄行き、そこから歩いて伝付峠を越え、二軒小屋に入り宿泊した。

12月31日(晴)　早朝、二軒小屋を発って椹島に下る。今回、計画した登頂ルートは、積雪期、雪崩のリスクが高い上河内岳北側の聖沢に沿った山腹を通る夏路を使わずに、東尾根を登る事を決めて来たが、大きな東尾根の取り付きが良くわからなかった。椹島に着いた時、幸いにも東海パルプの椹島事務所に同社の大倉山林に詳しい森川英雄さんがいて、夏路を使わず奥聖岳から東へ延びる尾根を登って聖岳の山頂へ繋がる作業路の取り付きを教えて貰った。その路は椹島から

牛首を越えて赤石沢の吊り橋を渡り、右岸に出て鉄砲(木の丸太を組立て谷へ落した伐採丸太を蓄えて水勢で流す為の堰)が見える聖沢の出合いの小屋場から、東尾根の支尾根に造られた作業路に取り付いて登り、「昇甲の小屋」と呼ばれている作業小屋を通り、東尾根に出て「熊合い」と呼ばれる場所へ繋がっている路だ。その路を登って「熊合い」の近くへテントを張った。しかし、山頂を仰ぎ見たが頂上はまだ遠く感じた。

1月1日(晴)　東尾根の積雪は思いがけなく多く、そのうえハイマツの上に粉雪が積もったところが多くあって、ワカンジキが上手く使えずラッセルに苦労をする。午後4時、白蓬(しろよもぎ)の頭の下の針葉樹林の中へテントを張った。間もなく後発隊のメンバーが二人空身で登って来て、ラッセルのアルバイトを労い,明日はテントを早く出て追いつき、一緒に登頂すると言って帰って行った。

1月2日(曇り)　早朝、テントを出発し奥聖岳を経て聖岳(3013m)へ登り、山頂で後発隊を待って全員で記念写真を撮り下山した。帰途、椹島で静岡踏岳会の人達と出会った。

・この山行での反省点は、大きな尾根だとは言え計画の段階で東尾根の取り付き口が当日まで分からずに行ったことだ。幸いその時、椹島の東海パルプの事務所に森川英雄さんが勤務していて、椹島から東尾根を経て聖岳の頂上まで続く白蓬の頭までの伐採作業路を教えて貰ったことだ。「昇甲の小屋」と言う作業小屋が在った東尾根には、その頃はまだ地図上に表示された登山路は無かったので大変に助かった。帰りに椹島へ立ち寄った時に会った森川英雄さんは、このルートを冬に登った記録は未だ無いと思うと話された。

◎その5　農鳥岳(3026m)(昭和32年12月31日～33年1月5日)

この年の冬、当会は12月の中旬に、富士山で遭難死した会員を出したので、先輩たちから「今年の冬山合宿は辞めたらどうだ」と言われたが、血気盛んな若い会員達は言葉に従わず、会の年間計画通り合宿を強行した。

12月31日(晴)　先発隊の私は、いつもの汽車に乗って三人(望月幸男、佐野仁)で奈良田までバスで行って、そこから大門沢を遡行して大門沢小屋に入り宿泊した。同じ日に山の仲間山岳会のパーティーも同じコースを入った。

1月1日(晴)　大門沢の小屋から泣坂を登って、農鳥岳から広河内岳を経て伝付峠や笊ケ岳へ繋がる稜線へ登り、広河内岳の下にある二重稜線の東側へ8人用のカマボコ型のテントを張った。そして先発隊のうち二人は東農鳥岳を往復して下って行った。独りでテントが広く寒いので、近くにテントを張っていた静岡山の仲間山岳会のパーティーの若い人達に来て貰い一緒に泊まって貰った。

1月2日(吹雪)　一日停滞する。降雪量が多いのでテント周りの除雪をしたのだが、８人用のカマボコ型テントは周囲が長く、一回り除雪をすると又、テントが暗くなるほど雪が降った。午後から停滞していた山の仲間の若い人達が来て山の歌を唄ったり、教えて貰ったり、お互いの合宿の話をして終日楽しく過ごした。

1月3日(吹雪後晴れ)　山の仲間山岳会の人達が下るので、一緒に後発隊二人(望月靖男、西郷和史)を迎えに下ったところ、二日前、泣き坂の森林帯で雪崩にやられた二人が、大門沢の小屋の中にうずくまっていた。西郷さんが足に酷い怪我をしていたので山の仲間山岳会のパーティーに参加されていた牧野衛さん(JAC会員)が事態を重く見て判断し、夜路を独りで奈良田まで下り、ダムの建設工事を請け負っていた建設同業社の現場からジープを出させて静岡まで走って当会幹部に連絡してくれた。

1月4日(晴)　雪崩にあった、望月さんのザックを雪崩で失い寝袋が無いため、山の仲間山岳会の人達が下山する時、山の仲間山岳会員の望月巌さんに寝袋を借りた。その日は「足が痛み歩けない」と言う西郷さんを一人小屋に置いて、望月さんと２人で腰ほどの積雪をラッセルしながら雪崩にあった場所に行き、デブリの淀んでいるところをスコップで横に長い溝を何ヶ所か掘ってみたが何も出なかった。又、雪崩が流れ走った路筋の表面は全て探したがザックやピッケルは見つからず手袋や帽子など、軽い物しか拾うことが出来なかった。夕方、小屋へ戻ると、清水山岳会のメンバー８人が、食料や救助用具をもって救援に登って来てくれていた。救援に来た全員が小屋に泊まり温かい食事を食べた後、私達三人は救援に来てくれた会員に一通りの報告をした。「今年の冬山はやめろ」と言われた忠告を聞かず合宿を強引に実施し事故にあったので、叱られることを覚悟していたがリーダーの先輩は穏やかな口調で明日の予定を決めてくれたので安心して良く眠った。

1月5日(快晴)　朝、リーダーの指示で手分けをして、怪我人を下し病院へ連れて行くチーム、広河内岳の稜線に残してきた８人用のカマボコ型テントを撤収するチーム、雪崩の現場へ行き、紛失物を探すチームと３チームに分かれて行動をした。デブリの中からキスリングが見つかった時、持ち主で酒好きの望月さんは、早速、ザックの中からポケットウイスキーの瓶を取り出して、「出振る舞いだ」と言ってラッパ飲みで豪快に飲み干した。一緒にいた人達は驚いたあきれ顔で見ていた。

捜索と撤収の作業は、それぞれ順調に進み夕方迄には全員が奈良田に下山した。怪我をした西郷さんは、清水の病院まで車で運び行きつけの医師に診察して貰った結果、足のひび骨折や打撲等あったが命にかかわるような大事に至らな

かった。
◎反省項目
・森林帯で雪崩に会うことは、全く想定していなかったが、雪崩は林の中の沢筋でも発生することを覚えた。今後は計画時にルートを決めるとき注意が必要だと痛感した。雪崩は発生点から100m以上流れ、緩斜面で止まっていた。遭遇した二人は全く幸運であり、命拾いをした。
・雪崩による遭難事故が分かった時、出会った人達が前日から一緒にいた知り合いの静岡山の仲間山岳会の人達で運が良かった。更に有難かったことは、その中に牧野衛さんが参加されていたことだ。当時、牧野さんは、竹中工務店静岡支店で役職をされていたと思う。稜線のテントから下り大門沢の小屋で雪崩に遭遇した当会の会員を見て、牧野さんは、ご自分の判断で夜間にも関わらず独りで奈良田まで下り、奈良田ダムを建設中の同業社の現場からジープを出させて、清水まで走らせて当会の幹部の知人へ知らせてくれたことだ。
後日、清水に住んでいた牧野さんのお宅へ、雪崩に巻き込まれた会員とお礼の挨拶に行ったところ、「森林帯での雪崩は未だ聞いたことは無かったが、死ななくてよかった」と言って逆にご馳走になって帰って来た。遭難はしたが、早い連絡が早い救援に繋がり大事に至らず大変有難く頭の下がる思いがした。
・森林雪崩の遭難は、幸い死者は出なかったものの同じ冬に二度の遭難事故は心に痛感した。遭難事故後、社会人山岳会の合宿は社会的な配慮もして、実行すべきだと真摯に反省せざるを得なかった。

◎その６　冬期の南アルプス全山縦走一回目
塩見岳(3047m)荒川前岳(3068m)中岳(3083m)赤石岳(3120m)
聖岳(3011m)（昭和33年12月28日～34年1月8日）
この冬、清水山岳会は南アルプスの冬山合宿のまとめとして、冬の全山縦走をリレー式で計画し実行したが、北部担当の仙丈ケ岳～塩見岳のパーティーが失敗し断念する。しかし、再度、挑戦する為、私達中部担当のパーティー４人(望月計市、小沢信夫、吉川たかし、白鳥勝治)は、予定通り聖岳までの縦走を敢行した。(紙面の関係で以下省略)

◎その７　二回目の全山縦走の冬山合宿
塩見岳、荒川前岳、荒川中岳、悪沢岳(昭和34年12月29日～35年1月5日)
・この年の合宿山行で清水山岳会は、南アルプスの全山縦走(仙丈ケ岳から、北岳、間ノ岳、三峰岳、塩見岳、小河内岳、荒川岳、赤石岳、聖岳、上河内岳、光

岳迄）をリレー方式で完遂した。参加メンバーは多少変わったが、日程は前年と同様仙丈ヶ岳から塩見岳までは学生と農業者、中央の三伏峠から荒川小屋までは会社や官庁勤めの者、赤石岳から光岳までは農業者や商業の店主等の会員を原則として12月20日過ぎから１月15日間を目途とに実行した。私は、12月30日～１月４日まで、三伏峠から入り荒川小屋まで行き、荒川三山を越えて二軒小屋へ下り、転付峠を越して帰ってきた。

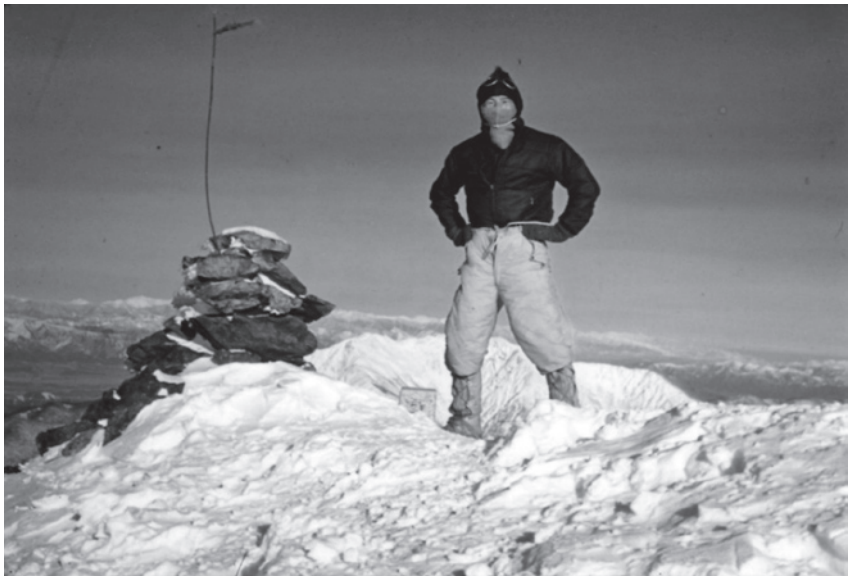
・この年代は未だ携帯電話の無い時代で、無線機を使うのにも免許が必要であった。従って、行動計画は予定通り遂行することが唯一の完成方法だった。今更ながら多くの会員を抱えていた山岳会であろうと、その果敢な計画・実行は評価に値すると思う。

◎その８　仙丈ケ岳（3033m）（昭和35年11月21日～24日）

戸台から北沢峠を越え野呂川へ下り、鎌尾根を登って間ノ岳を往復する冬山合宿の偵察のため、北沢峠へ幕営した。予備の日に仙丈ケ岳を往復する。

◎その９　北岳（3192m）中白根（3055m）間ノ岳（3189m）（昭和35年12月29日～36年1月5日）

・１日目、戸台から北沢峠を越えて、野呂川を遡行し、大仙丈沢の出合にBCを設営、２日目鎌尾根に取り付き、小太郎山にC1、３日目、北岳を越え中白根山にC2を張って、４日目間ノ岳の山頂をポーラーメソッドで往復する。（この記録は「岳人」に掲載）



◎その10　北岳、中白根山、間ノ岳、西農鳥岳(3151m)東農鳥岳(3026m)
間ノ岳集中登山の北岳ルート隊に参加(昭和37年12月29日～38年1月7日)

１日目、広河原までの林道の途中から野呂川へ下り、釣尾根を登って池山の池へ幕営、２日目、亡魂沢の頭へ幕営、３日目、中白根山の山頂へ幕営、４日目、間ノ岳山頂に８人用の、カマボコ型のテントを設営して、仙丈ケ岳と塩見岳から来るパーティーを待って、３パーティー揃った日に一緒に農鳥小屋へ全員泊まり、次の日、西農鳥岳、東農鳥岳を越えて、広河内岳から泣き坂を下る。

間ノ岳への集中登山を清水山岳会の冬山合宿として企画し、実行したが、農鳥小屋からの下山時に吹雪の中の無理な行動が災いとなって、酷い凍傷者を多数出した。特に両足の凍傷が酷く、歩くことが出来ない会員を大門沢の小屋から、先輩の望月靖さんと二人で、交代で背負い夕方から早朝までかかって奈良田まで下ろし、野木屋へ世話になった。清水へ電話をして、先輩に救援を頼み、次の日マイクロバスで迎えに来て貰った。そして、その日のうちに清水へ戻り、行きつけの医師に診て貰った。入院して治療することを勧められ入院して治療した結果、心配した指の切断は免れた。

◎その11　仙丈ケ岳(3033m)（平成23年12月30日～24年1月1日）

冬の3000mの山頂を踏みたいと希望する、女性会員の希望を聞き入れて登る(74才)。１日目、戸台より北沢峠へ登り幕営、２日目、仙丈ケ岳を往復、３日目下山した。北沢峠のテン場には、静岡の「こまくさ山岳会」や「藤枝山岳会」のテントがあった。

◎以上の記録の日程、所要時間、参加者、天候、記録は、全て白鳥の「山日記」に記載された記録である。(月刊雑誌「岳人」の投稿記事の一部には、ペンネームを使用したものがある)

(2019年、記)

私の足跡（３）

「南アルプスと毛無山の思い出」

加田　勝利

毛無山の中腹で、５人で五升飲んだ話

僕が山歩きを始めたのは19才の毛無山からで、中学の同級生に誘われ毛無山から、天子ヶ岳まで藪山を歩いて白糸の滝に暗くなって降り立った。１月で雪があり大変だったことを覚えている。当時は富士宮に住んでいたので、毛無山は朝霧高原の近くにあることは知っていた。山日記を見ると続けて７回も登っている。早朝のバスに乗り朝霧高原で下車し、毛無山頂へ。下山はいつも下部温泉駅であった。当時の山頂には売店があり甘酒など売っていた。一等三角点の山で人気があった。毛無山は南アルプスに次いで生涯数多くのぼった山で思い出がいっぱいである。２、３紹介してみる。20年前の12月31日、仲間５人で一升ビンを１本ずつ背負い、麓集落から不動の滝を過ぎて、三分の一程の地点にこのコース唯一の平地がある。現在はヘリポートが設けられている。早速手分けをしてマキを集め焚火を囲んだ。一人１本ずつ飲むことで16時から飲み出し、21時頃寝袋にもぐった。一升三合飲んだ仲間がいたが、一升飲むのはきつかった。元日の山頂は雪で真白で20人位が富士山をながめていた。12年前の毛無山はアサギマダラが100匹位舞っていた。毛無山の山頂は樹木がなく明るい山だ。山頂中程に一等三角点があり、富士宮側は眼下に朝霧高原が広がり、山梨県側は樹林である。山頂には以前は多くの高山植物が咲いていた。南アルプスから種がとんできたと思うが、現在はごく少なくなった。

その中で背丈の高いオタカラコウは、黄色い花をたくさん咲かせており、そのオタカラコウ

に100匹位のアサギマダラが飛んだり、止まったりしていた。12年前の８月中旬だった。その１年前にはチョウは１匹もいなかったが、突然のことだった。きれいなチョウで羽の模様の鮮やかさで知られ、春には北上し秋には南下すると言う。その後チョウは徐々に少なくなり５、６年後には全くいなくなった。

主杖沢と毛無山

富士山へ登るコースはいろいろあるが、大沢崩の右側を登る主杖沢が好きで何回も登った。毛無山の中腹で酒を飲んだ半年後の７月29日、宝永山荘を朝早く発ってお中道を左に入り、何回も来ている大きな主杖沢には１時間30分程で着いた。男性３人と女性２人の５人だった。山口県の女性は赤石沢遡行、信濃俣遡行と一緒に歩いた強者である。剣ヶ峰に出る主杖沢は、沢歩きは少しで岩稜を歩くので歩き易い。富士山登山コースの時間は４時間半から５時間だが、僕らは３時間30分で登った。あれから７年後県会議員や県の教育次長ら11名で主杖沢から剣ヶ峰に着くと、腕章をしたバイトの若い男に、ここは歩くルートでないと小言を言われた苦い経験がある。赤いペンキで大きく書いてある主杖沢入口の字を消すように約束したが、その後行ってないので分からない。おそらく消してないだろう。山頂から下って宝永山荘でひと休みして、男性２名とはここで分かれ、次の目的地の毛無山へ向かう。麓集落で仲間１名と合流し４名で15時に出発。当時は麓集落から不動の滝上部を渡り、山頂の北側に登り着くコースがあったが、半年前一升酒を飲んだ直登コースを歩くことにした。集落の外れにはゲートがあり、ここは右のコンクリート道が歩き易い。道なりに行きカレ沢を渡り地蔵峠のコースに入ると、すぐに毛無山の指導標があり、右手に入れば山頂までは一本道となる。太い杉や桧の林が終ると大きな岩の上を歩く。間もなく不動の滝展望台に着く。一服してからひとのぼりすればヘリポートのある平地に着く。５人で酒を飲んだなど話しながら急坂をゆっくり登って行くと、尾根が細くなり眼下の不動の滝へここからガラ場が下っている。富士山展望台を過ぎるとようやくルートも緩やかになり主脈に出る。10分も歩くと毛無山頂に17時30分着であった。ちょっと休み１時間15分で麓集落に下り着いた。富士のスーパー銭湯で汗を流し、かもしか小屋に21時30分着で、宝永山荘を４時30分に出て、17時間の主杖沢と毛無山は予定通り終った。

大井川西俣で山女釣り

山女釣りに初めて行ったのは、28年前の９月26日。大井川上流に一人で入った。大きい山女が釣れたので続けて３年同じ沢に入った。二軒小屋から15分も歩

くと大きく東俣と西俣に分かれるが、目的地は左手の西俣である。東俣を詰め、三峰岳と間ノ岳の鞍部を乗越すと両俣小屋に着く。昨年久しぶりに行ったが、へんちくりんな管理人、星美知子が未だいたので驚いた。70才は過ぎているが南アでいちばん評判が悪い管理人である。

東俣ではあまり釣れなかった。西俣で釣った30センチの山女は持ち帰り小さいのは沢に戻した。５、６匹釣り満足しながら家路に戻った。

15年程前仲間と畑薙ダムのバス発着所で一杯飲んでいた時、数人の釣り人がおりて来て、山女をさばいてサシミにして僕らに差し入れてくれた。かなり釣って来たようだった。畑薙ダムより上流に彼らも秘密の釣り場をもっているにちがいないと思った。南アルプスにはまだまだ沢山の山女はいると思う。

山女が沢山いる沢は赤石沢核心部の上流。下流は釣り師が入って魚影は少ない。奥赤石沢から百間洞の滝壺には30～35センチが沢山いるが、ここまで来て釣りをする人は少ないだろう。「不盡」83号に書いたように長島吉治さんが若い頃、ヘリコプターで放したためで、すでに50年は過ぎており、腹は真黄色で天然魚と言って良い。

僕は今でも６月末には仲間２、３人で山女釣りに行く場所がある。当日午後２時頃に釣り場へ着くと、休憩後30センチクラスの山女を１匹釣ったら野宿の準備を始める。小さかったらもう１匹釣ると言うパターンでやっているが、さもない流れの中で釣れるのが面白い。タキ火を囲み、四合ビンの日本酒とチューハイを飲むのが、大自然の中の大醍醐味である。持参した竹串に山女を２、３時間遠火であぶると頭から骨まですべて食べられ、これが楽しい。昨年は久しぶりに晴天だった。天幕は持参しないので、雨天の時はやっかいだ。翌日は釣りながら遡行し一人３匹釣りあげたら竿をたたむ。釣り場までかんたんに下れる沢で僕の秘密の場所である。

ヤマエイ長島建設　長島吉治さんとの出合

井川五郎ダムがある井川は人口450位の小さな集落で長島吉治（会員番号8998）は1933年10月17日生まれの86才、（株）ヤマエイ長島建設の代表取締役である。約10年の間に南アルプスの山小屋年代順に平成２年横窪沢小屋、平成３年県営聖平小屋、平成４年静岡市営百間洞山の家、平成５年県営茶臼小屋、平成６年千枚小屋、平成７年県営荒川小屋、平成８年県営赤石岳避難小屋、平成10年光小屋の８棟を造り上げている。どの小屋にも思い出はあるが、いちばんは茶臼小屋。信濃俣河内を遡行して小屋に着くと、まずは釣ってきた山女を手土産に渡すと、一升ビンを２、３本出してくれたことが忘れられない。数年続いたと思う。

最近では2010年８月６～31日、東京大学名誉教授中村純二先生当時89才と奥さんを案内し、横窪沢小屋泊り茶臼小屋に２泊し、仁田岳では南らんぼうに会った。翌日は上河内岳に登り先生はスケッチ、帰路長島建設に立寄った先生は元気で現在96才。

８棟のうち最後に出きた光小屋が建築中だった1998年８月７日、仲間５人で柴沢の吊橋から光小屋に着いた。夜はブルーシートの下で持参した酒をちびちびやっていた時、長島建設の望月かちどきさんが一升ビンを差し入れてくれた。僕らにとってはこんな山の中で貴重な酒を有難くいただいた。今年７月赤石岳の帰り長島建設に寄った時、かちどきさんのことを聞くと、80才は越え元気だが酒は全く飲めないと言っていた。あの時のお酒の礼を伝え帰路に着いた。

標高3100メートルにある赤石岳避難小屋は定員30名だが、いちばんたくさん泊ったのは88名だったと、管理人の榎田善行さんが言っていた。数ある山小屋、避難小屋でいちばん人気があるのが榎田さんの小屋だ。態々榎田さんに会いに来る人もいると言う。人気は人柄だと僕は思う。63才の時赤石沢核心部をぬけた付近で、左足に痛みを感じたがそれが疲労骨折だった。やっとのことで小屋に着くと早速酒を出してくれ、トイレに行くのが大変だったことを思い出した。小屋の建築費は約90,000,000円とのこと。茶臼小屋、光小屋、赤石岳避難小屋すべて(株)ヤマエイ長島建設が建てたものである。

光小屋

私の足跡（４）

ヒマラヤの白い風

青野　興喜

令和元(2019)年、11月末に満80歳になりました。遠い昔を思い出すと、盛岡商業高校山岳部の時代に冬の岩手山のお花畑で猛吹雪に遭い、テントの中に３日間閉じ込められ自棄になり、大声で「流れる汗を振り払い、心は遠くヒマラヤへ」なんて歌っていた時代がありました。

社会人になり転勤で東京から静岡に移住しました。日本山岳会静岡支部の定例会で、二人の先輩に毎月「ヒマラヤはいいぞ、チャンスがあったら行こう」と誘われていました。

ダウラギリ(8167㍍)

2001年３月で定年、その年の９月にその先輩に連れられて、初めてのヒマラヤ８千㍍峰、世界第７番目のダウラギリ(8167㍍)を目の前にした時、身体の震えが止まらなかったのが昨日の様に思い出されます。それから毎年ヒマラヤへ行くようになり、エベレストをはじめ８千㍍峰を何座か見ることが出来ました。

2006年８月、東海大学がパキスタンのカラコルムに位置する世界第２位のK-2(8611㍍)登山隊をサポートするトレッキング隊を編成しました。それに参加し、5300㍍のベースキャンプまで登りましたが、この時パキスタンの８千㍍峰５座を見ることが出来ました。世界に８千㍍峰は14座ありますが、これで12座見ることが出来、残りは後２座になりました。

８千㍍峰14座を見ることを目標にした訳ではありませんでしたが、残りがあと２座になると、是非見てみたいという気持ちが強くなりました。残ったのは、第３番目と第14番目でした。体力、気力のあるうちに第３位のカンチェンジュンガ(8586㍍)を、現在はJAC静岡支部の会員である長野氏と二人で見に行くことにしました。

2008年10月27日に日本を出発。カンチェンジュンガは、ネパール東部とインド国境にあるシッキムヒマラヤの中心をなす山群の主峰です。ヒマラヤトレッキングの中で、最も過酷で日数を要するトレッキングです。ポピュラーなエベレスト街道との違いは、山小屋の数が極端に少なく、全てテント泊という山行でした。4000㍍の高度に上がるのに、2000～3000㍍の山から谷に降り、吊橋を渡り対岸の山に取り付く高低差の激しい山行で、まるで毎日南アルプスを登っては下るという山行でした。そんな毎日でも尾根の上には部落があり、谷底にも寄り添うように数軒の家々があり、人々が暮らしています。子供たちは木を背負ったり、田圃で稲刈りを手伝い、牛を遠くの放牧地まで連れて行ったりしています。私は10代の頃に岩手の山村を歩いているような錯覚に陥り、１人自分の世界に入り込み、ただひたすらに足を前に運び、若き日に歩いた岩手の山々を想い出していました。

カンチェンジュンガ(8586㍍)南面(7110㍍)

11月９日、快晴、起床５時45分。昨夜寝違えたのか左首の後ろが痛い。外気温マイナス13度、テント内マイナス５度、足元が寒い。朝食後８時出発。カルカ(放牧地)4600㍍の広く長い緩やかな上りを歩くと息が上がる。ゆっくり、ゆっくりと登る。太陽が昇り暖かくなっても顔に当たる風は冷たい。谷を曲がるとまた山角が現れる、の繰り返しである。途中雪道になるもアイゼンを装着する必要もない。休まず登る。11時30分、尾根のピークにタルチョー(旗)の飾ってある仏塔に着く。高度5100㍍、この先の道は崩壊して前進は出来ないとのことで、この場所でのランチとなった。サンドイッチにハム、ゆで卵、完食する。抜けるような青い空、目の前にカンチェンジュンガ(南面)の山容がドンと迫り、圧倒される。私たち以外には、この山域に誰もいない。素晴らしい天気に恵まれ、今までの辛い登りも吹き飛んでしまう。正にこの日、この時、この瞬間である。360度ぐるりと広がるヒマラヤ山脈の真ん中に、この私は立っている。生命を頂いてから68年の歳月が流れていき、そして沢山の人に出会ってきた。一人一人の岳友の顔を思い浮かべ、誰か一人に出会えていなかったとしたら、この私は今ここにいないと、そんな思いが体の中を駆け巡る。カンチェンジュンガ南面に別れを惜しみつつ下山を開始。次は北面を目指した。

11月17日、ロナークからパンペマをピストンしてカンチェンジュンガの北面を見て計画は終わり、11月19日から下りの山行となりましたが、カンバチェン峠の

上で左手が痺れ、左足が上がらない。長野氏がこれはおかしいと気付き、ガイドと相談の上救助ヘリコプターを要請することになりましたが、3500㍍まで降りて下さいとのこと。安全を期して私はポーターに背負われて、グンサの部落迄降りました。翌日レスキューヘリにてカトマンズまで運ばれ、病院に直行しました。CTやMRIの検査の結果は、脳梗塞の跡が見られるとのことでした。幸い軽いもので、イギリス人の主治医が「ユウ　ラッキー」、「ハッピー」と握手をしてくれました。一日も早く日本に帰り治療しなさいと言われ、12月４日に帰国し治療を受けました。

カンチェンジュンガ北面（ベースキャンプ）

これで８千㍍峰14座の残りは１座となりました。2012年６月、チベット仏教の最大の聖地カイラスを訪れ、念願のシシャパンマ（8013m）を見ました。山容の美しいカイラス山は周回しました。荒涼の世界が続くこの地に数千人の老若男女の巡礼者が押し寄せます。数百年前から続くカイラス巡礼路は最も賑わうところで、五体投地をしながら巡礼する人もいます。カイラスの頂上付近に靴や服などが脱ぎ捨てられているのでガイドに訊くと、聖地に入る前に古い服を新しいものに着替えてお参りをするとのこと。チベット仏教の信仰の深さに改めて感心したり、感動したりしました。

2008年カンチェンジュンガトレッキングの時の脳梗塞は後遺症もなく現在に至り、ハードな山歩きを少し控え里山を歩き、孫とゲレンデスキーを楽しんでおります。

（2020年１月５日記）

私の足跡（５）

生かされ　生きる　生涯の山

實川　欣伸

【プロローグ】少年時代から自然が好きだった

中学２年生の夏休み仲間達と奥多摩の三頭山へ武蔵五日市駅から秋川沿いに歩き、日暮れにテントで寝、翌日檜原村まで歩きテント泊。村人に藁をもらい敷いて寝た。翌日、三頭山1531ｍに登頂。人生最初の登山だ。高校時代は磐梯山、奥多摩、上高地では夜、星空を眺めながらトランジスタラジオを聞きキャンプを楽しんだ。丹沢は夜のバカ尾根を星空に向かって歩き、大丸（注：この当時塔の岳と鍋割山の間にあった幕営地）でのテント泊が好きだった。35歳の時、沼津に移住。伊豆、箱根、愛鷹山系を家族で登る。1985年家族と最初で最後の記念に富士山に登る。記念写真には朝の影富士が写っていた。1990年研修生が富士山に登りたいと年に５～６回案内する。頂上で、登れたのが嬉しいと泣き伏す女性、下山時、「中国どっち？」と聞く女性、指を指すと子供の名を叫び涙ぐむ女性等、色々な思い出が残る富士山に夏になると自然に足が向くようになった。1993年台湾の登山家が富士宮市観光協会の招きで来日、富士山を４連続登頂した。その年、私は５登頂を目指した。１度目はカメラの蓋が空いてしまい記録が撮れず２登、２度目は台風の接近で風雨が強くなり３登、３度目で５登頂を達成した。これ以降の富士記念登山の記録は以下の通り。

中国人留学生と富士山頂

●記念登山

’94年　沼津千本浜～246～須山～富士宮～富士山頂　18時間

’94年　東京駅～東海道～国府津～246～御殿場口～富士山頂　43時間30分

’95年　親不知海岸～北ア～中央ア～南ア～3000ｍ峰29座完登～沼津千本浜　29日間

’97年　東京駅～東海道～箱根～御殿場口～富士山頂　43時間

’02年　下田和歌の浦海岸～伊豆半島縦断～須山～富士宮口～富士山頂　38時間

’03年　高鉢旧料金所～富士山スカイライン富士五湖～富士宮口～富士山　35時間
’05年　日本橋～東海道～箱根～御殿場口～富士山頂　43時間
’06年　下田富士（お姉さん富士）～伊豆半島縦断～須山～富士宮口～富士山頂
38時間
’07年　沼津千本浜～246～日本ランド～富士山頂　17時間
’08年　１日２登頂75日間連続１日１登または２登88日連続
１日２登年間108日
’09年　田子の浦海岸～村山古道～富士山頂　17時間30分
’10年　中岡亜紀 車いす登山ガイド（三浦ドルフィンズ）
’10年　田子の浦海岸～村山古道～富士山頂　17時間30分
’11年　大阪天保山～東海道～富士山頂　８日間
’11年　田子の浦海岸～村山古道～富士山頂　17時間
’11年　三浦ドルフィンズ東北の小中学生富士登山ガイド
’12年　田部井淳子 東北の高校生富士登山ガイド（吉田口）
’13年　田部井淳子 東北の高校生富士登山ガイド（富士宮口）
’14年　田部井淳子 東北の高校生富士登山ガイド（富士宮口）
’14年　田子の浦海岸～村山古道～富士山頂（伝説の記録更新）　16時間
’15年　御幸の浜～明神ヶ岳～明星ヶ岳～金時山～丹沢山系～須走口～富士山頂
39時間
’18年　御幸の浜～明星ヶ岳～金時山～御殿場口～赤岩八合～万年雪山荘
2000回目登頂　31時間

上記の記念登山の中から、いくつかを紹介します。

’95年７月17日～８月14日　日本横断登山　７月中旬、上越地方は100年に１度の大雨に見舞われていた。17日朝、親不知駅着。雨の中、親不知海岸へ歩く。海岸の公園で、東屋にいた方に栂海新道の情報を聞くと、「人の歩けるところじゃない」と近くのホテルに泊まる。オーナーが北アの船窪小屋を所有していると、栂海新道は水場が少ないから、天気が悪いと喉が渇かず水に困らないから良いと言う、18日４時にスタート。霧雨の中、尻高山に登り、昼頃白鳥山荘着、昼食、着替えし出発、沢か登山道か分からない程の水の流れだ。日暮れ寸前栂海山荘に着く。荒れた無人小屋で一晩中、鳥だか獣の大きな鳴き声に悩まされる。19日は雨がやみ霧の流れる中、残雪を踏みしめ犬ヶ岳に登る。黒岩平のあたりは残雪の中に水芭蕉や高山植物が咲き乱れ、この世の楽園だが、雪解け水の流れは爆音のようで恐ろしいようだった。長栂山を登り、朝日岳も間近と思う頃、目の前に大雪渓が迫り、夕暮れでガスがかかり、ルート不明でビバーク。夜、風雨が強

まり、夜が明けても回復しない中、思い切って出発。30分程で朝日岳に着き、雪倉岳に向かうが、シーズン前でトレースも不明で押し倒されそうな強風の中、雪倉避難小屋に飛び込む。ドアがないので小屋の中にテントを張る。翌日出発を試みるが、強風で押し戻され足止めを喰う。夕方寝ようとすると、「誰か居ますか」と男性が入ってきた。人が来るとは思っていなかったので心臓が止まりそうだった。ザックカバーを飛ばされやっと来た、と。私は、彼が強風の中を来たので「明日は絶対に出発する」と決めて寝た。22日９時に出発、白馬岳に残雪が多く軽アイゼンを使う。クレバスが多く下からの登山は禁止だと聞いた。ガスで視界が悪く不安な中、何度も大雪渓を渡り天狗山荘に着く。天候が悪いせいか雪倉で会った登山者以外とは会うことはなく、淋しい登山だ。23日朝、今までの天候が嘘のような朝焼けだった。５時発、唐松岳から欅平へ向かう予定だったが先日の大雨で登山道の崩壊が多く、山小屋も営業中止。通行不能で五竜岳、鹿島槍ヶ岳に登り、冷池山荘着。24日、爺ヶ岳を経て扇沢ターミナル、室堂に向かい、最初の3000m峰、雄山(3003m)、大汝山(3015m)を登る。この一週間程で疲労困憊になりリタイアを考えていた。今夜の宿泊を決めに、みくりヶ池周辺４～５件の山小屋に訊くが満杯で断られ、最後の雷鳥荘で「一杯だけど良ければ泊まりな」と言ってくれた。風呂に入って鏡に写る真黒で頬のこけた顔を見て、誰だと思い周りを見たが、誰もいなかった。食堂でビールを２本飲み、熟睡した。25日、朝起きると疲れが取れ、普段の身体に戻っていた。天気は雨だが一の越から浄土山、ザラ峠、越中沢岳を経てスゴ乗越山荘着。26日４時発　北薬師岳、薬師岳で朝食、薬師岳キャンプ場、太郎兵衛平、薬師沢小屋泊。沢で体を洗う。夕食に釣り客が岩魚をご馳走してくれた。27日から天候に恵まれ、雲ノ平へその草原をかぐや姫のような美しい女性がのんびりと散歩していた。京都から来て山小屋で働いていると、言っていた。昼過ぎに三ツ俣山荘。三ツ俣蓮華岳を登り、双六山荘着。宿泊客多く定員の２倍くらい。28日快晴、４時発、西鎌尾根を経て槍ヶ岳、３峰目(3180m)登頂、４峰目大喰岳(3101m)続いて、中岳５峰目(3084m)登頂、天狗原をへて南岳６峰目(3033m)を登り、北穂高山荘泊。29日、５時発、快晴で寒い。10分程で北穂高岳７峰目(3106m)登頂。７時、涸沢岳８峰目(3110m)登頂、８時15分　奥穂高岳９峰目(3190m)登頂　９時30分ジャンダルム10峰目(3160m)登頂。奥穂高岳をへて紀美子平、13時、前穂高岳11峰目(3090m)登頂。紀美子平に戻り、岳沢ヒュッテ、河童橋を歩き大正池ホテル泊、４～５人の合部屋で1000万円の望遠レンズで写真撮る人等、話に花が咲いた。30日晴れ。５時発、釜トンネルを抜けスーパー林道を歩き、白骨温泉で昼食、林道を過ぎ三本滝。車が渋滞し、乗鞍岳目指して歩く自分が見世物の様だ。夕暮れの位ヶ原山荘

着。発電機の故障で、ランプで夕食。窓から見る満点の星が綺麗で、眠るのがもったいないようだ。31日晴れ、５時発。15分で乗鞍岳山頂12峰目（3026m）登頂。野麦峠へ下りるのを間違えて阿多野部落へ。20時、開田村民宿で満室だと断られたが、食い下がり泊めてもらうと客は一人もいない。異様な姿で断られたのだろう。事情を話すと、汚れたものは風呂で洗って良いと。８月１日 洗った衣類がたたまれ、上に弁当と手紙が添えられていた。「道中気を付けて」。５時30分発。開田高原キャンプ場を過ぎ、御嶽山登山口。この登山道は苔むす裏登山道で登山者の姿が見えない。８合で白装束の信者２人に会った。頂上付近では多くの信者が見られた。16時、御嶽山13峰目（3063m）登頂。日没前、千本松三晴荘着。宿泊者はほとんど信者だ。２日５時、晴れ。 今日は中央アルプス目指して歩く。13時木曽福島駅着　駅前でカメラの電池を購入。歩き始めてすぐ雷雨に遭う。夕方、駒石山荘着。裏登山道らしく、宿泊客は私一人だった。３日、５時発。 昼、木曽駒山頂（2956.3m）、13時中岳、14時、前岳ロープウェイは、観光客で大混雑していた。19時50分、民宿八幡屋。８月４日快晴、５時発。６時、駒ヶ根インター通過。いよいよ南アルプスだ。8時30分、下平郵便局。ゆうパックで自宅へフィルムを郵送。9時30分、天竜大橋を渡り、16時30分、市ノ瀬、18時出口屋旅館着。５日晴れ 5時30分発、戸台口通過。7時清流荘着。バス待ちの登山者で混雑していた。8時南アルプス林道入口、数人の登山者がバスを待っている。12時、丹渓山荘着。14時30分大平山荘通過、15時北沢峠。南アルプス林道入り口で、仙丈岳の帰りという登山者と会う。夕方、薮沢小屋着。ここは素泊まりで、夕食を食べている人が一杯いた。茨城から来たという５～６人の若者が声をかけてきた。計画を話すと「凄い」と、酒をご馳走してくれた。記念に写真を撮らせて欲しいと、記念撮影する。６日晴れ、4時30分発。５時、馬ノ背ヒュッテ。7時、大仙丈岳、14峰目（3033m）登頂。13時、両俣小屋。15時、左俣大滝着。大雨の為か、崩壊個所が多くルート不明が多かった。中白根沢の頭通過。17時20分、北ノ肩小屋。秩父方面で雷雲が光り輝き、見事な眺めだ。７日晴れ、風強く寒い。4時30分発、５時頃北岳山頂、15峰目（3192m）登頂。6時15分、北岳山荘。7時20分、中白根山頂、16峰目（3052m）登頂。 8時20分、間ノ岳、17峰目（3189m）登頂。農鳥小屋を経て、10時30分、西農鳥岳山頂、18峰目（3050m）登頂。11時、農鳥岳山頂、19峰目（3020m）登頂。農鳥小屋に戻り三国平、熊ノ平分岐から16時、熊ノ平小屋泊。８日、快晴。4時45分発、安倍荒倉岳越えて荒川岳へ。9時30分、塩見岳東峰、20峰目（3052m）登頂。9時45分、塩見岳西峰、21峰目（3047m）登頂。13時、本谷山。15時30分、三伏峠水場にて水補給。17時、三伏峠小屋泊。登山者少なく広い小屋に10人位の宿泊者。９日晴れ、4時45分発。烏帽子岳を経て小河内避難

荒川岳山頂

小屋。遠くに富士山が見えた。13時荒川前岳、 22峰目(3068m)登頂。20分後、荒川中岳、23峰目(3083m)登頂。夏雲の中に富士山が聳える。14時、悪沢岳(東岳)、24峰目(3141m)登頂。30分後、丸山、 25峰目(3032m)登頂。悪沢岳を経て中岳避難小屋に戻り、17時、荒川小屋泊。宿泊者は定員の三分の一くらい。10日、４時30分、濃霧の中を出発。三伏峠小屋で会った女性登山者２人に、ルートが違う事を知らされる。荒川小屋に戻り、再出発。濃霧と強風の中を、大聖寺平から小赤石岳　26峰目(3081m)登頂。40分後、赤石岳、27峰目(3120m)登頂。宇都宮大学ワンダーフォーゲル部と写真を撮る。10時30分、百間洞山の家。13時、小兎岳から兎岳避難小屋を経て15時、聖岳、28峰目(3011m)登頂。17時、聖平小屋泊。素泊まりの為、ビールで我慢。11日快晴、５時発。いよいよ最後の富士山目指しての登山。椹島ロッジ15時30分、転付峠を経て田代入口。20時、大滝温泉泊。12日晴れ、７時10分発。雨畑身延分岐を経て早川橋、14時、下部温泉郷。疲労感があり宿を探すが、顔が真っ黒で異様な姿の為断られ、猪頭まで歩く。20時、やっと民宿水口屋泊。13日曇り、８時発。白糸の滝近くのスーパーで食料補給。13時30分、富士山スカイラインに入る。もうすぐ富士山か、という安心感から疲れが出たのか、身体が思うように動かない。17時、表富士グリーンキャンプ場で宿泊する事にした。14日晴れ、５時出発。６時30分、スカイライン料金所。９時、七曲り駐車場通過。10時30分、五合目登山口駐車場、登山口で昼食。13時45分、九合目。15時、富士山山頂、29峰目(3776m)登頂。16時35分、八合目。17時40分、六合目宝永山荘泊。15日快晴、４時30分発。９時、水ヶ塚公園着。朝食と水の補給を済ませ歩く。12時、富士山資料館前、須山を下り17時、裾野市役所。246号線を歩き、19時40分、夕暮れの沼津千本浜海岸に到着。29日間に及ぶ日本横断と3000m峰29座登頂を完歩した。海を見ながら、何の感動や喜びも無くただボーっとしていた。無事終わりホッとしたのだ。一週間後、富士登山の支度でズボンを穿こうと、見るとお尻のところがレースのカーテンのように透けていた。

<u>'00年１月１日　ミレニアム登頂</u>　31日の22時に高鉢旧料金所から、愛犬のラブを用心棒に従えスタートした。風弱く、寒さを感じない登山だった。朝７時に富士宮口山頂に着く、137回目の登頂だ。山頂にはテントが５張り程あり、大勢の人が登っていた。近くにいた人に写して貰おうとカメラを渡すとバッテリー

が切れていた。すると「取材に来ているので」と取材をしてくれた。2000年問題で大きな事件がなければ元日の夕方、日テレで放送されると聞き下山後、録画予約して寝る。夕方見ると放送され、取材者はなんと、日本人初の３極点到達者だった。残念ながら2008年10月１日のクーラカンリ遠征でカメラマンとして同行、雪崩で亡くなられた。ミレニアム登頂で写した写真が御殿場の富士山写真展に入選。土田早苗さん、先日亡くなられた白旗さんに額の裏にサインを頂く。

'06年９月２～４日　８連続登頂に挑戦　順調に７登目を終わり６合目の宝永山荘で夕方、炭酸飲料を飲み食事を済ませ歩き始めると、炭酸で腹が膨れ、苦しくて歩けない。岩に腰かけ休んだ後、だましだまし歩き始める。七合目辺りで、幻覚症状が出る。水ヶ塚公園と八合目辺りで自衛隊がライトで交信をしているようだ。また下界の水ヶ塚公園を満艦飾の艦船が隊列を整え行ったり来たり、かと思うと、煌々と光るふすまの中を人間が回転している。また稜線でヘリが明かりを点滅させホバーリングしていたり、歩いている登山道が機関銃の撃ち終わった薬莢が敷き詰められているように見える。夜明けとともに幻覚は消えた。体調も良くなり無事に下山し、８連続登頂を達成した。

'08年８月７日　現天皇陛下と遭遇　富士山１登目を登頂し、５合目の看板の前で記録の写真を写そうとする私の目の前に、殿下(現天皇陛下)が隊列を従えて現れた。思わず、「殿下、わたくし、富士山に452回登っております」と申しあげると、「それは凄いですね」と言ってくださった。更に「わたくし３年前に、タワシ髭の大蔵喜福さんとマッキンリーに登りました」とお話しすると、「大蔵喜福さんは良く存じております」と話され歩き出された。私はそのまま２登目、453回目を登頂。御一行は６合目の宝永山荘から宝永火口に下りられ、休憩後、御殿場の登山道に向かい、赤岩八合に宿泊された。翌日登頂され、このルートが「プリンスルート」となった。この２日後の富士宮口は、朝から雷雨で、６合上の御中道の山小屋跡で男女が雷に打たれ、男性は即死、女性は自力で５合目に下りたものの、翌日病院で亡くなられた。支部の小林(勇)氏は、亡くなられた男性を背負って下りた、と聞いた。

'10年10月10日　１０００回登頂　午前零時、田子の浦海岸をスタート。大雨注意報の中を歩く。富士市の元支部長に、松栄堂で富士宮の大きな落花生や栄養ドリンクで接待を受ける。また表富士土産店の支部会員、西川氏にも飲料水を頂き、村山神社を目指すが、大雨で水深20㎝程の川だか道だか分からない状態で、それでも、富士山仲間と三浦豪太氏ら７名での登山で心強く、次郎長村～村山浅間神社を歩き、真っ暗の中、天照教へ向かう。土砂降りの登山道では、標識も見えず右往左往しながら、深い沢のような中を歩き、夜明けの天照教に着く頃

は雨も上がり、陽が差してきた。天気が回復しなければここでリタイアしたかもしれない、、、スカイラインを抜け、高鉢から樹林帯に入り、大倒木帯や石仏群の辺りに来ると、ここが富士山かと疑うほど美しい景色だ。７～８月頃だと、花が咲き乱れアサギマダラが飛び回りアルプスを見ているような景色になる。再び樹林帯の中に入り登りきると、六合目雲海荘の前に出る。後はいつものルートで１０００回記念登頂達成した。

1673登の記録達成

’14年７月15日　伝説の記録更新

今年は台風が多くマスコミから「伝説の記録更新は何時か」と催促がきていた。７月15日と答えた日に又台風が、、、結局15日に富士山３登頂をして夜、帰宅。シャワーを浴びて田子の浦海岸へ。報道陣のインタビューを受け、午前０時に伴歩の仲間とスタート。富士塚を経て村山神社、富士山麓の天照教等所々に仲間が車で飲食物を補給してくれた。天候にも恵まれ、又多勢の応援のお蔭で、破られる事はないだろうと思われていた伝説の記録、1672回を更新できた。

’18年６月22日　２０００登達成　小田原御幸ヶ浜にＪＡＣ静岡支部の實川、小曽戸、鶴橋、富士山仲間の鈴木研、加藤ひとみ、加茂、水、食事のサポートで支部の長田、関根、東海支部の濱島（實川）で８時に海岸を出発。小田原城脇を登ってゆく。30分程過ぎると緑が深くなり人影も無く車もほとんど通らない。林道を歩くようになって天気は良いが、樹林帯の中なので爽やかだ。水之尾の用水溜池を過ぎたところで小休止。火照った顔を洗い、頭を冷やす。久し振りに飲む自然の水は美味しい。ハイドレーションの水を補給して出発する。陽もだいぶ高くなり暑くなってきた。今日は夏至で太陽が垂直に当たるから日差しが強い。汗が噴き出すような状態だ。普段の登山では水分はあまり取らないが、今日は飲まないといられない。飲めば汗が噴き出すという繰り返しだ。明星ヶ岳に近づくにつれ笹が多くなる。また景色がほとんど見えない状態が続く。海から４時間は歩いただろうか、明星ヶ岳で昼食。ここから100mほど箱根竹が敷かれた開けた道になる。起伏の少ない道を１時間ほど歩くと明神ヶ岳に着く。山頂と言っても平らで360度のパノラマだ。小休止をして金時山を目指す。外輪山が一望でき金時山はほっこりと尖がって見える。１時間ほどで火打石岳を下り、更に１時間ほどで矢倉沢峠。普段閉まっている、うぐいす茶屋の前に出るとミヤちゃんが迎えに

来た。一緒に登り30分程で公時神社分岐、16時30分頃に金時山山頂に到着。金太郎茶屋のご夫婦や、仲間たちが待っていてビールとスイカと団子で、今日の前半の目標達成に乾杯。17時過ぎに目的地の富士山に向け乙女駐車場へ向け歩く。腹ごしらえも十分でき、体力も回復し順調に歩き30分程で長尾山へ。そして乙女峠展望台へ。富士山の山頂に沈む夕日が綺麗だ。乙女口のふじみ茶屋から夕焼けの富士山を眺めながら歩き20分程で駐車場に着く。水分補給や腹ごしらえをし、御殿場インター、御殿場駅を通り、246バイパスを横切り表富士周遊道路に入る。途中、デコちゃんが車で来て、御殿場口五合目まで車で伴走してくれると言ってきた。午前０時ごろ、滝ケ原駐屯地手前のコンビニで休憩。そこへ富士登山の常連が次々と車でやって来て、１時間前後のお茶会になった。常連はそれぞれ富士宮口に向かって走っていった。途中から研君が加わり６人になり、伴走車の２人の８人で歩き始めたが、熱帯夜の状態で熱中症になっているような状態で身体が思うように動かない。滝ケ原基地の道路の草むらに動物の目のようなものが光っている。タヌキかキツネなのかと思い、よく見るとホタルだった。水のない道路と草むらをホタルが乱舞しているのには驚いた。夜明け前、御殿場口五合目に着き一休み。お茶と腹ごしらえをし、薄明るくなった4時に登山開始。朝焼けがとてもきれいな空だった。予報では15時頃までは天気が良いようだ。六合目までは良く晴れた天気の中を気持ちよく登っていた。六合目を過ぎて時々強風が吹くようになってきた。七合目の砂走館で小休止をしていると、トレランの女性が、「２０００回おめでとう」、と言ってきた。少し急いだほうが良いと、赤岩八合に向かって登り始めると、風が徐々に強くなってくるようだ。赤岩の手前で雪が降り始めたと思うと、雨になった。合羽を着て歩きだすと、強風になり赤岩の小屋の人たちが､「やめたほうが良い」という。急いで下山してくる登山者も多いので、７名のうち４名が下山を決め、３名で登る事になり歩き始めたが、強風で進めずリタイアを決意。車を富士宮に置いているので、赤岩の上のブル道から３人でスクラムを組み暴風に向かって富士宮側へトラバースした。やっとのことで万年雪山荘に着くと、風が弱く感じられたので、「登れる！」と思い、必死で登り九合五尺の小屋を過ぎ、風の通り道である壊れた鳥居まで行くと、風がほとんどない。山頂に一目散に登りつめ、２０００回の横断幕を出し、３人で写真を撮ろうとしている所に、土日に１日２登している仲間の小松氏が上がってきた。シャッターを押して貰い、すぐ下山を始めると、今まで弱かった風がまた暴風雨になってきた。まさに神がかり的で、こんな異常な天気に遭遇したのは初めてで、２０００回登ったご褒美に、木花咲耶姫が助けてくれたのだろう。無事に下山する事ができた。

’19年11月６日　【富士山２０６０回目の登頂】を果たしたが、翌７日、五合目は冬季閉鎖となった。因みに２０６０回の内訳は下記の通りとなっている。

●富士山登頂回数２０６０回（富士宮1983回・御殿場17回・須走37回・吉田23回）

１日１登回数	９９６日＝	９９６回
２登回数	５０４日＝	１００８回
（４８７日富士宮－富士宮、１７日富士宮－吉田）		
３登回数	７日＝	２１回
４登回数	２日＝	８回
５登回数	１日＝	５回
６登回数	１日＝	６回
８登回数	１日＝	８回
一筆登山回数	２回＝	８回

【エピローグ】

海外登山及び七大陸最高峰登山の記録は以下の通りです。私は世界七大陸最高峰登頂の為に、高度順応及び訓練で富士山を登り続け、この記録はとどまらず、命ある限り新たな夢に向かって、私は山に登り続けたい。

●海外登山記録

’01年７月14日　チゲット（コーカサス山脈3500m）
’02年１月　エアーズロック（オーストラリア867m）
’04年１月14日　エルプレモ（チリ・アンデス山脈5642m）
’07年７月６日　モンブラン（ヨーロッパアルプス最高峰4810m）
’10年11月４日　キリマンジャロ　２登目（アフリカ大陸最高峰5895m）
’11年７月６日　アルタンウルギー（モンゴル2656m）
’14年～16年　ロブチェイースト３年連続（ヒマラヤ山脈6119m）

●現在挑戦中の七大陸最高峰登山記録

’00年９月９日　アフリカ大陸最高峰登頂・キリマンジャロ（5895m）
’01年７月18日　ヨーロッパ大陸最高峰登頂・エルブルース（5642m）
’02年１月18日　オーストラリア大陸最高峰登頂・コジウスコ（2230m）
’04年１月23日　南米最高峰登頂・アコンカグア（6960m）
’05年６月29日　北アメリカ大陸最高峰登頂・マッキンリー（6190m）
’06年１月８日　南極大陸最高峰登頂・ビンソンマシフ（4897m）
’16年５月20日　アジア大陸最高峰・エベレスト南峰登頂（8750m）

（以上）

私の足跡（６）

中央分水嶺縦走

津軽半島竜飛岬から上越国境三国峠まで

大島　康弘

Ⅰ．幸運のスタート

中学生の頃、地図帳を広げて本州の大分水嶺を赤鉛筆でなぞったことを覚えている。歩いてみたいといつからともなく考えていた。

韓国青洲市に仕事で３年間住んだ時、地元の『東進山岳会』に入れてもらい足繁く山に通った。会長の金さんは雪岳山（ソラクサン 1708m）と本土の最高峰、智異山（チリサン 1715m）を繋ぐ全長850㎞に及ぶ脊梁山脈を歩き繋いでいて、踏破は間近であった。韓国では北朝鮮のシンボルの山、白頭山から雪岳山を経て智理山に至る大分水嶺を『白頭大幹』と呼び、５万図付のガイドブックも書店で売っている。アパラチアントレイルのように韓国でも大分水嶺縦走を目指す人が沢山いるのだ。僕の夢はにわかに実現に向けて動き出した。

早速、ピンクのリボンに『本州大幹縦走 島田市 大島』と印刷した赤布を千枚注文した。本州を縦に貫く脊梁山脈に点々とピンクのリボンが並ぶのは想像しただけでもワクワクする。

帰国から４年後、退職した僕は津軽半島最北端、竜飛岬の『階段国道339号線』の基点に第一歩を記した。58歳、2002年８月１日のことである。ここから大分水嶺が関門海峡に沈む地点を目指す。

その日は、昼頃から強風が吹き始め、視界もなくなってすさまじい嵐となった。日本海を見晴らす『眺瞰台』のトイレの陰に風を避けて必死でテントを張った。翌朝はすれ違ったバイクの男に、「この間、熊が出た。けーれ、けーれ！」といきなり脅され、戦々恐々、胸ポケットに入れた空のペットボトルをペコペコ鳴らしながら、稜線に分け入った。思えば最悪の門出であった。天は僕の度胸を試したとしか思えない。

驚いたことに地図に記されている歩道は笹薮に没して跡形もない。６時間、笹薮と格闘して稼いだ距離はわずか1.8㎞。大分水嶺縦走など望外の夢であったと納得し、森林事務所に断念したことを報告。チシマザサの煤だらけになって稜線から撤退した。

山歩きの経験から、市町村の境界、県界など行政区画の境目は切り開きがあり、営林署の管理歩道、山仕事用の道など山道は四通八達していると思い込んでいた。営林署は森林事務所と名を改め、軸足を森林保護に移し、山が生活の場である時代はとうに過ぎ去っていたことを思い知らされた。

僕の敗退の知らせを聞いた増川森林事務所のベテラン職員、奥寺さんは静岡くんだりからやって来たドンキホーテに、せめて峠の一つも越えさせて帰したいと思われたのであろう、翌朝、津軽独特のコブで巻いたコッペパン型の大きな握飯二つとお茶を用意して、僕を軽トラで吉田松陰が越えたという津軽山地最北部の峠、算用師峠登山口まで運んでくれた。

峠に立つと僕が断念した地点まで稜線を辿れば明日にも届きそうな距離だ。意を決して笹薮に潜り込んだ。翌日の昼下がり、断念した地点に到達した。あの日の深い喜びは今も忘れない。僕の分水嶺縦走は人の善意の賜で始まったのである。

当時の増川森林事務所長、庄司和哉さんが『本州を縦に切る』と題して僕との会見を記した一文を東北森林管理局青森分局発行の機関紙、『青森林友』最終号に寄せている。中央分水嶺踏査の試みを奥羽の山に精通している森林官がどのように感じたか、全文をここに書き写そう。

「えっ！　本気でそんなことを考えているんですか？」

彼と初めて話をした時の素直な反応だった。

２年ほど前のある日、三厩村の商工会から森林事務所に電話が入った。何でも静岡に住む男性から問い合わせがあり、三厩の山について教えていただきたいことがあるという内容だったらしく、山のことに詳しい森林事務所で対応してくれないか、というものだった。もちろん快諾した。

ヒバについての問い合わせなのか、はたまた増川岳の登山についてかと資料を用意しているところに、件の男性から電話が入った。大島と名乗ったその男性は永年夢見た計画を実行するため、三厩・小泊界の地形や林況を聞きたいのだという。聞くと彼の計画はとてつもないもので、達成するにはかなりの体力と根気そして運がなければ困難だろうと思った。（少なくとも私はそう感じた）

その計画とは、本州の分水嶺（青森県竜飛崎から山口県長府付近まで）を単独踏破すること。名付けて『本州大幹縦走』である。本州縦断や日本一周といった言葉はよく耳にするが、ほとんどはすでに作られている道路がその舞台だろう。しかし彼の場合は山の中を歩くため道がなく、ついでに言えば尾根であるが故に水もないのだからつらい。

彼が最初に森林事務所を訪れたのは一昨年の夏。壮大な計画がいよいよ始まる。「頑張ってください」とエールを送り、山火事と遭難にはくれぐれも気をつけてと付け加えて彼を見送った。しかしこの年の夏は雨が多く、夢の第一歩目は決して順風満帆とはいかなかったようだ。その雨にもましてやっかいなのはチシマザサ(根曲竹)で、背丈以上に成長し、密生している「ヤツら」を漕いで進む大変さは、経験したことのある人なら思い浮かべただけで眉間にシワがよるのでは？
しかも彼の場合は20数キロの荷物を背負ってだからなおさらだ。

二年目の昨年は、近くのＯ森林事務所のＫＩさんや東北地方の三角点にとても詳しいＴ室のＫＵさんらのサポートもあり、思いのほかスムーズに進むことが出来たと喜んでいた。

この２年間で計４度の來青、約20日間かけて青森まで到達。津軽半島の行程はクリアした。

彼の夢はまだ始まったばかり。これからは熊のテリトリーに踏み入ることもあるだろう。もしかしたら無意識のうちに蜂の巣を揺らしてしまうかもしれない。まだまだいろんな壁が待っているだろうが、この計画初の挑戦者として頑張ってもらいたい。

こうした出会いがあることも、森林事務所で働く者にとってはひとつの楽しみになっている。

竜飛の岬に立って彼の進んだ足跡を目で追っていると、なぜか行ったこともない山口県長府の景色が浮かんでくるから不思議だ。

これから向かう奥羽山脈付近の皆さん、もし彼を見かけたら暖かい声をかけてあげてください。

Ⅱ．大分水嶺の旅が取り持つ縁

奇しくも僕が大分水嶺に取り掛かった２年後、JAC本部から大分水嶺を擁する支部に檄が飛び、大分水嶺の一斉踏査が始まった。パイオニア気取りで始めたプロジェクトのアイデンティティが損なわれたことで、僕のモチベーションは大きく凹んでしまった。

しかし、JACの大分水嶺踏査は全国の支部会員が手分けして担当部分を踏査するというもので、僕の場合は津軽半島北端から歩き繋ぐ方式だ。繋ぐことで物語を紡ぐ楽しみがある。独自性が失われるわけではないと思い直した。

そしてこれは予期しなかったことだが、森林事務官諸氏やJAC青森、岩手、秋田、山形、宮城支部会員など、ご縁のあった方々から下山地点からの回収、登山地点への搬送、電話による行動のモニター、水食糧の差し入れなど一方ならぬ支

援を頂き、時には自宅に泊めて頂いたりもした。心暖かい人々と巡り合いが孤独な山旅を豊かに彩ってくれた。

40回に亙る山旅を経て、昨年2019年９月、上越国境の三国峠に辿り着いた。

そのすべてを単独で歩いたわけではない。これまで、６人の方が一緒に歩いてくれた。そのうちの一人は茨城県土浦市在住の川村さん、僕が近くまで来たら一緒に歩きたいと宮城山形県境の面白山から、合計12回同行してくれた。

彼は東日本の沢を知り尽くしたベテランだが、僕の大分水嶺の旅のお供をするというスタンスに終始し、決して差し出がましい口を利かない。しかし、一度だけ「熟達の度合いは足の強さではなく、準備をどれだけ早く済ませるかで決まる」と言った。

窮屈な二人用のテントに川村さんの私物が散らかることはない。眠る時も眼鏡を外さない。踏んづけられる心配がないからだ。一方、僕は山の共同生活技術には疎いし、段取りが下手なのでテントの中は物で埋まってしまい、３時に起床しても出発は５時半になる。

枝稜線に迷い込み、引き返す羽目になっても、淡々としている。川村さんは僕の敬愛する友人の一人である。

韓国製の名前入りのピンクの赤布は、先に進むことばかり考えていたのでわずかしか使わなかったが、それでもこのリボンを見つけたことを記した山行報告を読んだことがある。また、静岡支部の赤石さんからは栃木県の男鹿岳で僕のリボンを見つけたと連絡があった。人里離れた山域で同じ藪を漕いだ者同士の心地よい連帯感を味わうことが出来たのはリボンのささやかな効用である。

Ⅲ．分水嶺で学んだこと

津軽山地のビバーク

津軽山地、奥羽山脈、帝釈山地、三国山地からなる東日本の大分水嶺上には南八甲田連峰、八幡平、乳頭山、秋田駒ケ岳、和賀岳、栗駒山、船形山、蔵王、吾妻山、安達太良山、帝釈山、至仏山、平ヶ岳、巻機山、谷川岳連峰が連なっているが、それらを繋ぐ稜線にはほとんど道がない。大部分がチシマザサの藪である。なかでも栗駒山から鬼首に至る山稜は濃密なチシマザサに覆われ、一日かけて2.3㎞しか進めなかったこともある。

上越国境三国峠までの踏査距離はキルビメーターの計測では1008km。登った高さの合計は70,040m。塵も積もれば山となる。1008kmを踏破するのに稜線で 161泊した。平均移動距離は6.3km/日である。

湯西川源流枯木山(1755m)を目指して

大分水嶺を歩き始めて以来、従来の山歩きに左程魅力を感じなくなったことを白状しなければならない。

大分水嶺縦走はルートが決まっているが道がない。ルートに関する情報は地形図から読み取る外はない。藪の濃さでその日の到達地点が決まる。ビバークは天候次第。15時頃からテントの張りやすい場所を物色しながら歩く。

常に状況に応じて柔軟な対応が必要で、その行動の総てに的確な判断と行動が求められる。携帯の通じない山中で間違えると悲惨なことになりかねないので、下山地点に達するまで緊張の連続である。思わぬ失敗をするのはいつも午後である。集中力が衰えるせいだ。

更に水の問題がある。終始稜線にいるのでどこで水を調達するかは事前に周到な計画を練っておかなければならない。雨水、溜水も躊躇なく利用する。

様々な状況に対応して予定のルートを踏破した時の達成の深い喜びは、登山では得られないもので、悟りの境地に近いのではないかと僕自身は思っている。

この山旅を通して、もう一つ学んだことがある。それは他の生き物への共感と尊敬だ。自然の中で命を保つことが如何に大変なことであるか、縦走中、熊に近い暮らしをして身をもって理解できた気がしている。

自然の中で暮らす総ての生き物は環境に適応して命を繋いでいる。例えそれが本能的であれ、僕はその能力に驚嘆せずにはいられない。人間だけが尊いのではない。この世界に生きとし生ける物、総てが尊いのだ。

本州の中央分水嶺の総延長は2700kmと言われている。歩き始めて17年。当初の計画ではとうに関門海峡に達しているはずであった。踏破距離は４割に満たないが75歳の大台を迎え、これからどこまで行けるだろう。

連綿と歩き繋いだ大分水嶺の旅は文字通り山あり谷あり、越し方と行く末を眺め、充足と不安の繰り返しの旅であった。人生後半にあたかももう一つの人生を紡いだ気がしている。大分水嶺の山旅の醍醐味はまさにそこにあるのではないか。

Ⅳ．縦走記録

	山行回数	コース	踏査開始	踏査日数	水平踏査距離	（累計距離）
	青森県					
２００２年	第１回	竜飛崎～算用師峠	7/31	４日	11.0km	（11.0km）
	第２回	算用師峠～四つ滝山	10/9	４日	12.8km	（23.8km）
２００３年	第３回	四ッ滝山～玉清水山	5/8	５日	20.8km	（44.6km）
	第４回	腰岳～大倉山～あすなろライン	10/4	５日	29km	（73.6km）
２００４年	第５回	魔ノ岳～櫛ヶ峰～発荷峠	4/25	５日	84.6km	（158.2km）
	秋田県、岩手					
	第６回	十和田湖発荷峠～白萩平	10/27	６日	31.3km	（189.5km）
２００５年	第７回	白萩平から八幡平	4/23	６日	65.7km	（255.2km）
	第８回	八幡平～乳頭山～国見温泉	7/14	３日	46.3km	（303.7km）
２００６年	第９回	国見温泉～仙岩峠	7/29	２日	7.2km	（310.9km）
２００７年	第10回	仙岩峠～和賀岳～薬師岳	4/18	３日	24.9km	（335.8km）
	第11回	真木渓谷～大甲～真昼岳	9/3	２日	17,4km	（353,2km）
	第12回	兎平～女神山～湯田高原	10/9	５日	29.3km	（382.5km）
２００８年	第13回	湯田高原～三界山～須川峠	4/22	８日	61.3km	（443.8km）
	秋田県、宮城県					
	第14回	須川峠～栗駒山～須金岳～鬼首	10/8	６日	23.4km	（467.2km）
	宮城県、山形県					
２００９年	第15回	須金岳～禿岳～中山峠	4/22	７日	36.9km	（504.1km）
	第16回	中山峠～翁峠～鍋越峠	10/15	７日	42.3km	（546.4km）
２０１０年	第17回	鍋越峠～船形山～関山峠	4/3	７日	35.8km	（582.2km）
	第18回	関山峠～面白山～笹谷峠	10/21	３日	27.7km	（609.8km）
	第19回	笹谷峠～蔵王	11/5	１日	15.5km	（625.4km）
２０１１年	第20回	蔵王～二井宿峠	4/4	５日	25.5km	（650.9km）
	第21回	二井宿峠～駒ヶ岳	5/14	３日	15.2km	（666.1km）
	山形県、福島県					
２０１２年	第22回	駒ケ岳～板谷峠（スキー行）	3/26	４日	15.1km	（681.2km）
	第23回	萱峠～吾妻山～母成峠	4/25	５日	37.4km	（718.6km）

	山行回数	コース	踏査開始	踏査日数	水平踏査距離	（累計距離）
	福島県					
	第24回	母成峠～中山峠	10/15	５日	24.0km	（742.6km）
２０１３年	第25回	中山峠～御霊櫃峠	3/15	３日	8.7km	（751.3km）
	第26回	御霊櫃峠～勢至堂峠	4/8	４日	26.1km	（777.4km）
	第27回	勢至堂峠～甲子温泉	11/19	４日	28.4km	（805.8km）
	福島県、栃木県					
２０１４年	第28回	甲子山～三本槍～大川峠	5/8	５日	23.7km	（829.5km）
	第29回	大川峠～男鹿山～山王峠	10/1	２日	12.9km	（842.4km）
	第30回	山王峠～荒海岳	10/21	４日	13.5km	（855.9km）
	第31回	荒海岳～安ヶ森峠	11/4	１日	5.6km	（861.5km）
２０１５年	第32回	安ヶ森峠～田代峠	4/16	４日	12.3km	（873.8km）
	福島県、栃木県、群馬県					
	第33回	田代峠～帝釈山～鳩待峠	10/2	６日	44.0km	（917.8km）
	群馬県、福島県、新潟県					
２０１６年	第34回	戸倉～至仏山～平ヶ岳～十字峡	4/15	５日	29.9km	（947.7km）
	新潟県、群馬県					
	第35回	十字峡～丹後山～本谷山～十字峡	5/22	１日	5.3km	（953.0km）
２０１７年	第36回	十字峡～丹後山～十字峡	5/14	１日	0km	
	第37回	十字峡～本谷山～巻機山～清水	5/28	３日	12.8km	（965.8km）
２０１８年	第38回	清水～巻機山～山朝日岳～土合	5/20	３日	11.3km	（977.1km）
	第39回	土樽～茂倉岳～朝日岳～土合	10/13	２日	10.4km	（987.5km）
２０１９年	第40回	土樽～茂倉岳～谷川岳～三国峠	9/24	２日	20.2km	（1007.7km）
				（161日）		

私の足跡（７）

邂逅の山

＝サラグラール西壁（7,350m）＝

永野　敏夫

50年も昔の登山である。当時山岳雑誌や月刊誌にも掲載されており、何も今更とも思ったが、時代的背景やそこでは語らなかったこともありこの機会に改めて書き残すことにした。

14歳の頃、弟や近所の子供を連れて竜爪山に登ったのが自発的に登った私の最初の山登りであった。翌年日本人によって初めて8,000m峰のマナスルが登られた。これが登山ブームを巻き起こし、私を山好きにさせた要因であったように思う。戦後廃墟の中から立ち上がり豊かさが少しずつ見え始めた時代であった。それでも貧しい小僧には旅行やスキーなどはまだ先の話、まして自家用車などは夢にも見ぬ存在で、金をかけずに遊べるものとなるとせいぜいハイキング程度であった。なけなしの小遣をはたいてキャラバンシューズを買い、電車やバスを利用して近間の山を登るぐらいが許される範囲であった。それゆえにかえって山登りにはよそ見をせずに夢中になれた。やがて学校のクラブに入り街の山岳会に入り、懐具合も少しずつ増えるようになると足を伸ばして憧れの日本アルプスも手に届くようになっていった。年季を積み、体力や精神力に自信を持つようになると南アルプスの冬山や北岳や谷川岳や穂高岳などの岩壁を登り、より困難より高度を標榜するアルピニズムの道を辿ることになった。山岳本や写真集を読みまだ見ぬ本場のアルプスやヒマラヤに憧れアルプスの岸壁を華麗に登るガストン・レビュファやリオネル・テレーやヘルマン・ブールに羨望の眼を向けていた。

1950年フランス隊によって人類初めての8,000m峰アンナプルナが登られた。それから18年後の1968年に中国隊によって最後の8,000m峰シシャパンマが登られ、黄金時代に幕を閉じた。続いて新ルートの銀の時代、これに重なるように鉄の時代を迎えていたが、この端境期ネパール政府はヒマラヤ全域の山を５年間登山禁止することを発表。世界の先鋭達はアンデスやヒンズークシュに向かうことになるが、とりわけ日本の先鋭たちはヨーロッパ・アルプスの岩壁に向った。その先陣を切ったのが服部満彦、大倉大八の日本人初のマッターホルン北壁登攀（1966年）であった。これを機にアルプスの岩壁初登の誉れを得ようと我先にと怒

涛のように押しかけていった。これも5年後には三大北壁の無雪季、冬季登攀を含めめぼしい岩壁はほぼ登りつくされた。結果的はこの時期がヒマラヤ鉄の時代への格好のトレーニング場であったといえる。

静岡登攀クラブを立ち上げたのもこの時期、先の日本人によるマッターホルン初登がきっかけであった。それまでオールマイテーのＳ山岳会に席を置いていた私とＫは既に岩登りに嗜好を強め厳冬季の北岳バットレスなどに登っていた。1968年12月から１月にかけて豪雪の剣岳で15パーテーが遭難、この中に交流のあった清水Ａ会もあった。悪天の中脱出を計り豪雪の早月尾根を、ザイルをつけて下降中に最後尾のＳが足を滑らせ、それに引ずり込まれ３人もろとも東大谷に転落、会長のＫとＹが死亡。この時の岳友仲間による決死の救助は今でも語り草になっている。Ｋは生前から‘自力で救助できる組織を創りたい’というのが口癖であった。これが機になって国内で初めて救助互助組合とも言うべき静岡遭難救助組合を創立、一時期県内のクライマー60人を集め会員同志の救助活動に当った、解散するまでのおよそ10年間、会員の事故死者は10数人を数えた。

翌年この会員の有志でヒマラヤ・ソサイティを立ち上げた。ヒマラヤ鉄の時代への参戦であった。最初にターゲットに上ったのがエベレスト山域のタウチェ、チョラッチェであった。両峰とも鋭い氷壁、岩壁をもつ怪峰、これをアルパインスタイルで縦走するという計画であったが、これはネパール政府の許可対象外であった。時期を置いてつぎに上ったのがヒンズークシュのサラグラール（7,350ｍ）の西壁であった。「ロッシュゴル氷河の山旅」一橋大の報告書を見たのがきっかけであった。グラビアに載った巨大な岸壁は「アイガーの倍」「21世紀では登攀不可能な岸壁」との文字が目を引きつけた。パキスタンの山でこれなら許可の可能性はある。決定するには時間が掛からなかった。人望の厚い交渉力にも長けたＡ氏に隊長を要請、確約が取れると一気に計画は進められた。メンバーは静岡登攀クラブのＡ氏を初めＫ、Ｙ、私、に藤枝山岳会の会友Ａ。時間を置いて会友の清水ＲＣＣのＨとＮｍが加わることになったが、実はこの２人の追加許可を取るのに苦労することとなった。

年末にはパミッションが降りるだろうと思っていたが翌年に入っても連絡はない、そのうち東パキスタンのバングラデシュで内乱が勃発、いよいよ怪しくなっていた。ところが３月に入り外務省から許可の連絡が入った。出発までは２ヶ月ばかり、追加隊員の許可が下りないまま、準備に取り掛かることになった。６月初旬隊長と私は追加メンバーの許可現地交渉に掛けるという責務を背負って一足先に出発。交渉の基点となるラワルピンディに宿をとると隣接の首都ペシャワールにある外務省に連日のように足を運んだ。予想どおり許可は難航するが、再三

の炎天下の外務省参りにさすがに気の毒とでも思ってくれたのか待望の許可を得ることが出来た。ラワルピンディ入りして25日目であった。猛暑と下痢で山に入る前にすっかり体力を失っていた。トラックを手配した翌日、溢れ落ちんばかりの荷物を積み登山基地であるチトラルに向かった。空輸なら僅か数時間、貧乏隊故にトラックでの移動、走り出して間もなくラジエーターが水漏れ沢に出れば水をラジエーター補給し焼けたエンジンに水をぶっ掛ける繰り返し。パンクが２度スペアタイヤはなく昔ながらの糊で接着しての修理、道路が崩れて炎天下の道路普請、挙句にエンジントラブルで分解修理する始末。このポンコツトラックのお陰で３日目が掛かりグタグタになってチトラルホテルにたどり着いた。チトラルは山域最高峰ティリッチミールが見える山間の村でこのあたりでは珍しく樹林の緑を点綴したオアシスであった。バザールも軒を並べヒンズークシュ登山に必要な食料や物資の補給も出来る。2日間の滞在はいささかの慰安となり、弱った体力も幾分回復した。ここでリエゾンと合流して、ポーターや馬などを手配した。

翌日３台のジープに荷物を積みメンバーが分乗、キャラバンの出発地クラーに向かった。到着するとすでに予定を超える人員が集まっていた。45人を選抜すると、一人30ｋの荷物を背負わせた。それに馬とロバを加え、途中食料用の羊を連れてのキャラバンが始まった。チトラル川沿いに遡り２日後には4,000ｍのサルトアン峠に立った。郡峰の一角にサラグラールが見えた、西壁は裏側で見えぬが沈黙の白雪の山に無言の挨拶をした。３日後ロッシュゴル氷河を詰め4,200ｍに予定通り待望のＢＣを張った。眼前にはまさに2,000ｍ掛け値なしの巨大な岩壁が天空を遮るように聳立していた。

ヒンズークシュには高所人夫はいない。ルート開拓も物資荷揚げも全て自分たちに頼る他ない。一体この巨大な岸壁に人類が挑戦する資格があるだろうか。筋書きのないドラマが明日から展開されるのだ。果たして栄光のドラマか地獄のドラマかいささか緊張感に身を震わせた。

サラグラール西壁を登攀

アタックの機会を全員に与える。岩壁を突破したら東西南北の7,000ｍ級のピークを全山縦走。コンテニアスでのアンザイレンは止める、これは剣岳の事故が教訓、冷酷だが落ちるなら一人で行ってもらうということだ。

タバコ、アルコール類の嗜好品は一切外す。主食は業者から提供された期限切れのアルファ米、味噌汁、ふりかけ、僅かな副食など粗食に徹する。軽量テントは上げるが岸壁に幕場の有無は不明ビバークを覚悟する。酸素ボンベイは元より用意していない、これが最小限の約束ごと、技術と体力と精神力が成否のカギに

なるであろう。ＢＣを設営した翌日は荷揚げ用の食料、装備を小分け作業、午後は偵察に当てた。幅２㎞、高距3,000m、見るからに摑みようもない大岩壁である。凹状谷を入れた左右それぞれ正面の垂壁は日数的に無理か、右正面壁の岩稜が唯一登攀可能のように思えた。下部はかなり複雑で的確なルート・フアィンデング要求されるであろう。上部の垂壁はハーケン、ボルトを使う人工登攀になりそうだがハーケン、ボルトを打つ動力は未知数、想像を超える時間が掛かるかもしれない。ルートが決まると明日からの長い戦いに備え早目にシュラフに潜った。4,200mのベースキャンプはさすがに冷え込んでいたが風もなく爽やかな青空が険しい山間に広がっていた。西壁はいまだ光の影の中にあり一層厳しく威圧的に見えた。重い荷を担ぎ岩と砂礫の堆積地を詰め昨日偵察した基部に着くとＫとＨは引き続きルート工作に向かった。眼上にはこれから荷揚げをしなければならないかなり急な岩溝が伸びていた。20kgの荷を担ぎユマールを使っての登りはかなりの重労働であった。この350m余りの岩溝を抜けると緩傾斜帯に出た。結果的にはここがＣ１(5,370m)となり、５日間ツエルトを被ってビバークすることになった。ＹとＡoは高山病でＢＣから一旦下った。

岩壁はいよいよルートフアィンテングも難しくなる。凹角を抜け、フェースを登り、トラバースして再び凹角に入る。ルートは常に荷揚げのリスクを最小限に考えながら伸ばす。脆い岩に打ち込んだハーケンは信用できない。落ちたら支えてくれる確信もない。凹角を抜けたところで終了、フィックスにユマールをかけてＣ１に戻った。翌朝の10時Ｖ字谷に掛かった氷塊が突然轟音立て、雪煙を巻き上げて崩れ落ち、雪煙は私たちのいるＣ１に届かんばかりに舞いあがり大自然のダイナイズムを見せ付けられた。核心部の5級の厳しいピッチが続いた。岩稜は脆くハーケンは根元まで入れずシュリンゲをつけそこにアブミを掛け恐る恐る乗る、5,000mの空中芸当だ。見下ろせば岸壁はスッパリ切れ落ち鳥一つ飛んでいる姿もない。壁が続きロープの切断を防ぐために岩角にガムテープを貼っていく。

トップはランニングビレーをこまめに取りながらルートを延ばしていくが手を伸ばした瞬間ハーケンが抜け転落、セカンドビレーでかろうじて止った。垂壁を抜けると幅２ｍ余のバンドに出た。5,570m、Ｃ１から僅か200m伸ばした高さだがここをＣ２に決め２人用のアタック天幕２張はった。幕間の岩溝が共同トイレになった。翌日から３日間荷上げに集中した。円形の大ポリタンクを半切りした頭部に物資を突っ込み、岩角に引っかからぬようフイックスロープで300kgの物資をあげた。Ｃ２の上はリスもないスラブ状の垂壁、ここで初めてボルトを連打した。午後岸壁に取り付いて２回目の降雪があった。上部ルート開拓して下降中のNmが浮石を落とし天幕に直撃、幸い隊員は外にいて被害を免れたが天幕に大

きな穴が開いた。夜半トイレに起きると対岸に対峙するウドレンゾムとシャカウリが満天の星の下に青黒く写しだされていた。

翌日私とＮｍは昨日の最高点までユマールで上がって開拓、振り子トラバースして凹角にルートを登り、一旦トラバースして次のハング気味の凹角を抜けさらに氷の詰まった急なチムニーにアイスハーケンを連打して登り、上部をバック・アンド・ニーで抜けた。ここも４～５級のピッチが続いた。翌日Ｋ、Ｙ、Ｈは最上部の岩稜に380mをフィックスして戻った。険しい岸壁帯はほぼ抜けたことの報告があった。一人高度障害で遅れていたＡも昨日Ｃ２上がってきて久し振りに登攀メンバーが揃った。夕食時話し合いがもたれ、明日頂上にアタックすることを決めた。天候も落ち着いており4回のビバークで西南北の全ピークを縦走することを確認しあった。アルコールもご馳走もない質素な前夜祭であった。

５時30分早暁の淡い空にはまだ月影が残っていた。私とＮｍが残る悪場にフィックスするため先行することになった。岩は冷たかった、ロープ100m、４日間の食料、装備は20kgを超えていた。昨日到達した地点からさらに悪場２箇所にフィックスを張った。岩場から岩礫混じりの雪渓に入った。さほど急ではない雪渓に思えたがさすがに体が重くピッチが上がらなかった。下痢と栄養不足により体重は３ｋ痩せ、トラック移動での疲労、睡眠不足、それらが重なり、高度障害の影響も出てきていたのだろう。6,000mを越えた岩稜上で初日のビバークをした。

翌日も長い雪渓を登り6700m地点で2回目のビバーク、この日稼いだ標高は僅か700mであった。高度障害で遅れたＹとＡoは300m下でビバークした。翌日もピッチは上がらず立ち休みの回数も増え、背後に展開する景観に振り返る余裕もなくただただ上に向かって足を運ぶだけであった。青い大空が近づいてきたと思うと白い稜線に立った。小さなピークであったが少なくとも目指すピークの一つでもなかった。しばらく立ち止まり「さぁ行こうか」催促するとＫが「ここでいいだー」と言った。隣に居るＮｍも「俺はいいよ」遅れてきたＨは「行きたいけど今は無理だ」目標は全山縦走であるはずだ。私は誰にともなく「行ってくる」と言ってとりあえず先方に聳える峰に向かった。スッパリ切れた雪稜にキックステップを切って渡ると続く岩稜を登り一時間ばかり掛けて岩屑のピークにたどり着いた。(後日宮森常雄氏によりβ峰と同定)南西峰らしき山がさらに北方にあった。この分だと２時間以上は掛かりそうであつた。日の丸旗を括りつけたピッケル立て記録写真を自撮りすると寝転んで休んだ。谷底からは雲霧が沸き起こり稜線を覆い隠そうとしていた。帰路が心配になって戻った。スノーピークに戻ると仲間は既に下った後であった。目印はアイゼンの踏跡だけだ。雲霧のなか細大を漏らさず

跡を追うが、広い雪渓で度々ルートをはずした。しばらく下ると幸運にも昨日ビバークしたところに出た。「永野君が来た」KとHはアタックを背負い今まさに下ろうとする矢先であった。Nmは雪面にうずくまっていた。「永野君どうする」Nmを置いていくわけには行かないだろう。正直言って私もかなり疲れて少しでも下に降りたかった。この場に残り二人で３回目のビバークをすることにした。Nmは私が作ったお粥を一口も口に入れず、凍えついたように横臥して一夜を過ごした。朝を迎えると心配だったNmは何とか持ちこたえてくれた。雪渓はバリバリに凍りアイゼンの歯も立たなかった。ビレーするスクリュウハーケンもない。アンザイレンして私がもし引きずり込まれれば２人諸とも奈落の底だ。‘アンザイレンはしない’約束事は思いもよらない。弱った彼が１人で下ることは至難の業だ。それでも降るしかない。ザイルを結び肩確保でNmを下ろした。彼は半ば尻もちを着き滑りながら下った。格好はどうでも良い。滑落だけは避けなければならない。スタッカットで40mザイル４回、何とか岩場の一角にたどり着いた。ここからは要所にはフィックスが張ってある。疲労が重なりかなり時間が掛けてＣ２に戻った。KとHが居た。「今から行くところだった…」

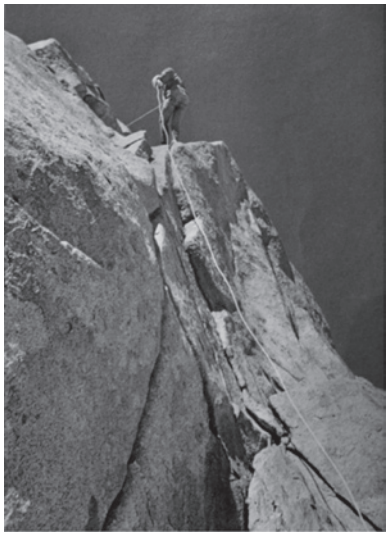
翌日隊長とリエゾンが待つＢＣに全員無事に戻った。ＢＣ入りして21日目の帰還であった。その夜、隊長が日本からこっそり持ってきた日本酒が出された。今日この日のために。タバコもアルコールも贅沢な食料も一切持ち込まぬ私たちの計画を知っていた上であった。私たちだけのロッシュゴル、ベースキャンプでのお酒は甘くほろ苦く私を酔わせた。７人のそれぞれのサラグラール登山は終わった。

あれから50年が経った。頂上アタックの際の行動が未だに整理つけずに脳裏に残っていた。出しゃばることもなくさりとて忘れ去ることもなく。

西壁の先端白い雪のピークに立った時「行くべきか、止めるべきか」どうして皆で相談しなかったのか。アタックの前日に４つピークを縦走することはお互いに約束したはずであった。また私が単独で行くのを誰も意見を言わず止めようともしなかったのか。私もどこまで行くつもりかも言わずに行ったのか。Nmが動けなくなった時、どうして相談もせずにそれぞれの判断で行動を取ってしまったのだろうか。遠く過ぎ去った山での一日、疑念の雲霧は今も去来する。

さらばわが感謝を捧げん、友よ！
いざともに盃をかかげん。（ヘルマン・ブール）

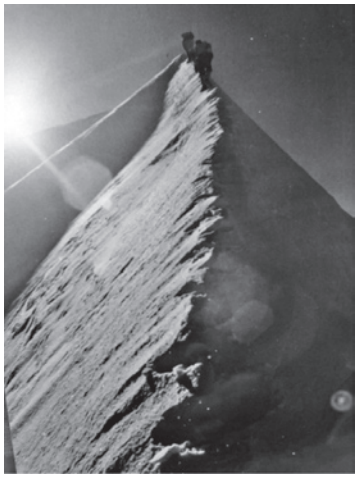
（個人的な邂逅記でありメンバーの名前はあえてイニシアルで記した。）



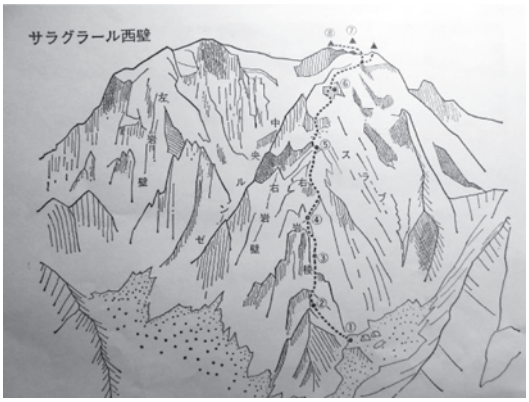
核心部の下降

サラグラール西壁（7350m）

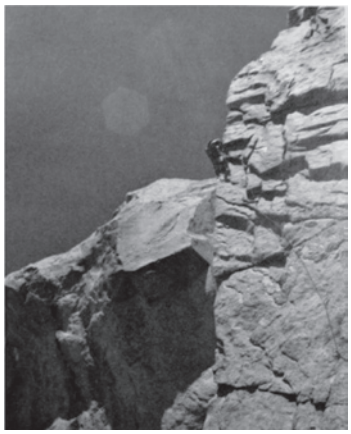
β峰へのスノーリッジ



スノーピークへの雪稜



西壁コース図



西壁5級の岩稜登攀

山旅への誘い

渓谷美と歴史を訪ねる黒部川「下の廊下」

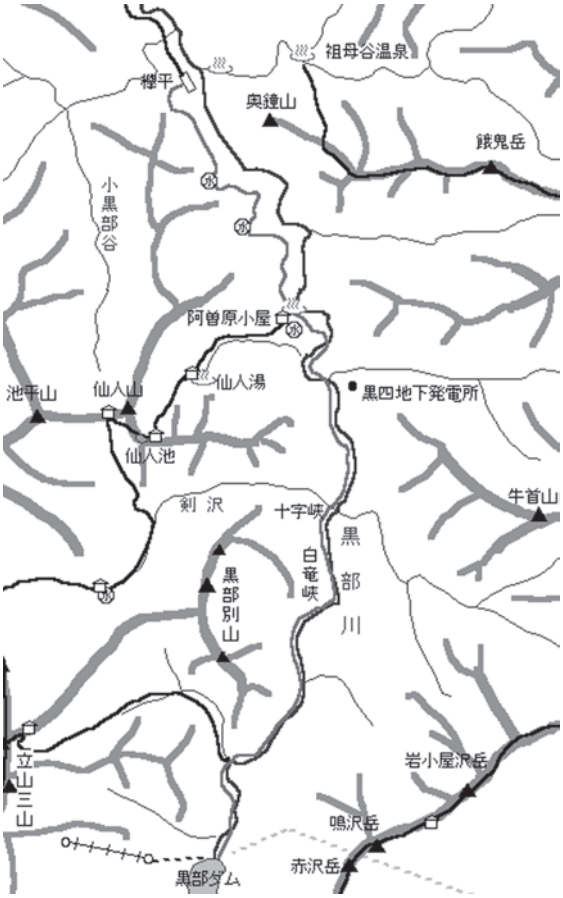
諏訪部　豊

これまで私は黒部川「下の廊下」に六回訪れた。かなり様子が分かってきたのでこの機会に一度まとめてみようと思う。

1．下の廊下について

1963（昭和38）年に黒部ダムが完成する以前の黒部川の写真を見ると現在ダム湖（黒部湖）となっている辺りは、黒部川の流れがここだけ穏やかになり、広い河原が広がっていた。平（だいら）と呼ばれる地名があったほどだ。ここにダムを作れば膨大な量の水を蓄えられることは大正時代から分かっていた。

平は立山側の五色ヶ原と後立山側の針ノ木峠とを結ぶ山道の中間地点であり、ダム湖になる前は簡単な橋が架かっていた。夏の登山シーズンだけ運行される「平の渡し船」はこの名残である。なお、この渡し船は水没した登山道の補償として関西電力によって運行されているので運賃は取らない。



下の廊下概念図。水の流れは図の下から上方向

この平から上流側を「上の廊下」、下流側を「下の廊下」と以前から呼んでいた。「廊下」と言うのは川幅が狭くて両側が壁のようにそそり立ち、川底から見てまるで廊下のように見える地形を言う。これは誤解しやすいことだが岩壁に付けられた歩道が廊下のように狭いから廊下と呼ぶのではない。

２．水平歩道、旧日電歩道について

下の廊下の左岸側に付けられた道を下流側は「水平歩道」、上流側は「旧日電歩道」と呼ぶ。水平歩道は、トロッコ列車の終点である欅平から上流側13㎞にある仙人谷ダム（昭和15年完成）までのことを言う。旧日電歩道は仙人谷ダムから上流17㎞先の黒部ダムまでのことを指す。日電は戦前関西にあった日本電力という電力会社の略称である。日電は戦後の電力会社再編によって関西電力に組み込まれてしまい、現在は存在しない。そこで名称に「旧」が付いている。

火力発電や原子力発電のなかった頃の発電は水力が主流だった。水力発電は高低差が大きいほど効率が良い。急流の黒部川は早くからその候補地だった。

地元富山県出身の高峰譲吉（消化酵素タカジアスターゼの発見で有名）はアルミニウム精錬事業に乗り出した。その精錬用電力確保のために黒部川の電力開発が始まった。そして高峰の流れを汲む旧日電が黒部川の水利権を得て、上流に、さらに上流にと測量用及び資材運搬用の歩道を延ばしていった。平までの歩道が完成したのが昭和4年と言うからその努力に驚嘆するばかりだ。ただしこの頃の歩道はその殆どが岸壁に丸太数本を渡しただけのまったくの桟道状態だったらしい。その後、時間を掛けて少しずつ発破を掛けて削って行き、昭和30年代に今のような岸壁をくり抜いた形状の歩道が完成した。

水平歩道、旧日電歩道ともに現在は関西電力の送電線巡視路のメインルートである。と同時に黒部ダム建設に際して当時の厚生省（現在は環境省）と結んだ「工事に使用した通路を一般にも解放する」という協定に基づいて関西電力が毎年三千万円程度の予算を付け、我々一般者も通れるようにここを整備している。

下流側の水平歩道は６月頃には通れるようになるが上流側の旧日電歩道は途中の残雪の溶け具合によって開通時期が前後する。早ければ９月初めに通れるようになるが10月にずれ込む年もあり、2015年のように１日も通れない年もある。そして雪が降り出す11月には危険で通れなくなる。なお途中にある阿曽原温泉小屋は毎年10月末には営業をやめて解体されるので下の廊下を通して歩けるのは９月から10月にかけての実質１～２ヶ月という短い期間だけである。

３．歩道を歩く

一般的には前夜扇沢駅まで車で移動してきて駅舎の軒先で寝袋泊する。駅舎は広く、また洗浄器付きトイレがあり、快適だ。朝起きたら手分けして切符購入と回送業者への車の引き渡しを行う。飲み水は一般的な沢登りとは異なり、途中では意外と得にくいので扇沢で補充しておく方が良いだろう。ここには破砕帯の水を引いて来てある。

左手で番線を握りながら丸木の桟道を進む

一番のバスに乗って黒部ダムのサイトに出る。ダムを簡単に見物したらここで必ずトイレを済ませ、案内標識にしたがってダム下に向かって下る。ダム下では木の橋で黒部川を渡り、左岸に出る。内蔵助沢出合（くらのすけさわであい）までは大した困難のない山道だ。出合の左手には丸山が聳えている。目をこらせば東壁を登っているクライマーが見えることもある。

内蔵助沢出合から先もそれほど困難ではない。鳴沢出合付近には鳴沢岩屋（岩小屋）がある。数人が宿泊できるが1982（昭和57）年８月、ここに寝ていた東京の鵬翔山岳会員７名が鉄砲水に流されて全員死亡するという事故があった。岩屋右側にはその慰霊プレートがある。

新越沢出合辺りからはいよいよ歩道が狭くなり、高度感も出てくる。左側に設置された針金（いわゆる番線）を頼りに進むことになる。針金の繋ぎ目などは怪我をしないように充分にテーピングされているが念のために左手だけ軍手をしたほうが良い。

新越沢出合付近に残る残雪が歩道を塞ぐ年があり、短いがはしごによる高巻きを強いられることもある。続いて「大へつり」の岩壁になる。まだ歩道がなかった頃、冠松次郎らによる探検時代にここをへつって踏破したから名付けられた。

「大へつり」の高巻きハシゴ

ここを過ぎると高巻きハシゴに出る。以前このハシゴはなかった。しかしすぐ先の歩道下の岩に大きな割れ目ができたの

で大きく高巻くことになったらしい。割れ目のできた歩道はほんの数㍍だし針金も残っているのでそのまま歩けないことはない。現にそのまま歩道を歩いて行く人もいるが念のためのハシゴだ。ハシゴは三段に分かれている。最上部まで登るとかなりの高度感だ。ハシゴを登るのと割れ目のある岩の歩道を歩くのとどちらが危険か五分五分だと思うがこのハシゴも下の廊下の名物の一つなので素直にハシゴを登ろう。なおハシゴは全て丸太でできている。やや太い丸太なので手の小さな人は握るのに怖い思いをするかも知れない。手袋をするとますます太く感じてしまうし滑りやすいので素手で上下した方が良いだろう。

ハシゴから20分ほどで黒部別山出合に至る。ここには別山沢が合流している。年によってはここには大きな残雪が残り、その解け具合で下の廊下の通行開始日が前後する。残雪が残っている場合はハシゴで残雪上に登り、残雪を横断することになる。残雪がない場合は別山沢を飛び石徒渉し、対岸は固定ロープを伝って這い上がる。

白竜峡を行く

間もなく名所の白竜峡だ。ここは黒部川の川幅が最も狭くなる所であり、黒部川の対岸がすぐそこに迫り、タル沢などは滝となって合流しているくらいだ。黒部開拓で有名な冠松次郎一行も初遡行の際はさすがにここを通過できず、後立山側を大きく高巻かざるを得なかった。そんなこともあって白竜峡の命名者は冠ではない。冠の著によると旧日電が歩道を付けた時に誰かが名付けたものらしい。

白竜峡の「白竜」が何に由来するものか良く分からない。川底に横たわる白く大きな花崗岩を竜に見立てたのか、この辺りの白く美しい花崗岩全体を言うのか、ここから急流になって水が泡となって白く見えるためか、はたまた夏には巨大な残雪が残っていて狭い沢沿いに竜のような姿を見せていたものか、いずれが正解か知りたいものだ。白竜峡の入口はちょっとした広場になっていて休憩適地だ。

白竜峡を過ぎると2011年に崩壊した個所に出る。今は丸太の歩道ができているが崩壊のあったその年はその時点で通行止めになった。

その先で水の掛かる沢を横切る。ここは常に歩道に沢水が降り注いでいる。その日によって水量が異なる。少ない日はちょっと濡れる程度だがカメラなど濡れて困る物はしまった方が良いだろう。

十字峡

高度感の出る撮影ポイント

その先が十字峡広場だ。テントが二張ほど張れる平地が上下二個所あり、下の平地から樹林の中を少し下ったところに見晴らし台がある。いよいよ下の廊下最大の名所十字峡だ。

向かって右側から黒部川本流が流れ、そこに右岸から棒小屋沢が合流し、左岸から剣沢が合流している。三つの川が一点で合流する世にも稀な景色だ。

棒小屋沢の水量は、昔はもっと豊富だったらしいが黒部第四発電所の発電用として横取りされてしまって今は少ない剣沢は豊富な水が滝となって流れ込んでいて、この上流にはここからは見えないが「幻の滝」の異名を持つ剣沢大滝がある。

十字峡にさらに近づくには見晴らし台の上段から固定ロープをつかんで下りる。下段に下りると十字峡に近付き過ぎてしまってカメラに全景が写らない。したがって人物は下段に位置し、それを見晴らし台上段から撮影するのが良いだろう。人で混んでいる時はすばやく記念撮影を終えて次のグループに場所を譲ろう。

元の広場に戻りザックを背負って先に進む。すぐに剣沢を吊り橋で渡る。吊り橋の中間からも十字峡が見える。

作郎谷宿舎

少し進むと高度感が良く出る撮影ポイントだ。川底から数10㍍はあるだろう。

十字峡から20分ほど下った所から対岸の高い場所を良く見ると作郎谷宿舎が見える。これは黒部第四発電所建設を請け負った大成建設が建てた物だ。「なぜこんな所に？」と思うが木本正次著「黒部の太陽」を読めばその理由が分かる。

その先は半月峡、S字峡と過ぎて行く。半月峡はどこがそれかはっきりしないがS字峡の少し上流の流れが右に折れる辺りを言うのだと思う。

やがて右手に黒部第四発電所の電線引き込み口が二つ見えてくる。ここで誰もが合点が行く。つまり黒部ダムに貯めた水を地下通路でここまで引き、この地下で発電しているのだ。そしてその電気を、送電線を通じて関西方面に送っているのだ。何と言う人間の力だろうか。こんな巨大なプロジェクトを計画し、実行した人々に畏敬の念を禁じ得ない。

やがて歩道は下り坂になり、東谷の吊り橋へと導かれる。吊り橋で黒部本流を右岸に渡るのだが渡った先に後立山側から東谷が合流しているので東谷の吊り橋と呼ばれている。

ここで旧日電歩道は終わる。ここから先、車が通れる砂利道を進むと仙人谷ダムに出る。エメラルド色の水を湛えた小振りの重量式ダムだ。1940(昭和15)年に完成した。戦争に間に合わせるべく突貫工事で作った物だ。このダム建設のための資材を運ぶ目的で欅平・仙人谷間の高熱帯にトンネルが掘られた。その様子は吉村昭著「高熱隧道」に詳しい。なお先ほどの砂利道は戦後黒四発電所を作る際に仙人谷ダムから資材を運んだ道だ。

黒部第４発電所電線取り出し口

阿曽原温泉小屋テント場

仙人谷ダムは建物内部の通路を進む。関西電力の従業員に出会うこともある。奇妙な出会いだ。やがて通路は線路を横切る。欅平から黒四発電所前まで通じている上部軌道だ。下から伸びているトンネルは硫黄の匂いがして熱い。高熱隧道だ。ダムの真上に駅があり、時間が合えば小さな電車と遭遇できる。

通路を進んで外に出ると関西電力人見平宿舎に出る。これまた奇妙な景色だ。

ここから先は疲れた身体に応える急な登りとなる。登り付いて水平道になり、下りに転ずるとやがて阿曽原温泉小屋に着く。

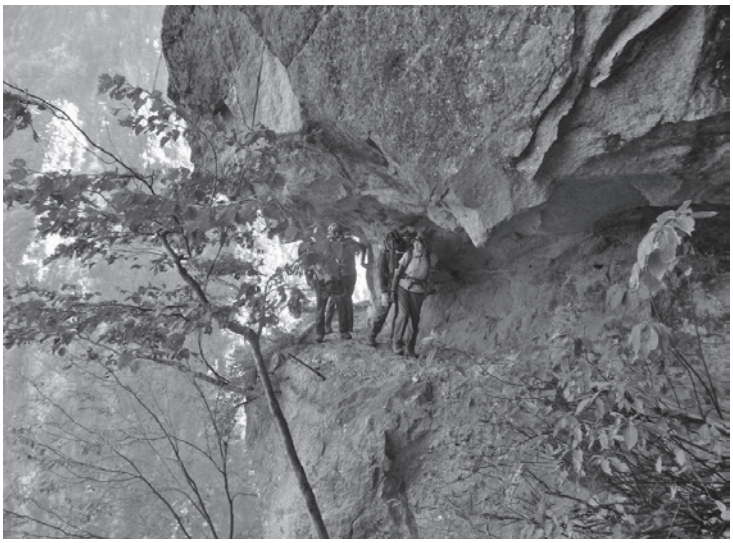
この小屋は夏から秋にかけて営業している。雪崩を避けるために11月初めには解体する。下の廊下シーズン中の小屋は相当混んでいる。布団一枚に２人は覚悟しなければならない。夕飯は名物のカレーだ。これが結構美味しいし、制限時間内はおかわり自由だ。なおこの小屋が建っている土台は阿曽原谷宿舎跡だ。

テント場は小屋の下だ。余り広くないので遅く到着すると場所取りに苦労する。大型テントは避けて大きくても４人用程度にして分散すべきだ。

名物の阿曽原温泉露天風呂はテント場から10分ほど下る。岩混じりの急な下りだからサンダルで行くと後悔する。浴槽は長方形の小さなプールのような形だ。高熱隧道からの熱湯と沢水をホースで引き込んでいて温度調節はホースの出し入れで行う。脱衣所も洗い場もない。浴槽が一つなので男女は一時間毎に入れ替える。夜は混浴となる。周囲は真っ暗なので女性も入りやすいだろう。

阿曽原温泉露天風呂（内湯はない）

翌日の出発時刻は欅平からのトロッコ列車の混みようで決まる。前日に小屋でトロッコ列車の予約状況を聞いておく。そこから逆算して出発時刻を決める。なおトロッコ列車は宇奈月からの往復客だけが予約可能であり、片道だけの我々は予約できない。



大太鼓（下流側から見ると岩が太鼓に見える）

二日目は暗い中、急な坂道の登りから始まる。一汗かいた頃、前日と同様の水平な道になる。水平歩道の始まりだ。

１時間ほどで折尾谷に着く。大滝直下は絶好の休憩場所だ。ここで朝食とするのも良い。その先で堰堤の中のトンネルを通る。やや暗いが短いのでヘッドランプは不要だろう。足下はいつもぬかるんでいる。靴が汚れるが覚悟を決めてジャブジャブ歩く。

その先、黒部川との高度差は相当なものになるが眼下は樹林があるので怖さはない。やがて二日目のハイライトである大太鼓に至る。ここはとても大きな岩盤をくり抜いてあり、そのくり抜きの大きさに驚く。対岸には奥鐘山西壁が大きく迫る。高距800mのこの壁は途中に大きなハング帯があり、一日では抜けられな

いとのこと。残念ながらここを登攀しているのを見たことがない。

大太鼓の撮影ポイントを通過すると15分で志合谷のトンネルに着く。志合谷を横断する歩道は雪崩や谷の崩落で手に負えず、やむなくトンネルを堀ったのであろう。全長150mで中は真っ暗だ。ヘッドランプは当然必要だ。入ってすぐの右側に石を捨てた穴がある。また30m程度進んだ所は天井が低くなっていて頭をぶつける恐れがあるので要注意だ。

志合谷トンネルを出て50mほど進んだ先の右下眼下には「高熱隧道」に出てくる志合谷宿舎跡が見える。今はコンクリートの一階、二階部分しか残っていないがこの上にあった木造三階、四階部分が泡雪崩(ほうなだれ)で黒部川の対岸に吹き飛んだそうだ。犠牲者は84人とのこと。なお「高熱隧道」では鉄筋コンクリート作りの宿舎が吹き飛んだとなっているがそれは筆者の勘違いで実際に吹き飛んだのは木造部分だったそうだ。

やがて欅平の駅舎が見えてくる。駅の構内放送やトロッコ列車の音も聞こえるがまだ先は長い。

やがて現れる鉄塔と送電線は欅平にある黒部第３発電所で発電した電気を関西方面に送るための物だ。対岸には後立山連峰の一部(鹿島槍ヶ岳、唐松岳、不帰ノ険、清水岳など)が見える。雪をかぶっていることもある。

やがて水平歩道は分岐に至り、鉄塔の脇を下りる。ここから下は蜆坂(しじみざか)といわれる坂道で欅平に下り着く。鉄塔の根元で最後の休憩をしよう。蜆坂は観光用に整備され、以前に比べて歩きやすくなっている。下り30分で欅平に到着する。せっかく早朝に出発したのだから乗り遅れないようすぐに列車の予約をしておこう。

トロッコ列車は昔、資材運搬用だったわけであり、欅平は単にその終点ということだけだ。したがってここには見るべき物が殆どない。ビジターセンターが開設されたが「何もなかった」と思う観光客への言い訳程度の物しか展示していない。駅ホームの目の前には仙人谷ダムの水で発電している黒部第三発電所がある。戦前作られた物だ。

トロッコ列車の普通車は囲いがない。その日の天候にもよるが走り出すと寒いこともあるので上に羽織れる物を出しておくと良い。線路は多くがトンネルの中だ。しかも下の廊下の素晴らしい景観を見てきたばかりの目で臨む車窓の景色はあまり期待しない方が良い。途中に鐘釣温泉、黒薙温泉がある。どちらも日帰り入浴可能だがその日の内の帰宅を考えると立ち寄りは無理だ。

110分ほどの乗車で終点の宇奈月温泉に着く。駅を出ると目の前に関西電力の展示館がある。無料だし、ここは見るべき物が色々あるのでちょっと立ち寄ろ

う。特に黒部川の昔の映像は興味深い。

車を回送しておいた場合は駅舎前方の駐車場に駐まっている。温泉は町中に共同温泉があるが駐車場がないので車は駐めたまま入浴するのが良いだろう。しかし共同温泉は狭いので車に乗って「とちの湯」に向かうのが良いだろう。宇奈月の温泉はどれも黒薙温泉からの引き湯であり、「とちの湯」も同様だ。

一風呂浴びたらいよいよ長い帰路が待っている。日本海から太平洋まで戻るのだから大移動だ。運転は無理せず交代しながら行こう。

なお、もう一日余裕があるならば欅平から一時間ほど歩いて祖母谷温泉にもう一泊する手もある。その場合には時間に余裕があるので阿曽原温泉小屋発は遅くても良いだろう。なお欅平駅は土産物程度しか売っていないのでここでの食料調達は無理だ。予め二泊分の食料を用意して歩こう。酒類は欅平駅でも祖母谷温泉小屋でも手に入る。

４．先人、冠松次郎

下の廊下を初めて訪れる人は冠松次郎（かんむり　まつじろう）の偉業に驚くことだろう。冠は東京神田の質屋の息子に生まれた。1911（明治44）年に初めて黒部川に入り、その魅力に取り憑かれた。以来毎年東京から汽車を乗り継いで黒部川の探検に赴いた。人夫を何人も雇い（その中には剱岳で有名な宇治長治郎もいた）、何日も山に入った。しかもその様子を克明に記録していて本を何冊も出した。その情熱に驚きを覚えるはずだ。と同時にそれを行うことの出来た財力にも驚嘆するだろう。冠は黒部を歩くことを運命付けられて生まれてきた人物だったのだろう。

５．車の回送について

このコースを、交通機関を使って行こうとするとその往復にかなりの時間と金額を要するだからやはり車での往復が便利だ。しかし入下山口が離れているので車は回送業者に委ねるべきだ。立山黒部アルペンルート（扇沢駅～立山駅）の車の回送サービスは以前から行われていて良く知られている。この業者の一部に扇沢から宇奈月まで車を回送してくれる会社がある。便利なサービスである。表示料金はそれなりに高いが、ネット経由予約割引、ＪＡＦ割引、複数台割引などを組み合わせれば充分納得できる料金となる。宇奈月温泉駅の目の前に自分の車があるのは予め分かっていてもちょっとした驚きだ。このサービスが需要不足で終了してしまわないようぜひ利用したい。

６．その他

（１）扇沢からの始発バスは時期によって発車時刻が異なる。ダム観光のハイシーズンである10月10日頃までは6：30発だがそれを過ぎると7：30となる。この一時間の差は阿曽原温泉小屋到着時刻に影響し、テント場の確保や夕食、露天風呂入浴などせわしなくなる。したがってなるべく6：30発がある時期に計画したい。

（２）仙人谷ダムを通過する上部軌道列車は本数が少ない。時刻表はネットで調べるとして、この列車を見るためにも上記の6：30発のバスで出発したい。

（３）黒部ダムを出発すると阿曽原温泉小屋までトイレ設備はない。歩道は狭いし他の登山者も多いので男性の小用といえども場所探しは容易ではない。上流部はまだ周囲に灌木があるのでその中に入ってできるが、高巻きハシゴ辺りから東谷吊り橋までは適所がないと言える。唯一、十字峡見晴台へ下りて行く林の中段に若干の平地がある。まだまだ道中は長いので女性はそこで済ませるべきだろう。東谷吊り橋を渡れば灌木が現れるのでゴソゴソ入って行けば何とか用を足せる。仙人谷ダムや人見平宿舎は「緊急だ」と言えばトイレを貸してもらえるかも知れないが、いずれにせよトイレの問題は心しておくべきだ。

（４）歩道の整備は富山県の業者が行っている。ここ数年は予算に余裕があるためか年々良くなってきている。例えばかつては丸太三本しかない桟道もあったが今では最低四本だ。高巻きハシゴも山側にロープの手すりしかなかったが今では谷側に丸太の手すりが付けられていて安心して上下することができる。ずっと左手で握っていく頼りの番線も岩に密着している個所では隙間がなくて握れなかったが今ではそんな個所はなくなった。

（５）黒部川開拓の歴史を古い順にたどるならば欅平を出発して上流の黒部ダムに向かうのが順当なコースであるが、全体で標高差870mを登ることになるためかこの方向に歩く人は少ない。なおどっち向きのコースを歩いても一度も山頂に立つことがない。したがってこれを「登山」と呼ぶかは難しいところだ。

（６）黒部第四発電所のためのダムなので「黒四ダム」と言うがこれは通称であり、関西電力の正式名称は「黒部ダム」だ。ちなみに「黒三ダム」に相当するのが仙人谷ダムであり「黒二ダム」相当は小屋平ダム、「黒一ダム」相当は猫又ダム（今は廃止）だ。

（７）下の廊下で渓谷美に感心するだけでなく黒部川開拓の歴史に興味を持ったら既出の吉村昭著「高熱隧道」、木本正次著「黒部の太陽」、そして冠松次郎著「黒部渓谷」などを読みたい。下の廊下を訪れる意義が数倍にもなることだろう。

随　筆

【　狩　猟　】

山崎　郁郎

1965年１月15日から４日間、私達パーテイ４人、長井（ＪＡＣ６２０２）、園田（ＪＡＣ６２０３）、秋元女史（家形ヒュッテのアルバイトの小屋番）と私は那須の冬山を楽しむ為に三斗小屋温泉（煙草屋旅館）に泊まった。あくる日の16日は天候が激変、吹雪になってしまった。

夕食の時、泊まり客の登山者４人のパーテイが帰らずに大騒ぎとなった。宿には30人程の登山者が居たように思う。早速、三斗小屋温泉主人一平さんが救助パーテイを募ったが応募したのは私達の４人だけだった。

一平さんと我々は別行動で捜索に出たが、その夜は遭難者は見つからず、明くる日は早朝より一平さんをリーダーに捜索を再開した。結局隠居倉でふらふらになって立ち往生中の遭難者達を見つけることが出来、三斗小屋まで連れ帰った。遭難者で最も状態の悪い人は手足の指20本の内、凍傷から救われたのはたったの４本であった。

私は実際の凍傷を見るのはこの時が初めてであった。凍傷にかかった手足の指は一見何でも無いように見えるが蝋細工の様に透き通っている感じだった。この遭難救助が縁でその後、一平さんとは親戚付き合いになり、長井と私は冬の三斗小屋に入り浸りになった。

私と長井は山の事については何事も一平さんに教わろうと思った。最初はウサギの罠の点検である。罠は投げ縄のように首が引っかかると自然に絞まるように針金を作り、ウサギが通りそうな木々（これが素人には分からない）の間に100組近く仕掛けて置く、ウサギが掛かるとウサギは前進ばかりでバックはしないので首が絞まるのである。

罠を早朝見回ると大概５羽ぐらい掛かっている。都会育ちの私達にとっては此れが非常に面白く毎日罠を見回りに行った。私達にとってウサギは貴重だが一平さんにとっては珍しくもないので解体は私達にやらせてくれた。しかし長井は別として私は顔面の皮剥ぎは気持ちが悪くて下手である。そして冬のウサギは痩せていてあまり食べるところは無い。ある年、私達が罠を点検に行くと私達より早く見まわるキツネがおり、それにいつも食べられて頭だけが残っている悔しい年

が有った。私達は復讐戦を考え二人でキツネの罠を作る事にした。私達はこのような物を作るのは上手である。長井の叔父さんは田町に有る長井スプリングである。私も可なりの工作機械を持っているのでそれらを使いネズミの足を挟むネズミ取りの強力な物を作った。暫くすると一平さんから「キツネ獲れた」の電報が届いた。この頃、私達はサラリーマンで長井は行けたが私は行けなかった。暫くして三斗小屋に行くと先日のキツネの毛皮が頭から足の爪まで残して綺麗に剥がされ干してあった。皆は美味しかった、美味しかったと私を悔しがらせたがキツネが美味しいとは思えない。このキツネとは浅からぬ因縁で私が結婚の時、一平さんからお祝いが届き、開けてみるとこのキツネの襟巻が入っていた。この襟巻には顔、手足の爪までついており戦前の襟巻と同じであった。ただこの頃の襟巻は頭も爪も付いてない為、家内から気持ち悪がられた。

あまりに上手な罠を見て山﨑さん！　どうせなら熊を挟む罠を作ったらどうだろう！と言い出した。それならと私達は熊用の頑丈で立派な罠を作って持って行った。この罠は立派で可なり凄い物だった。スプリングを起す時にはテコの原理で丸太を使い起す。 罠が働くとバイーンとものすごい音がして締め付ける。これでは人間が掛かってしまう、とみんなが心配した。当時、私達は地下足袋で山を歩いていた為余計に怖かった。それなら罠が有りますと看板を掛けようと長井が言いだし一平さんがそれに賛成、実施に移った。暫くすると一平さんから連絡が来て罠には掛かったが熊はその足を食いちぎって逃げてしまったと悲痛な声で知らせてくれた。それを聞いて私達も可哀そうになり足を挟む罠は一切止める事にした。熊は苦しかったであろうと現在でも熊に悪い事をしたと思っている。マタギの一平さんはよく猟に連れて行ってくれた。初春の雉とウサギ狩りにも連れて行ってくれたが弾丸はバラ玉であり、良く獲れるが半矢の雉が逃げるのを追い回すわけだがかなり大変である。ウサギは我々が勢子をやり追い出すのだがすぐ脇からウサギが飛び出す事も有り、それをバラ玉で打つので可なり危険でヒヤッとした事が数回ある。

秋のクマ狩りは豪気である。熊は大食漢のため、一頭の熊が木に登って葉を食べだしたら枝は折られてしまい、その木は大概丸裸にされてしまう。木に登って餌を食べている熊を見つけると射撃の命中精度を上げるため、垂直に生えている木の麓まで急斜面をほふく前進する。近くへ行けば行くほどよいが、弾が当たると熊が目の前に落ちてくるため恐ろしい。熊を打ち、急所に当たれば良いがこんな時はめったになくて大概半矢になり、目の前に落ちて死にものぐるいで暴れるので、生きた心地など有ったものではない。秋の熊撃ちは遠くから見たほうが安心である。しかし少し慣れると射手と同じ所まで近づきたくなる。熊は必死に暴

れまわるが射手の一平さんと私を比べると逃げ腰の私の方が弱いとすぐ分ってしまい必ず私に向かってきた。その為に私は１間半程の槍に見立てた材木を持参、槍同様に突きまくる事にしていた。本州のツキノワグマは普通60キロぐらいである。

度胸が座り、慣れてくると大人の人間の大きさと思えるようになり棒が有れば剣道をしているので負けるわけがないと思えるようになる。（大学では山岳部に入るつもりが当時は遭難が多いため、父からもＪＡＣの皆様からも止められ結局剣道部に入った、ヘッポコながら剣士である）

熊は前足で抱きかかえるようには出来るが左右に手を平泳ぎのように動かす事は出来ない。この為人間のようにストレートパンチは無いが横殴りのパンチは強い。真面に殴られると肉を持って行かれ命が無い。

一平さんは、戦前からのウインチェスター73(？)の連発銃と水平２連筒のショットガンを持っていた。ウインチェスター73(？)は西部劇に出てくる銃でとてもかっこ良い。 銃身の下に平行にもう一本筒が有り、ここに弾丸が10発(？)位入り、引き金の覆いが大きくてその覆いを中指、薬指、小指の３本で起こしながら装弾して撃つので連射も出来る。昔、ライフルマンというテレビが流行った、あの銃である。

古い銃なので弾速が遅いため獲物に当たると体内で弾丸が暴れる為、却ってダメージが大きい。熊の胃や毛皮を傷つけない為、熊には次弾を決して撃たない。結局叩き殺すか短刀でとどめを刺すのである。私は銃、刀剣が好きなので薬きょうに火薬を測りで量り詰め込み、弾丸を薬きょうにセットするまでを手伝ったものである。

当時は獲物もいろいろで、熊も鹿もよく獲れた。冬山で獲れたばかりの獲物の腹を裂き、凍えそうになった指先をまだ温かい獲物の腹に入れ体温で手を暖める、あの温かさは今も忘れられない。頸動脈？を切り、吹き出る血をコップに受けて生ぬるい血を分け合って飲んだことも良い思い出である。

熊が一頭獲れると、その頃は確か10万円位だったと思う。（私の給料が１万５千円？位）毛皮が４万円、肉が１万円、熊の胃が５万円の割合だったように思う。

一平さんは猟の名人なので熊の一頭など直ぐに捌いてしまう。撃つときは夢中だが獲れると胃に傷が付いていないか心配する。私は熊の胃を取ってからでないと触らせてもらえない。熊が捕れると慎重に腹を割き、最重要な（高価な）熊の胃（肝？）の内容物が漏れ出ないように胃の出入り口を凧糸で縛ってしまい、それから破らないように丁寧に取り出す。（ちょうど水枕のような状態で取り出す）胃は

特大のナスの大きさで、これを板２枚[まな板２枚]で挟んで、上から紐で破れない程度にきつく縛って、いろりの近くにぶら下げ、少しずつ乾燥させていき、乾燥の進み具合を見ながら、また紐をきつく縛り、何日もかかって作り上げる。

でき上がりは、ナスの形をした、黒いからすみ、のような６ミリ程の厚さのものとなる。病気の時、耳掻き程飲むと、もの凄く苦いけれど、とてもよく効き今でも幻の万能薬として使われている。(熊の胃とは言うが学術的には胃ではないかもしれない)

熊の毛皮は裏側を表にして戸板に釘で打ち付け塩を塗り付けて天日で干すとカリカリになりそれを軽石で擦りバックスキンの状態にする。

厳冬期の那須の強風も慣れてくると平気になり会社は土曜日の勤務は午前中だったのを利用して長井とは三斗小屋温泉に入る日だけを決めて勝手に入山した。大雪の為、途中でビバークなど随分したものである。

私は残念ながら冬眠中の熊猟について行った事は無いが長井の話では一平さんは冬眠している穴を見つけると潜って入り、銃口を頭に付けて撃つ。このため、日本では禁止されているが、けん銃が有れば軽いので助かるとよく言っていた。

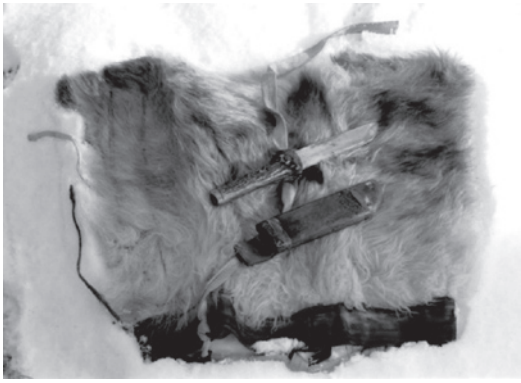
一平さんは随分修羅場をくぐっているので熊が不意に穴から出てきた時など抱きかかえられたり、噛み付かれたりするらしいがその様なときは鉄砲を撃てずに、泡を食うらしいが銃口で熊を突きまくって何とか逃れるとの事である。これらの事を飲むとよく話をしてくれた。

父の所属していた霧の旅会は静岡支部長の牧野様も属しておられ毎年の正月、福島の旅館「髭の家」で正月を迎えるのが恒例であった、私は三斗小屋で遊び、その後スキーで会津田島に下り、それより只見線の会津川口近くの玉梨温泉(宿主が三斗小屋の自称番頭)に泊り会津川口から只見線に乗り福島の髭の家(旅館)で正月を送るのが恒例であった。このコースは幾ら山スキーが好きでもビバークを１～２泊する為かなり厳しい。三斗小屋からスキーで田島に向かっている時、崖の上から小さな雪崩が起きた。危険が無いので気楽に観ていると一頭のカモシカが落ちて来たのである。そのカモシカは立ち上がりふらふらと倒れそうになりながらよたよたと歩き始めた。

暫く見ていたが此れなら捕まえられると気が付き直ぐにリックを開き自家製の短刀を取り出し一気に追いかけた。50メートル位で私は追いついたので跳び箱に飛び乗るように乗り移り短刀で刺しまくった。カモシカを一頭獲ったとなると嬉しさいっぱいである。一平さんの捌きを見ていたお蔭で何とか毛皮を余り傷つけずに(刺しまくってはいるが)剥がすことが出来た。しかしどう頑張っても首から上と両足首は剥がすことが出来ずに諦めた。それでも胴体の毛皮と可なりの肉を

粗削りながら採取する事が出来た、私に取ってこのような大物を捌いたのは初めてで勿体無いけれどもういいやと思う頃には４時間も経っていた。カモシカの肉は鹿よりも余程脂ぎっていてステーキとして焼くとじゅうじゅうと油が滴り草食動物なので熊等より余程美味しい。

もう歩く気力も無いし暗くなるのでその日は焚火でツエルトにくるまり一夜を明かした。明くる日は内臓その他を勿体無いが川に投げ捨て田島駅より家路についた。駅に着くと自分ながら血だらけで驚いたが我が家まで何とか咎められずに帰る事が出来た。当時ＪＡＣの長老が集まる土曜会にこの焼き肉を持参して喜ばれたのを思い出す。



家では皮の裏側に塩を刷り込み縮まないように戸板に釘で張りつけ、まず天日で腐らないように乾かす。そして陰干しに入りカリカリになるまで乾燥させる。それから皮を軽石で丁寧に擦り、鞣したバックスキンのようになるまでこまめに擦る。是で出来上がり。

鞣してない尻皮は油が有るため水を弾く。エスキモーなど写真で見ると、鞣していない毛皮の外套を着ているが、あれと同じ原理である。私の物は大きいので普段はWに折りたたんで腰に下げている。自分で腰紐を附けると値打ちが落ちるので、登山用品の老舗、銀座の好日山荘の店主海野さんに特別にお願いして、腰紐を付けて尻皮として使えるようにして貰った。このようにした尻皮はビバークの時、Wにしたのを延して背中に敷くと厳冬期には寒さ除けの最高の武器となる。鞣してないのが残念ですね、等と言う人がいるので驚いてしまう。本来の尻皮は水を吸わないように鞣さない。猟師や樵の尻皮は無論鞣してない。

静岡支部のモンゴル遠征での最後の日、無事達成したお祝いに羊を２頭捌いた。モンゴル人二人が両手両足を持って上向きに寝かせると直ぐにヘソの上側の皮膚に10センチ位切れ目を入れ、そこから手を差し込み、心臓を握り締めて殺したのには驚嘆した。そして捌き終えるのにたったの30分位であった。チベットのテンリでもカトマンズでも捌くのを見たがこのような事は無かった。

特別企画

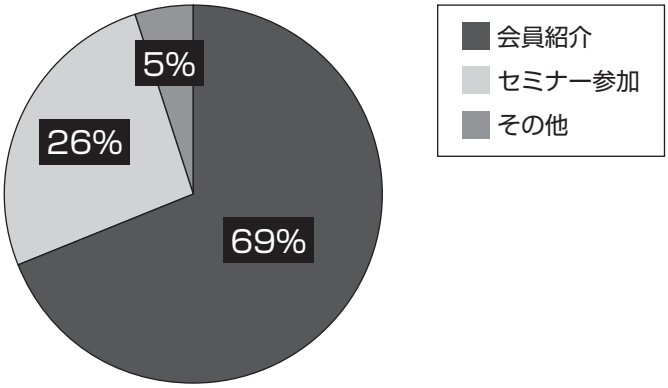
2012年日本山岳会は公益社団法人となり、従来のサロン的な団体から、いろんな活動を行う団体へ衣替えをしました。静岡支部では、その活動の一つとしてハイキングセミナーを実施していますが、このセミナーの参加者から入会される人も増えており、山岳会の問題の一つである会員数減少に些かでも歯止めをかける役目を果たしている現状です。

そこで支部創立70周年記念誌の特別企画として、比較的最近入会された方たちを対象にしたアンケートを実施しました。入会の動機はいろいろあると思いますが、実際に入会されてどのように感じておられるか、今後どのようなことを期待されるか、具体的な提案も含めて率直なご意見をお聞きしました。アンケートの結果は以下の通りです。

アンケートの回収

送付数28通、回収数18通、回収率＝18/28＝0.64　でした。回収率は無記名で切手を貼った返信用封筒を同封した割には低かったように思われます。

問１．入会のきっかけは？



グラフに示すように、約７割が会員紹介であり会員の勧誘努力が今後も必要であると同時にセミナー開催も有効であることが分かります。

問２．入会の動機、目標、又は決め手は何ですか？

日本山岳会という肩書が欲しかったと書いた人が一人いたが、殆どの人が自分１人では行けない山に登りたい、登山知識、技術の習得・レベルアップを図りたいと述べている。そして山研、図書室などハードの利用をあげた人もあった。

問３．実際に入会してどうでしたか？

活動に参加できていない人もいるが、参加した人は、静岡支部以外も含めて幅広い人達との交流を通じて多くのことが吸収でき、山行や行事にも満足している。文珠山荘の年間行事も楽しんでいる。一方組織・運営の面では、改善の余地ありとの指摘もあった。

問４．静岡支部への提案や要望をお聞かせ下さい

15人の方から各種提案や要望が寄せられましたが、その全てをそのまま列記しても混乱するので項目に整理して要約をしてみます。

①　例会の充実と情報の告知

例会の出席率を上げるには、もっと内容を検討すべき。そして、例会に出られなかった人へのフォローをやるべきである。その具体的方法としては、ホームページ、E-mail、LINEがある。

②　会員山行と安全登山

休日及び平日の山行を、講習も含めてもっと増やして欲しい。又登山計画書を統一して欲しい。

③　入会勧誘と募集方法

初心者安全講習会の実施、勧誘パンプレットの作成、ホームページに山行記録を載せる。更に、ホームページにリンクさせてFacebookを開設するのも有効ではないか？JACは敷居や会費が高いという指摘もある。具体的な勧誘先として、既存の山岳組織のベテランを狙ったらとの提案もある。

④　ハイキングセミナー

現地集合は難しいので静岡駅などにする。セミナーの最後に参加者に次の目標・希望を訊く。

⑤　その他

リニアについてももっと関わりを持っても良い。

以上がアンケート結果の纏めですが、特にご意見や要望をどのように今後の支部運営に生かすかは、役員会や例会で検討して対処していくことになります。

（文責：長野和義）

文珠山荘物語

諏訪部　豊

静岡市葵区牛妻の集落の上、中平と呼ばれる場所に綺麗に整備された茶畑が広がる。その茶畑が尽きたその先に文珠山荘（以下山荘）がある。山荘は建坪20坪、一部二階造りで総床面積29坪のがっちりした本格的なログハウスだ。この山荘は、共に故人となってしまった荻野恭一永年会員と子息の士郎さんが８年９ヶ月の歳月を掛けて手作りした物だ。

本稿ではまず荻野恭一会員の経歴を辿りながらこの山荘建設に至った経緯を記してみたい。以下敬称略とする。

①　山荘建設以前

・荻野恭一（おぎの　きょういち）1914（大正３）年３月３日、10人兄弟姉妹の次男として牛妻の荻野家に誕生。兄の準平は長じて静岡市議会議員、静岡県会議員、静岡市長等を歴任した。

・1927（昭和２）年４月、静岡市立駿府商業学校（旧制中学、男子校、現県立静岡商業高等学校）入学。

・1931（昭和６）年８月、駿府商業学校５年生（最終学年）時に級友２人と共に赤石岳から荒川３山を縦走した。当時は静岡駅から牛妻までは軽便鉄道が走っていたが牛妻から先は交通機関がなかったので自宅からの６泊７日の全行程を歩いた。

・1932（昭和７）年３月、駿府商業学校を卒業し、父親が運営する特定郵便局賤機郵便局に就職。

・1937（昭和12）年11月、結婚。妻とく代は加茂郡安良里村（現西伊豆町安良里）出身の看護婦。恭一の父や弟を献身的に看護してくれたことに感激し、見そめた。局舎の隣、牛妻坂下に新居建設。

・1938（昭和13）年、長男士郎誕生。この頃全国組織の郵政山岳会に入会し、後に副会長などを務める。

・1942（昭和17）年６月、父親の後を継いで賤機郵便局の局長となる。賤機郵便局は特定郵便局ながら安倍奥地域への集配業務があってエリアが広く、20数名の局員がいた。また電話交換局も兼ねていた。

・1945(昭和20)年、長女雅子。1948(昭和23)年、次女誕生。
・1962(昭和37)年、日本山岳会入会。この頃から中平にログハウスを建てる思いを抱く。
・1968(昭和43)年、牛妻平の本家隣に新居を建てる。
・1969(昭和44)年７月、55才時、局長退職。自然保護活動に力を入れる。
・1972(昭和47)年12月、妻とく代(55才)他界。憔悴の日々を過ごす。

②　建設から寄贈まで

・1988(昭和63)年頃(74才頃)、ログハウス建設を決意し、周囲に宣言する。木工細工で縮尺模型を作り、また士郎と共に愛知県内(所在地不明)にログハウス建設の勉強に出向いた。
・1989(平成１)年６月、山荘建設を開始した。まず所有するヒノキ林を伐採し、建物の位置を決めた。土建業を営む恭一の弟が建物の基礎造りを行った。伐採したヒノキは皮を剥き、洗って乾燥し、設計した寸法の長さに切断した。その丸太を基礎の隣に基礎と同寸法で作った型枠に乗せて１段ずつ水平を出す作業を根気よく続けた。２段出来上がると下の１段分の丸太を本基礎の上に乗せて行った。「何百年も持つ家を作るのだ」が口癖だった。休日は士郎が手伝った。
・1997(平成９)年８月(83才時)山荘完成。文珠山荘と命名。畑も作り、愛犬太郎と共に一人晴耕雨読の生活を送る。
・2014(平成26)年(100才時)、一人で生活することが困難になったため本宅に居を移した。この頃から山荘の維持管理を日本山岳会静岡支部に託すことを決意

チェンソーで丸太を刻む士郎氏

本体の向こう側にある同サイズの型枠に
２段積んで水平を出す

台所入り口に立つ恭一氏

恭一氏(中央)、士郎氏(左端)も同席した引き継ぎ

し、支部の定例会や新年会でその旨表明した。

以上のような経過を経て山荘が建設され、それを支部が引き継ぐことになった。そして2015(平成27)年６月14日、支部会員他10数名、荻野恭一氏・士郎氏も同席して山荘の引き継ぎ及び大掃除を行った。

その引き継ぎに安堵したかのように翌７月、士郎氏が他界した(享年77)。また恭一氏も2018年３月、104才の天寿を全うした。

③　山荘での行事

山荘引継ぎ後、現在(2019年12月)に至るまで主に以下のような山荘行事が行われてきた。

・2015(平成27)年10月31日、第１回目の文珠山荘行事。支部会員他10数名参加。映画「剱岳点の記」上映。ハロウインパーティー。以後年に６回開催するようになった。各回の参加者は数名から20名程度で推移している。

・2015／12／19～20日、忘年会、映画「クライマーズ・ハイ」上映

・2016／４／16～17日、花見と野趣の会、「ビヨンド・ザ・エッジ～歴史を変えたエベレスト初登頂」

・2016／６／25～26日、山の歌を歌う会、「アイガー北壁」

・2016／９／10～11日、納涼祭、「黒部の太陽・完全版」

・2016／10／29～30日、ハロウイン、「八甲田山・ノーカット版」

・2016／12／10～11日、忘年会、「クライマー～パタゴニアの彼方に」

・2017／３／11～12日、文珠山荘をベースに山に登る会・文珠岳、「氷壁」

・2017／４／15～16日、山菜天ぷら、「Ｋ２～白き氷河の果てに」

・2017／６／17～18日、ヒメホタル鑑賞会、「エベレスト２Ｄ」

・2017／９／９～10日、納涼祭、「運命を分けたザイル」

・2017／10／28～29日、山荘記念碑除幕式、ハロウイン、「黒い画集～ある遭難」
・2017／12／９～10日、忘年会、「セブンイヤーズインチベット」
・2018／３／10～11日、文珠山荘をベースに山に登る会・真富士山、「星にのばされたザイル」
・2018／４／14～15日、山菜天ぷら、「剱岳点の記」（再上映）
・2018／６／16～17日、ヒメホタル鑑賞会、「MERU（メルー）」
・2018／９／８～９日、納涼祭、「ヒマラヤ～運命の山」
・2018／10／27～28日、ハロウイン、「氷壁の女」
・2018／12／８～９日、忘年会、「運命を分けたザイル２」「第９」
・2019／３／９～10日、文珠山荘をベースに山に登る会・中村山、「エヴェレスト～神々の山嶺」
・2019／４／13～14日、山菜天ぷら、「氷壁」（再上映）
・2019／６／15～16日、ヒメホタル鑑賞会、「生きてこそ～Alive」
・2019／９／７～８日、納涼祭、「岳～ガク」
・2019／10／26～27日、ハロウイン、「聖職の碑」
・2019／11／30～12／１日、忘年会、「クライムダウン」「第９」

なお山荘の管理は静岡支部が行っているが、日本山岳会の規約に従って山荘は土地も含めて本部の資産である。

［参考文献］

１．「父と山、そして思い出～父・荻野恭一白寿の祝い」、池上雅子著、2013年４月刊
２．「山荘建設の頃～大先輩荻野老との出会い」支部会報「不盡」第78号、小柳清人著、2015年11月刊

記念碑を前景にした現在の文珠山荘

こぼれ話　泣かない犬　タロー

増田　孝治

2000年１月28日、６名で文珠山荘を訪れた。最初に迎えてくれたのは、白い柴犬のタローだった。久々に沢山の人に会ったのか尻尾を四六時中振り、嬉しさを表していた。しかし、何をされても泣かない、吠えない・・・・・。何とおとなしい犬だろうと感心しました。山荘の暖炉を囲み、酒を飲み飲み、荻野恭一さんより９年の歳月をかけ息子さんと二人でログハウスを建てたことや、南アルプス全山登頂の話を聞き寝袋へ横たわった。しかしタローのことが気になり、そっと小屋を覗くと既に寝ていた。

翌日、タローを連れて抜きつ抜かれつで文珠岳山頂へ向かったが、相変わらず泣かない。桜峠を南下して浅間神社へ到着、タフなタローも息遣いが荒かった。バス停で帰りのバスを待っている間、何としても泣かせようと思い切り尻尾を踏んだ。さすがのタローもキャン・・・。初めてタローの泣き声を聴いた。ここでタローを迎えの車に渡し別れたが、タローは最後まで尾を振り、別れを惜しむ様子であった。

2005年6月撮影

編者コメント：
イギリスの詩人で小説家のスコット(1771～1832)の言葉に
「臆病な犬ほど大きい声で吠える」とある。

70周年記念事業協力者名簿

【A. 寄付金の部】

連番	氏　名	摘要
1	有　元　利　通	会員
2	中　野　雅　章	同
3	杉　浦　　實	同
4	畠　中　智　代	同
5	白　鳥　勝　治	同
6	中　村　博　和	同
7	仙　石　智　子	同
8	八　木　　功	同
9	荻　野　俊　夫	同
10	池　谷　和　明	同
11	赤　石　秀　之	同
12	福　田　廣　志	同
13	三ツ井　　孝	同
14	青　島　秀　夫	同
15	諏訪部　　豊	同
16	大　島　康　弘	同
17	長　野　和　義	同
18	小　西　　晃	同
19	熊　岡　達　雄	同
20	木　村　勝　利	同

連番	氏　名	摘要
21	安　間　　荘	同
22	山　崎　郁　郎	同
23	照　内　　豊	同
24	西　村　しのぶ	同
25	青　野　興　喜	同
26	山　崎　　洋	同
27	赤　堀　栄　子	同
28	篠　原　　豊	同
29	海　野　俊　久	同
30	實　川　欣　伸	同
31	永　野　敏　夫	同
32	久保田　保　雄	同
33	杉　本　孝　夫	同
34	㈱　三　　創	法人

寄付金総合計　￥571,000

【B. その他寄付】

登山用テント　2張り

連番	氏　名	摘要
35	岩　﨑　充　弘	会員

資　料

年　　表

2001(平成13)年

５月12日　支部総会、支部長：大石惇
５月13日　懇親山行(二軒小屋ロッヂ)「千枚岳」、支部会員23名
10月11日～14日　支部創立50周年記念
　　支部海外登山(第２回) 韓国「雪岳山」(1,707m)、支部会員７名
11月24日～25日　今西祭(梅ヶ島「梅薫楼」)

2002(平成14)年

１月19日　新年会 「東海軒会館」 支部会員36名
３月　　会報「静岡支部通信」を「不盡(ふじ)」に改め第51号発行
４月６日　支部総会
８月17日～９月７日　支部海外登山(第３回)、中国「チャウカラガイ ムズターク」
　　(5,500m)、支部会員13名
11月16日～17日　懇親山行「信州　天狗山」、支部会員13名

2003(平成15)年

１月13日　新年会 「入船鮨南店」 支部会員29名
５月13日　支部総会
５月　　日本山岳会創立100周年記念行事「新日本山岳誌」発行(ナカニシヤ出版)
　　静岡県の山133座と９峠の案内、支部会員19名執筆
６月　　浜石岳野外センターに山岳図書館「不盡文庫」を開設
11月８日～９日　懇親山行(山犬ノ段静大演習林宿舎)「高塚山、天水、蕎麦粒山」
　　支部会員25名、他６名

2004(平成16)年

１月18日　新年会　猪ノ頭「鱒の家」 支部会員30名
５月11日　支部総会、大石支部長
６月１日～２日　第１回中央分水嶺踏査(三国峠～甲武信ヶ岳)、支部会員８名
７月29日～８月７日　支部海外登山(第４回)モンゴル「アスラルトハイルハーン」
　　(2,900m)支部会員７名、他４名

７月24日～26日　第２回中央分水嶺踏査(大弛峠～甲武信ヶ岳)　支部会員６名
11月13日～14日　懇親山行(昼神温泉)「恵那山」　支部会員16名

2005(平成17)年

１月15日　新年会　「静岡マイホテル竜宮」　支部会員33名
５月10日　支部総会、大石支部長
９月18日　JAC100周年記念中部４支部交流会
　　記念懇親登山「朴坂山」、支部会員９名
10月15日　JAC100周年記念総合式典　支部会員24名
11月12日～13日　懇親山行(静岡大学理学部セミナーハウス)
　　「伊豆・三蓋山」支部会員19名、他７名

2006(平成18)年

１月14日　新年会　「魚長」　支部会員38名
５月９日　支部総会、大石支部長
６月26日～７月10日　第５回静岡支部海外遠征　「ラカポシ・ナンガパルバートトレッキング」　山田隊長他４名
10月　　支部会報「不盡」第60回記念号発行
11月11日～12日　懇親山行(和田島少年自然の家)
　　「徳間峠～赤岳・砂子岳～田代峠」　支部会員11名

2007(平成19)年

１月13日　新年会　「魚長」　支部会員34名
５月８日　支部総会　第６代支部長に児平　隆一を選出
５月　　山本朋三郎名誉会員(元支部長)逝去(享年86)
６月　　牧野　衛名誉会員(元支部長)逝去(享年101)
11月10日　懇親山行「富幕山」　支部会員11名、他１名

2008(平成20)年

１月12日　新年会　「魚長」　支部会員29名
５月13日　支部総会
６月６日･13日･20日　第１回中高年初心者登山教室(静岡労政会館)　参加者53名
６月・７月　真富士山登山道整備(全４回)
11月　　日本山岳会自然保護全国集会(富士五湖西湖、山梨静岡支部合同)

12月　　浜石岳野外センター改修に伴い山岳図書館「不盡文庫」破棄され消滅

2009(平成21)年

１月18日　新年会　「魚長」　支部会員32名
５月12日　支部総会　第７代支部長に久保田　保雄を選出
６月より定例会、２火会から２水会へ
６月14日、７月５日、６日　真富士山登山道整備
９月２日　富士山山肌清掃、須走口　会員７名、会員外１名

2010(平成22)年

１月17日　新年会　「東海軒会館」　支部会員36名
４月14日　支部総会
９月13日～20日　山岳展示会(静岡市民ギャラリー)
【静岡支部創立60周年記念事業】
９月25日　シンポジウム「静岡の山」(あざれあ大ホール)
　　記念講演会「アフリカの山とゴリラの魅力」(あざれあ大ホール)
　　記念式典(ホテルアソシア)
９月26日　記念山行「賤機山」　支部会員19名
11月13日～14日　懇親山行「三ツ峰、七ツ峰」支部会員16名

2011(平成23)年

１月18日　新年会　「東海軒会館」　支部会員39名
４月13日　支部総会
７月２日～10日　海外登山(第５回)モンゴル「アルタンウルギー山」(2,656m)
　　支部会員会友７名、他１名
12月３日　實川欣伸会員　日本山岳会長特別表彰授与

支部公益事業　2011年度「ハイキングセミナー」

５月15日　第１回「竜爪山」受講者19名、支部会員７名
６月12日　第２回「富士見岳」受講者７名、支部会員７名、他１名
８月27日　第３回「八紘嶺」受講者10名、支部会員５名
11月27日　第４回「見月山」受講者25名、支部会員11名
翌年２月19日　第５回「竜爪山」受講者19名、支部会員９名

2012(平成24)年

１月15日　新年会　「東海軒会館」　支部会員49名
４月11日　支部総会
４月22日　会員山行「愛鷹連峰･愛鷹山」支部会員９名、会友１名
11月10日　会員山行「蛾ヶ岳（ひるがたけ）」支部会員13名、会友１名

支部公益事業　2012年度「ハイキングセミナー」

５月16日･20日　第１回座学「読図」受講者10名、支部会員６名、
実践「静岡・大棚山～中村山」受講者８名、支部会員５名
６月６日･10日　第２回座学「天気の予測」受講者８名、支部会員８名、
実践「静岡・突先山～大山」受講者10名、支部会員７名
10月３日･13･14日　第３回座学「トラブル･遭難対策」受講者９名、支部会員６名、
実践「初冬の富士山」受講者９名、支部会員８名

2013(平成25)年

１月６日　新年会　「東海軒会館」　支部会員50名、会友２名
２月３日　会員山行「発端丈山～城山」　支部会員18名、会員外１名
２月16日～18日　会員スキー山行「菅平スキー場、根子岳、パルコール嬬恋スキー場」支部会員８名、会友１名
４月17日　支部総会８代目支部長　大島康弘
10月20日～21日　第29回全国支部懇談会静岡大会
各地支部会員133名、支部会員55名

支部公益事業　2013年度「ハイキングセミナー」

５月19日　第１回「八高山」受講者23名、支部会員５名
６月９日　第２回「思親山」受講者12名、支部会員６名
11月10日　第３回「安倍川流域・真富士山」受講者15名、支部会員６名

2014(平成26)年

１月５日　新年会　「ホテルシティオ静岡」　支部会員43名、入会予定者２名
２月２日　会員山行「富士山・二ツ塚（双子山）」　支部会員12名
（集合するも天候不順で中止）
２月７日～８日　会員スキー山行「菅平スキー場、根子岳」　支部会員９名、会員外２名
４月９日　支部総会
７月17日　「新版　日本三百名山　登山ガイド」出版（山と渓谷社）
５月17日～18日　第４回中部ブロック支部交流会　２日間で延べ71名参加

11月８日～９日　懇親山行（山犬段避難小屋）「蕎麦粒山」支部会員16名
12月21日　会員山行「安部奥・二王山」支部会員10名

支部公益事業　2014年度「ハイキングセミナー」

４月19日～20日　第１回「沢口山」受講者９名、支部会員５名
６月８日　第２回「八紘嶺」受講者18名、支部会員７名
10月26日　第３回「大谷嶺」受講者30名、支部会員11名

2015（平成27）年

１月11日　新年会　「ホテルシティオ静岡」　支部会員44名、入会予定者３名
１月31日～２月１日　会員山行　山伏避難小屋泊「安部奥・山伏」支部会員６名
２月14日～15日　会員スキー山行「菅平スキー場、入笠山」支部会員５名
４月８日　支部総会　８代目支部長　大島康弘（再任）
４月19日　会員山行「竜爪山」（兼ハイキングセミナー下見）支部会員８名
５月24日　会員山行「大光山」（兼ハイキングセミナー下見）支部会員５名
７月18日～20日　会員山行　「南アルプス・白峰三山縦走」
支部会員４名、会員外２名
10月３日～４日　会員山行　「北アルプス・蝶ヶ岳～常念岳縦走」
支部会員３名、会員外１名
10月25日　会員山行「南ア深南部・黒法師岳」支部会員５名、会員外１名
11月14日～15日　懇親山行（静岡県立森林公園森の家）「秋葉山」支部会員17名
11月29日　会員山行「沼津アルプス」（兼ハイキングセミナー下見）
支部会員22名、会員外2名

支部公益事業　2015年度「ハイキングセミナー」

４月26日　第１回「竜爪山」受講者26名、支部会員６名
５月31日　第２回「大光山」受講者13名、支部会員４名
12月13日　第３回「沼津アルプス」受講者８名、支部会員７名

2016（平成28）年

１月10日　新年会　青島酒造及び藤枝「魚時会館」　支部会員37名、会友２名
２月20日～21日　会員山行　雪山・山スキー「車山、三峰山」
支部会員７名、会友２名、会員外２名
４月13日　支部総会
４月16日～17日　文珠山荘行事　「山菜天ぷら会」、支部会員６名
４月30日　改訂 新日本山岳誌　出版

５月８日　会員山行　安部奥・竜爪山(桜峠コース)」
(兼ハイキングセミナー下見)、支部会員14名
６月５日　会員山行　「安部奥・富士見岳」
(兼ハイキングセミナー下見)　支部会員７名、会員外１名
６月25日～26日　文珠山荘行事「山の歌を歌う会」支部会員12名、会員外３名
７月16日～18日　会員山行「南ア・上河内岳～茶臼岳」
(横窪沢小屋訪問)支部会員13名、会員外１名
８月11日　「山の日」制定　山の日記念行事(静岡県山岳４団体共催)
「記念講演会と静岡県の山々写真展」
９月10日～11日　文珠山荘行事「納涼会」支部会員15名、会員外４名
９月24日～25日　会員山行「北アルプス・黒部川下の廊下」支部会員９名
11月５日～６日　会員山行「南ア深南部・不動岳」支部会員12名
11月19日～20日　第１回神奈川支部との交流会　支部会員13名
12月10日～11日　文珠山荘行事「忘年会」　支部会員16名、会員外2名

支部公益事業　2016年度「ハイキングセミナー」

５月15日　第１回「安部奥・竜爪山(桜峠コース)」受講生６名、支部会員７名
６月12日　第２回「安部奥・二王山」受講生７名、支部会員８名
11月27日　第３回「富士見岳」

2017(平成29)年

１月15日　新年会　「柚木の郷」　支部会員49名、会友１名
２月18日～19日　会員山行　雪山・山スキー
「高峰高原、黒斑山・水ノ搭山・東篭ノ搭山」
支部会員11名、会友２名、会員外１名
４月12日　2017年度支部総会　静岡労政会館　49名参加
９代目支部長　有元利通
４月15日～16日　文珠山荘行事「山菜天ぷら会」、支部会員12名、会員外１名
４月30日　小田直美会員(11887)劔岳平蔵谷で雪崩に遭い死亡
５月６日　会員山行「奥三河・日本ヶ塚」、支部会員６名
５月28日　会員山行「青笹山」、支部会員16名
６月10日～11日　会員山行「青薙山、稲又山」池ノ平テント泊、支部会員11名
６月17日～18日　文珠山荘行事「山荘に舞うヒメホタルを見る会」
支部会員12名、会員外２名
７月14日～17日　会員山行「南アルプス」(横窪沢小屋訪問)

支部会員15名、神奈川支部会員１名
１班「光岳」ピストン４名、２班「大根沢山～光岳～茶臼岳」４名
８月11日　山の日記念講演会・写真展（県内山岳４団体）
野口いづみ氏「山岳医療について」
松島信幸氏「南アルプスの地質について」、来場者200余名
８月16日　納涼懇親会　センチュリーホテル　支部会員27名
９月９日～10日　文珠山荘行事「納涼会」、支部会員12名
10月28日～29日　山の日記念イベント「ふるさとの山へ登ろう－山伏登山－」
県岳連・市岳連・労山と協賛、雨天のため机上訓練で終了
10月28日～29日　文珠山荘行事「ハロウィーン」（兼石碑除幕式）　支部会員15名
11月11日～12日　懇親山行（寸又峡温泉朝日山荘）
「山犬段～板取山、天水」支部会員26名
11月18日～19日　第２回神奈川支部との交流会
（富士山側火山３座、長者ヶ岳、天子ヶ岳）
12月９日～10日　文珠山荘行事「忘年会」、支部会員12名

支部公益事業　2017年度「ハイキングセミナー」

４月23日　第１回「竜爪山」受講生６名、支部会員７名
６月４日　第２回「見月山」受講生５名、支部会員12名
翌年２月11日　第３回「富士山・二ツ塚（双子山）周辺」受講生２名、支部会員14名

2018（平成30）年

１月14日　新年会、松坂屋「梅の花」　支部会員46名
２月17日～18日　会員山行　雪山・山スキー「菅平・根子岳」
支部会員10名、会友２名、他支部１名
３月10日～11日　文珠山荘行事「山荘をベースに山に登る会（真富士山）」
支部会員12名
３月27日　永年会員　荻野恭一氏　逝去（104歳）
４月11日　支部総会
４月14日～15日　文珠山荘行事「山菜天ぷらの会」支部会員８名
４月21日　会員山行「大室山（富士山）」支部会員５名
５月２日　平日会員山行「竜爪山古道」支部会員３名
５月13日　会員山行「夕日峠」支部会員５名
６月16日～17日　文珠山荘行事「ヒメホタル鑑賞会」
６月23日　實川欣伸会員　富士山登頂２，０００回達成、７月22日祝賀会

７月13日～16日　会員山行「南アルプス　聖岳」（横窪沢小屋訪問）支部会員８名
８月18日　山の日記念イベント「親子登山教室－富士山宝永火口－」
　　親子参加者14名、支部会員10名
９月８日～９日　文珠山荘行事「納涼祭」支部会員13名、他２名
11月６日～11日　第１回南アルプス写真展（静岡市民ギャラリー）山岳４団体共催
11月10・11日　懇親山行「信州平谷温泉ひまわりの館」
　　「信州・蛇峠山、大川入山」蛇峠山４名、大川入山14名

支部公益事業　2018年度「ハイキングセミナー」

５月27日　第１回「越前岳」受講生10名、支部会員13名
10月21日　第２回「安倍峠～バラの段」受講生10名、支部会員12名
翌年２月17日　第３回「竜ヶ岳」受講生７名、支部会員17名

2019（平成31）年

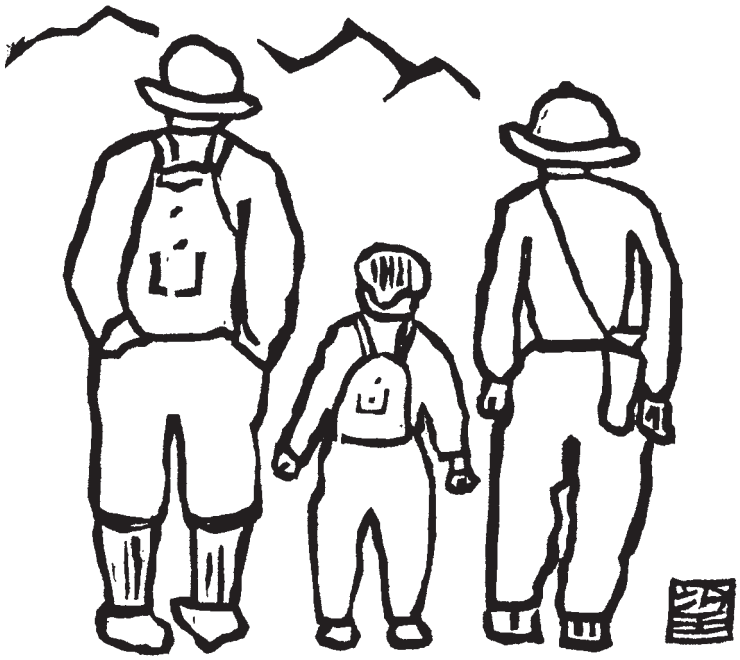
１月13日　新年会　「梅の花」
２月２日～３日　会員山行　雪山・山スキー「北横岳・蓼科山」
４月10日　支部総会
４月13日～14日　文珠山荘行事「山菜天ぷらを食す会」
４月21日　会員山行「丹沢・大室山」
４月24日　会員山行「竜爪山」
2019（令和元）年⇒改元
５月12日　会員行事「バーナーの使い方とテント張り」場所：文珠山荘
５月18日～19日　会員山行「南ア深南部・房小山」※中止
６月５日　会員山行「不老山」５名
６月15日～16日　文珠山荘行事「ヒメ蛍を観る会」
８月14日　「納涼懇親会」ホテルセンチュリー静岡　17名参加
10月26日～27日　文珠山荘「ハロウィン」　映画「聖職の碑」７名参加
11月５日～10日　第２回「南アルプス写真展」（静岡市民ギャラリー）
　　山岳４団体主催　延べ15名参加　来場者663名
11月９・10日　山中湖村「一樹山荘」「篭坂峠－大洞山－三国山－山中湖」18名
11月16日～17日　会員山行「シャウゾ山・黒沢山」６名参加
11月30日～12月１日　文珠山荘「忘年会」
　　映画「クライムダウンA lonely place to die」13名参加
12月７日　年次晩餐会　11名参加
12月18日～19日　会員平日山行「長九郎山」駿河湾フェリーで大沢温泉泊８名参加

支部公益事業　2019年度「ハイキングセミナー」

６月２日　第１回「天城山・八丁池」受講生２名、支部会員14名
10月20日　第２回「大札山」受講生９名、支部会員13名
翌年２月16日　「三国山稜・大洞山」※雨天中止

2020（令和２）年

１月12日　新年会　松坂屋「梅の花」　支部会員50名
１月　　支部ユニフォーム作成、38名購入、￥3,350
２月１日～２日　会員山行　雪山・山スキー「入笠山・守屋山」　毒沢温泉泊
　　支部会員12名、会友２名、他支部１名
２月５日　70周年記念集中登山「竜爪山」
　　則沢コース下見、会員３名、会員外１名
２月26日　70周年記念会員小山行「浜石岳」支部会員24名
　　同小祝賀会　「開花亭」支部会員21名
３月７日～８日　文珠山荘「山荘をベースに山に登る会」竜爪山、劔岳に三角点設置のTV鑑賞、二日目は山の本朗読会、新田次郎作「春富士遭難」10名参加（うち元国土地理院職員・山田明氏、会員外１名）
３月15日　藁科川中流・坂ノ上「植林体験」３名参加



静岡支部会員名簿

2020年３月31日現在

通し No.	会員番号	入会年月日	氏　　名	居住市町村	動　向
1	19	1906.2/ 1962(復活)	武　智　直　道	熱海市	△
2	127	1932(復活)	武田　千代三郎		△
3	286	1911.9	杉　本　　良		△
4	586	1918.12	又　木　周　夫		△
5	1186	1930.5	磯　野　計　蔵		△
6	1310	1931.5	沖　田　悦太郎		△
7	1399	1932.12	彦　坂　興　孝		△
8	1477	1933.11	山　本　功　美		△
9	1487	1964.12(復活)	酒　戸　弥二郎		△
10	1545	1965.9(復活)	静岡大学山岳部(旧制静岡高校旅行部)		○
11	1553	1934.12	今　川　良　雄		△
12	1644	1936.4	宮　島　太　郎		△
13	1681	1936.1	井　上　親　雄		△
14	1693	1937.4	木　原　　均	三島市	△
15	1769	1939.4	佐　野　八州夫		△
16	1771	1939.4	村　松　久　蔵		△
17	1784	1999.5復活 1939.8	渡　辺　徳　逸	旧駿東郡須山	△
18	1914	1941.6	大　塚　　武		△
19	2073	1941.11	伏　見　鎌次郎	静岡市	△
20	2075	1941.11	杉　山　正　二		△
21	2135	1942.4	竹　中　　要	三島市	△
22	2346	1946.11	内　野　菊　夫		△
23	2680	1947.8	武　者　虎　司		△
24	2880	1948.5	近　藤　聡　子	伊東市	△
25	3007	1948.5	川　森　左智子	伊東市	△
26	3079	1948.8	野　田　福五郎	旧志田郡大井川町	△

通し No.	会員番号	入会年月日	氏　　名	居住市町村	動　向
27	3194	第２代 1948.11	牧　野　　衛	旧磐田郡竜洋町	△元支部長
28	3704	1949.1	稲　垣　一　郎	浜松市	△
29	3711	1988.4（復活）	磯　野　謙二郎	静岡市	△
30	3712	1949.11	塩　田　一　二	静岡市	△
31	3713	第３代 1949.12	山　本　朋三郎	静岡市	△元支部長
32	3744	1950.1	太　田　　繁	掛川市	△
33	3750	初代 1950.3	大　室　貞一郎	静岡市	△元支部長
34	3786	1950.5	鈴　木　克　己	掛川市	△
35	3835	1950.9	静岡城内高校山岳部（現静岡高校山岳部） 静岡市追手町		□
36	3843	1950.1	大　長　進　二	静岡市	△
37	3846	1950.1	岡　田　利　貞	旧小笠郡横須賀町	△
38	3847	1950.1	掛川西高校山岳部　旧小笠郡西山口村		□
39	4031	1952.11	足　立　吉　朗	藤枝市	△
40	4032	1952.11	岡　本　富　夫	静岡市	△
41	4063	1963	大　森　明　洸	御殿場市	△
42	4132	1953.12	小笠原　三　郎	愛知県碧南市	△？
43	4170	1954.4	尾　崎　徳　郎	静岡市	△
44	4183	1954.5	谷　津　昭　雄	静岡市	△
45	4184	1954.5	加　藤　　即	静岡市	△
46	4227	1954.7	ラカポシー （代表：大石勉）	静岡市	□
47	4228	1954.7	柳　田　芙美緒	静岡市	△
48	4250	1954.12	岡　村　　崔	東京都文京区	△
49	4257	1955.2	片　山　欣　弥	静岡市	△
50	4444	1956.1	川　嶋　禮　一	富士市	△
51	4445	1956.1	尾　崎　忠　次	静岡市	△
52	4503	1957.4	池　田　　徹	静岡市	△
53	4504	1957.4	渡　辺　研　造	旧清水市	△
54	4594	1957.11	江　越　千代子	伊東市	△
55	4606	1957.12	西　野　勢　作	静岡市	△

通し No.	会員番号	入会年月日	氏　　名	居住市町村	動　向
56	4653	1958.4	石　原　重　徳	御殿場市	△
57	4666	1958.5	石　間　信　夫	静岡市	△
58	4754	1958.9	鈴　木　洋　三	沼津市	○
59	4769	1958.9	音　成　彦始郎	御殿場市青年の家	△
60	4800	1958.11	河　村　栄　二	東京都大田区	△
61	4870	1957.5	岩　永　安　雄	静岡市	△
62	4986	1959.9	西　郷　正　郎	静岡市	△
63	5027	1960.3	照　内　　豊	富士宮市	○
64	5157	1960.7	望　月　計　市	旧清水市	△
65	5211	1960.12	青　島　秀　夫	藤枝市	○
66	5300	1961.9	安　達　美冬里	田方郡函南町	△
67	5301	1961.9	杉　山　正　洋	神奈川県湯河原町	△
68	5302	1961.9	鈴　木　璋　一	旧榛原郡本川根町	△
69	5325	1961.12	川　端　信　治	旧清水市	△
70	5326	1961.12	柴　田　昌　亮	旧榛原郡金谷町	△
71	5375	1962.2/ 89.12復活	市　野　　弘	旧清水市	△
72	5398	1962.4	小　林　孝　久	静岡市	△
73	5405	1962.4	佐　野　敏　郎	旧清水市	?
74	5411	1962.4	荒　谷　一　郎	旧清水市	△
75	5412	1962.4	杉　山　晴　信	旧清水市	△
76	5451	1962.7	内　藤　正　広	藤枝市	△
77	5452	1962.7	竹　端　節　次	伊豆市	○
78	5465	1962.9	長　田　義　則	三島市	○
79	5466	1962.9	荻　野　恭　一	静岡市	△
80	5467	1962.9	岡　崎　恒　夫	静岡市	△
81	5470	1962.9	樋　口　幸　利		?
82	5534	1963.6	水　野　公　男	藤枝市	△
83	5576	第４代 1963.9	安　間　　荘	富士市	○元支部長
84	5720	1964.5	山　本　　剛	賀茂郡東伊豆町	?
85	5738	1964.5	長谷川　亮　一	沼津市	?

通し No.	会員番号	入会年月日	氏　　名	居住市町村	動　向
86	5768	1964.8	山　本　良　三	静岡市	○
87	5803	1964.10	鳥　山　正　代	豊橋市	?
88	5812	1964.10	滝　浪　善　一	静岡市	?
89	5834	第５代 1964.12	大　石　　惇	静岡市	○元支部長
90	5880	1965.3	山　田　　猛	愛知県新城市	?
91	6028	1965.12	川　村　　旭	御殿場市	?
92	6128	1966.7	杉　山　泰　司	裾野市	○
93	6129	1966.7	菅　谷　保　夫	富士市	○
94	6270	第７代 1967.3	久保田　保　雄	富士市	○元支部長
95	6282	1967.5	宮　澤　宏　昌		?
96	6364	1967.10	田　辺　恵　造	富士市	△
97	6371	1967.11	鶴　見　敏　彦	旧引佐郡細江町	△
98	6467	1968.5	中　村　隆　哉	掛川市	?
99	6468	1968.5	松　井　省　始	旧浜名郡新居町	?
100	6468	1968.5	山　崎　治　郎		?
101	6525	1968.7	村　岡　　明	旧清水市	?
102	6539	1968.8	太　田　欣　也	静岡市	?
103	6584	1968.1/ 90.7復活	石　川　和　勇	静岡市	?
104	6586	1968.11	山　口　　博	旧田方郡韮山町	?
105	6600	1968.11	三　浦　　巌	浜松市	?
106	6677	1969.3	町　　俊　一	島田市	○
107	6731	1969.5	熊　切　芳　昭	藤枝市	○
108	6737	1969.5	八　木　　功	静岡市	○
109	7024	1970.8	勝　見　幸　雄	静岡市	□
110	7025	1970.8	山　田　雅　一		?
111	7261	1971.10	葛　谷　凱　治		?
112	7283	1971.10	伊　藤　　守	沼津市	?
113	7338	1972.2	山　口　　亮	田方郡函南町	?
114	7378	1972.5	池　上　和　男	旧清水市	△
115	7555	1973.3	藤　田　正　巳	浜松市	?

通し No.	会員番号	入会年月日	氏　　名	居住市町村	動　向
116	7720	1974.4	江　藤　秀　一	静岡市	?
117	7736	1974.5	望　月　福　次	旧清水市	△
118	7813	1974.10	高　倉　英　博	旧浜北市	○
119	7820	1974.1	渡　会　栄　一	静岡市	△
120	7853	1975.1	平　井　敏　男	旧清水市	?
121	7867	1975.2	斉　藤　時　雄	静岡市	?
122	7888	1975.3	小　林　清　彦	富士市	?
123	7889	1975.3	斉　藤　辰　治	磐田市	○
124	7910	1975.3	丸　尾　祐　治	袋井市	○
125	7974	1975.5	渡　辺　宏　之	富士市	?
126	7977	1975.5	仁　藤　敏　彦	富士市	?
127	8040	1975.11	大　川　一　郎	旧田方郡伊豆長岡町	?
128	8057	1976.1	沼　沢　龍　起	沼津市	?
129	8089	1976.4	玉　井　一　吉	富士市	?
130	8122	1976.6	渡　辺　勝　宏	富士市	?
131	8156	1976.9	佐　藤　威一郎	三鷹市	?
132	8222	1977.1	牧　野　　茂	静岡市	△
133	8230	1977.3	室　伏　偉　男	富士市	○
134	8231	1977.3	三　井　貞　彦	富士市	?
135	8233	1977.3	乾　　好	旧清水市	?
136	8276	1977.6	滝　田　博　之	静岡市	○
137	8289	1977.7	坂　井　八　郎	浜松市	△
138	8481	1978.10	池　上　文　友	富士市	?
139	8562	1979.5	望　月　喜　儀	富士宮市	?
140	8660	1979.1	中　山　啓　司	旧小笠郡浜岡町	□
141	8711	1980.4	杉　本　宣　明	静岡市	○
142	8810	1980.7	岸　田　幸　雄	駿東郡清水町	?
143	8816	1980.7	加　田　勝　利	沼津市	○
144	8857	1980.10	関　口　淑　子	旧浜北市	□
145	8896	1981.4	滝　沢　芳　章	神奈川県綾瀬市	?
146	8912	1981.4	糸　賀　忠　彦	沼津市	□

通し No.	会員番号	入会年月日	氏　　名	居住市町村	動　向
147	8913	1981.4	湯　山　直　文	駿東郡小山町	○
148	8938	1981.5	近　藤　浩　之	静岡市	○
149	8998	1981.7	長　島　吉　治	静岡市	○
150	9043	1981.10	西　村　　正	浜松市	○
151	9071	1982.1	内　田　利　朗	三島市	?
152	9100	1982.4	金　子　誠　一	南足柄市	○
153	9112	1982.4	仁　王　一　成	沼津市	○
154	9123	1982.5	中　川　邦　彦	富士市	?
155	9149	1982.5	山　内　眞　行	旧磐田郡竜洋町	△
156	9210	1982.9	小　島　優　幸	沼津市	?
157	9285	1983.4	平　井　　泰	富士市	□
158	9286	1983.4	長谷川　廣　司	富士宮市	○
159	9287	1983.4	庄　司　長　生	沼津市	□
160	9321	1983.5	田　中　成　三	旧浜名郡新居町	?
161	9342	1983.6	河　合　俊　男	静岡市	○
162	9343	1983.6	山　田　　透	静岡市	△
163	9379	第８代 1983.7	大　島　康　弘	島田市	○前支部長
164	9455	1984.4	浜　地　克　郎	静岡市	○
165	9456	1984.4	佐　藤　隆　男	富士市	△
166	9483	1984.4	霜　田　嘉　一	駿東郡長泉町	△
167	9486	1984.4	横　井　孝　恵	名古屋市	○
168	9494	1984.5	永　野　敏　夫	静岡市	○
169	9496	1984.5	仲　尾　　宏	静岡市	?
170	9580	第６代 1984.1	児　平　隆　一	静岡市	○元支部長
171	9583	1984.10	三　井　　尚	浜松市	?
172	9655	1985.5	近　田　文　弘	旧志太郡岡部町	□
173	9703	第９代 1985.7	有　元　利　通	静岡市	○現支部長
174	9792	1985.12	鳥　飼　和　清	春日井市	△
175	9844	1986.5	小　川　喜　久	沼津市	○
176	9969	1986.11	河　村　忠　明	静岡市	?

通し No.	会員番号	入会年月日	氏　　名	居住市町村	動　向
177	10018	1987.4	豊　田　順　介	袋井市	?
178	10021	1987.4	海　野　賢　一	伊東市	△
179	10084	1987.6	小　池　英　雄	浜松市	○
180	10245	1988.3	森　　博	静岡市	□
181	10315	1988.6	八　木　藤　吉	静岡市	?
182	10343	1988.8	西　畑　　武	焼津市	○
183	10412	1989.1	嶋　崎　晃　一	富士市	?
184	10545	1989.9	杉　本　武　満	裾野市	○
185	10606	1990.1	久　米　　實	静岡市	□
186	10634	1990.4	山　本　博　晴	沼津市	●
187	10685	1990.5	榛　葉　華　子	掛川市	□
188	10702	1990.6	酒　井　忠　正	藤枝市	○
189	10939	1991.5	古　田　徹　司	浜松市	○
190	10951	1991.6	西　川　信　義	藤枝市	△
191	11052	1991.10	白　鳥　勝　治	静岡市	○
192	11159	1992.4	廣　澤　和　嘉	静岡市	○
193	11209	1992.5	山　坂　五　郎	浜松市	△
194	11357	1993.2	下　山　敏　郎	駿東郡長泉町	?
195	11375	1993.4	山　口　康　裕	伊東市	○
196	11390	1993.4	福　島　一　三	静岡市	?
197	11397	1993.4	高　須　梧　郎	静岡市	○
198	11511	1993.6	桜　井　克　己	浜松市	?
199	11548	1993.8	鈴　木　康　平	島田市	?
200	11575	1993.10	加　藤　弘　司	島田市	○
201	11586	1993.10	大　村　武　敬	静岡市	□
202	11677	1994.3	平　野　雅　俊	静岡市	○
203	11759	1994.6	若　林　和　司	富士宮市	○
204	11760	1994.6	若　林　エ　ミ	富士宮市	○
205	11873	1994.11	岩　崎　充　弘	静岡市	○
206	11887	1994.11	小　田　直　美	旧志太郡岡部町	△
207	11973	1995.4	小　澤　桂　子	熱海市	○

通し No.	会員番号	入会年月日	氏　　名	居住市町村	動　向
208	11947	1995.4	佐　野　洋　二	富士宮市	△
209	12033	1995.6	赤　石　秀　之	静岡市	○
210	12366	1996.9	青　野　興　喜	静岡市	○
211	12448	1997.2	高　村　勝　久	旧清水市	○
212	12495	1997.4	川　口　茂　路	沼津市	?
213	12585	1997.6	望　月　照　夫	静岡市	○
214	12632	1997.10	片　山　　健	静岡市	□
215	12646	1997.10	清　水　敏　弘	磐田市	?
216	12745	1998.4	杉　本　孝　夫	静岡市	○
217	12769	1998.4	宮城島　好　史	静岡市	○
218	12774	1998.4	佐　野　辰　彦	静岡市	?
219	12828	1998.5	松　永　義　夫	静岡市	□
220	12831	1998.5	増　田　孝　治	沼津市	○
221	12839	1998.5	橋　場　克　司	千葉県流山市	○
222	12862	1998.6	天竺桂　広　義	浜松市	△
223	12942	1998.12	鈴　木　浩　志	浜松市	□
224	12943	1998.12	鈴　木　邦　子	浜松市	□
225	13015	1999.4	多　家　一　彦	沼津市	□
226	13018	1999.4	酒　井　忠　基	世田谷区	○
227	13139	1999.9/ 2018復活	関　根　美千子	伊豆の国市	○
228	13218	2000.4	鈴　木　浩　美	伊豆の国市	○
229	13233	2000.4	杉　本　寿　子	静岡市	○
230	13372	2000.12	勝　又　一　歩	裾野市	○
231	13385	2001.1	小　川　正　育	掛川市	○
232	13414	2001.4	小　柳　清　人	静岡市	○
233	13415	2001.4	小　柳　奈津子	静岡市	○
234	13453	2001.4	水　野　恵　子	岡崎市	○
235	13454	2001.5	山　本　久　子	静岡市	□
236	13525	2001.9	細　田　栄　次	静岡市	□
237	13625	2002.4	豊　島　宏　始	旧庵原郡由比町	●
238	13634	2002.4	荻　野　俊　夫	富士市	○

通し No.	会員番号	入会年月日	氏　　名	居住市町村	動　向
239	13690	2002.6	三　宅　國　男	静岡市	△
240	13754	2002.11	渡　辺　昌　嗣	裾野市	○
241	13773	2003.4	出利葉　義　次	静岡市	○
242	13797	2003.4	曽　根　芳　樹	焼津市	○
243	13945	2003.11	清　野　　博	三島市	○
244	13976	2004.4	諏訪部　　豊	伊豆の国市	○
245	13999	2004.4	木　村　勝　利	静岡市	○
246	14069	2004.10	米　山　浩　三	飯田市	○
247	14073	2004.10	岩　田　孝　司	裾野市	○
248	14102	2005.4	甲　田　　明	富士市	△
249	14122	2005.4	原　　修　治	静岡市	○
250	14123	2005.4	戸　田　睦　治	静岡市	○
251	14124	2005.4	熊　岡　達　雄	静岡市	□
252	14130	2005.4	高　田　省　三	浜松市	□
253	14131	2005.4	日　吉　丈　男	伊豆市	○
254	14138	2005.4	登　　三　郎	静岡市	△
255	14139	2005.4	望　月　晴　隆	静岡市	△
256	14141	2005.4	福　田　廣　志	浜松市	○
257	14144	2005.5	渡　邊　裕　之	静岡市	△
258	14177	2005.7	鈴木(吉田)英司	三島市	□
259	14193	2005.9	山　口　千枝子	浜松市	□
260	14207	2005.9	名　倉　健　兒	静岡市	□
261	14208	2005.10	篠　原　　豊	富士市	○
262	14228	2005.12	實　川　欣　伸	沼津市	○
263	14281	2006.5	北　嶋　義　久	浜松市	□
264	14384	2007.4	畠　中　智　代	浜松市	□
265	14385	2007.4	高　嶋　妙　子	浜松市	□
266	14433	2007.6	鵜　飼　一　博	菊川市	○
267	14569	2008.12	築　地　　茂	静岡市	○
268	14578	2009.4	武　藤　泰　佐	御殿場市	○
269	14820	2010.12	池　谷　和　明	浜松市	○

通し No.	会員番号	入会年月日	氏　　名	居住市町村	動　向
270	14823	2010.12	厚　見　ゆり子	沼津市	○
271	14826	2011.1	後　藤　　尚	富士市	□
272	14830	2011.1	久保田　　豪	富士市	○
273	14836	2011.4	小笠原　　誠	静岡市	○
274	14849	2011.4	木ノ内　高　嘉	富士宮市	○
275	14850	2011.4復活	石　間　宏　美	島田市	□無所属へ
276	14870	2011.4	杉　浦　　實	静岡市	○
277	14892	2011.4	有　元　久　住	中野区	□
278	14969	2011.8	大　庭　俊　司	磐田市	□
279	14996	2011.12	竹　淵　　繭	静岡市	○
280	15004	2012.3	大和田　秀　穂	富士市	○
281	15024	2012.4	小曽戸　恒　夫	三鷹市	○
282	15028	2012.4	土　屋　　勇	藤枝市	○
283	15040	2012.4	石　川　広　親	富士市	○
284	15043	2012.4	小　川　三千男	沼津市	○
285	15044	2012.4	小　川　峰　子	沼津市	○
286	15063	2012.4	竹　原　洋　介	上田市	○
287	15097	2012.4	西　村　しのぶ	藤枝市	○
288	15106	2012.4	平　井　隆　一	静岡市	○
289	15162	2012.6	小　山　智　弘	三島市	○
290	15203	2012.9	武　田　裕　光	渋川市	◇群馬支部へ
291	15219	2012.11	増　田　治　郎	静岡市	○
292	15262	2013.4	中　村　博　和	沼津市	○
293	15270	2013.4	小　林　　勇	富士市	○
294	15292	2013.4	鶴　橋　　誠	静岡市	○
295	15293	2013.4	長　丸　とも子	藤枝市	○
296	15295	2013.4	原　田　健　吾	蕨市	○
297	15371	2013.7	聲　高　健　吾	富士宮市	○
298	15372	2013.7	聲　高　一　枝	富士宮市	○
299	15451	2014.1	竹　淵　　論	静岡市	○
300	15483	2014.4	泉　脇　修　司	平塚市	○

通し No.	会員番号	入会年月日	氏　　名	居住市町村	動　向
301	15493	2014.4	岩　見　昌　樹	富士宮市	○
302	15495	2014.4	三ツ井　　孝	静岡市	○
303	15579	2014.6	西　澤　祥　陽	静岡市	○
304	15605	2014.7	高　野　啓　一	静岡市	□
305	15613	2014.7	西　川　卯　一	富士市	○
306	15661	2014.12	寺　田　忠　史	静岡市	□
307	15666	2015.10	長　野　和　義	島田市	○
308	15705	2015.2	勝　又　千　華	裾野市	○
309	15755	2015.4	米　沢　正　信	島田市	○
310	15808	2015.7	橋　本　耕　一	静岡市	○
311	15847	2015.10	仙　石　智　子	静岡市	○
312	15869	2015.11	山　賀　一　男	横浜市	○
313	15889	2015.12	堀永(旧吉本)恵子	熊本県上益城郡	□
314	15902	2016.1	丹　羽　忠　昭	伊東市	○
315	15911	2016.2	小　西　　晃	神奈川県愛甲郡	○
316	15921	2016.2	大　島　わかな	田方郡函南町	○
317	16069	2016.8	山　﨑　　洋	沼津市	○
318	16089	2016.10	赤　堀　栄　子	藤枝市	○
319	16090	2016.10	照　内　明　良	埼玉県東松山市	○
320	16105	2016.11	中　野　雅　章	静岡市	○
321	16109	2016.11	鈴　木　信　弘	島田市	○
322	16190	2017.4	竹　淵　　陸	静岡市	○
323	16201	2017.4	赤　羽　あずさ	上田市	○
324	16233	2017.7	海　野　俊　久	焼津市	○
325	16292	2017.12	池　上　雅　子	静岡市	○
326	16428	2018.12	竹　沢　和　也	裾野市	○

準会員

通し No.	会員番号	入会年月日	氏　　名	居住市町村	動　向
327	A0085	2017.70	荻　原　　睦	静岡市	○
328	A0105	2017.12	市　川　啓　子	静岡市	○

通し No.	会員番号	入会年月日	氏　　名	居住市町村	動　向
329	A0109	2017.12	原　田　裕　子	静岡市	○
330	A0167	2018.9	三　浦　雅　司	静岡市	○
331	A0198	2018.1	小　嶋　香　織	静岡市	○
332	A0218	2019.3	小　川　　恕	御前崎市	○
333	A0275	2019.12	桐　下　昌　幸	沼津市	○

会友

通し No.	会員番号	入会年月日	氏　　名	居住市町村	動　向
334	3059	1947.8	西　丸　震　哉	世田谷区	△
335	6201	1966.12	山　崎　郁　郎	群馬県北軽井沢	○
336	8618	1979.8	里　見　清　子	甲府市	○
337	10069	1987.5	橋　本　　武	千葉市	○
338	14821	2010.12	大　澤　純　二	北杜市	○

(注)50周年記念誌名簿(水野氏作成)に追記した。(居住市町村は50周年までは入会時のもの、その後は主に入会時のもの、一部は2020年現在のもの)

動向欄の

○印　　現支部会員
△印　　物故
□印　　退会
◇印　　かつて支部にいたが現在は他支部等に在籍
●印　　除籍と思われる

静岡支部会員の出版物一覧

2000年～2019年

会員著書

著者・編者	書　　名	発行年月	出版社
永野敏夫	「南アルプス 大いなる山、静かなる山」	2000年3月	黒船出版
永野敏夫	「アルパインガイド 荒川・赤石・聖」	2000年4月	山と渓谷社
永野敏夫	「山といで湯」	2000年9月	静岡新聞社
静岡市山岳連盟編 共著：廣澤和嘉他 西畑武：監修	「静岡市の山々」	2001年4月15日	静岡市岳連 創立50周年記念誌 編集委員会
静岡山岳創刊準備号	「静岡支部通信」（１～50号）	2002年11月号	690号
大石惇　編 静岡支部 天山チャウカラガイ・ ムズターグ登山隊　編著	「天山登山報告書 チャウカラガイ・ムズターグ （5,182m）」	2003年5月5日	㈳日本山岳会 静岡支部
平井　泰	「芙蓉峰」	2003年1月31日	子どもと教育社
日本山岳会編 共著：安間荘他支部18名	「新日本山岳誌」	2005年11月15日	ナカニシヤ出版
出利葉義次	「K2苦難の道程」 東海大学K2登山隊 登頂成功までの軌跡（2006年）	2008年7月	東海大学出版会刊
小川正育	「海辺の少年、山へ」 ある山岳ガイドの半生	2009年5月30日	小川正育
静岡県山岳連盟編 滝田博之、木ノ内高嘉、 松永義夫、他編集委員	「静岡県登山・ ハイキングコース120選」	2010年3月25日	篠原出版
有元利通	「三百名山完登と富士山三百登」	2010年7月29日	羽衣出版
永野敏夫	「南アルプス・深南部藪山讃歌 知られざるルート94選」	2010年8月	羽衣出版
久保田保雄他	「風の記憶－Memory of wind」 日本山岳会学生部 アラスカ・カナダ登山隊	2011年4月20日	編集・デナリ パブリッシング 株式会社
實川欣伸	「富士山二千回登りました」	2011年7月8日	日本経済新聞出版社
池上雅子	「父･荻野恭一、－白寿の祝い」 父と山　そして思い出	2013年4月24日	静岡新聞社
日本山岳会編 共著：實川欣伸、長谷川 廣司	「新版日本三百名山」（中）	2014年7月31日	山と渓谷社

著者・編者	書　　名	発行年月	出版社
日本山岳会編 共著：廣澤和嘉、加藤弘司、加田勝利、小川正育、諏訪部豊、勝又一歩、有元利通、大島康弘	「新版日本三百名山」（下）	2014年7月31日	山と渓谷社
池上雅子	「清水に嫁いで　そして思い出」	2015年4月24日	静岡新聞社
廣澤和嘉･児平隆一	「日がえり　しずおか 低山ウォーク　Best20」	2015年5月	静岡新聞社
日本山岳会編 共著：青野興喜、有元利通、安間荘、大石惇、大島康弘、大村武敬、小川正育、加藤弘司、児平隆一、高須梧郎、竹端節次、照内豊、永野敏夫、平野雅俊、廣澤和嘉、古田徹司、森博、山坂五郎、若林和司	「改訂版　新日本山岳誌」	2005年11月15日	ナカニシヤ出版
勝見幸雄	「遊びが仕事で仕事が遊び」	2016年3月25日	有限会社テラ
永野敏夫	「静岡の山　日帰りコース158」	2016年5月	羽衣出版
加田勝利	分県山岳ガイド「静岡県の山」	2017年11月	山と渓谷社
山本良三	「南アルプスからヒマラヤへ」 パイオニア精神へのまなざし	2018年1月26日	山と渓谷社
白鳥勝治	西崑崙登山隊カラコンロン主峰（6355m）初登頂報告書、隊員随筆「ポプラの杖」	2005年7月	静岡県山岳連盟
白鳥勝治	ヤカワカン南壁登山隊支援報告書（2010年10月～11月） 支援隊が決まるまでの経緯、行動記録他	2011年4月	静岡市山岳連盟

著作物：紙誌

筆　　者	タ　イ　ト　ル	書籍名	発行年月	号数
長田義則	「明治42年赤石岳山頂写真から －記憶と記録を考える」	「山」	2003年1月号	692号
長田義則	「旧会員章と創立以来の会員数」	「山」	2003年4月号	695号
長田義則	「アルピニスト山崎直方とピッケル」（上）	「山」	2003年8月号	699号
長田義則	「アルピニスト山崎直方とピッケル」（下）	「山」	2003年10月号	701号
山崎郁郎（会友）	「霧の旅会と同会の徽章」	「山」	2003年12月号	703号

筆　　者	タ　イ　ト　ル	書籍名	発行年月	号数
山本良三	静大紫岳会編　部報「紫岳」12号	「紫岳」	2003年12月1日	12号
	「一人の異端児とその仲間たちの足跡－岩場の青春－」			
	「コロンビア　アンデス学術調査隊」⑴総括報告⑵計画の発端から出発まで			
	「チューレンヒマール1970－主峰初登頂と韓国隊東峰登頂への疑問―」			
	「中国　皇冠峰登山を顧みて－その人間的側面－」			
	「思い出の先輩たち（重光、花園、垣内、上原、芹沢各氏）」			
	「池谷澄夫さんの遭難について思うこと」			
	「書評：『ロシア人の憶出』重光　晶著			
長田義則	「山からの発想」	「山」	2004年5月号	708号
山本良三（談）	「第32回山岳史懇談会 静岡大学山岳部・70年の歴史」	「山」	2004年6月号	709号
山内眞行	「中央分水嶺踏査、大弛峠で山梨支部と情報交換会」	「山」	2004年9月号	712号
長田義則	「会員番号の由来　番号割り当ての妙」	「山」	2005年1月号	716号
長田義則	「ルームの図書室は資料の宝庫」	「山」	2005年6月号	721号
諏訪部　豊	「ヨーロッパアルプス山麓のピッケル鍛冶調査の旅」	山岳文化	2005年10月20日	第4号
長田義則	草創期会員「田中喜左衛門の山日記」	「山」	2005年10月号	725号
勝又一歩	「翁の思い出」（渡辺徳逸さん追悼の記）	「山」	2006年3月号	730号
諏訪部豊	「進化する登山用具～ストーブ」	山と渓谷	2006年4月1日	
諏訪部豊	「平柳一郎さんとピッケル」	「山」	2006年6月号	733号
長田義則	「ウェストンと会員章」	「山」	2006年12月号	739号
諏訪部豊	「山内ピッケル」～その美しさに迫る	山と渓谷	2007年3月1日	
長田義則	「黒田長敬の会員章」	「山」	2007年4月号	743号
山本良三	「地球温暖化と映画『不都合な真実』」	「山」	2007年4月号	743号
諏訪部豊	「二代目シェンク作のピッケル」	「山」	2007年4月号	743号
出利葉義次	「K2苦難の道程」	「山」	2007年7月号	746号
	「東海大学K2登山隊登頂成功までの軌跡」	「山」	2008年10月号	761号
白鳥勝治	清水山岳会創立60周年記念会報「岩棚」 日本山岳会シニア登山隊　プモリ遠征報告書（2007年9月～10月） 東海大学K2登山隊参加報告（2008年6月～8月）	「岩棚」	2008年1月	
諏訪部豊：共著	「郷土の本」		2009年4月1日	
山本良三	「南アルプス山岳図書館」	「山」	2009年4月号	767号

筆　　者	タ　イ　ト　ル	書籍名	発行年月	号数
長田義則	「戦時下に結成された『日本女子登山隊』」	「山」	2009年7月号	770号
有元利通	「三百名山完登と富士山300登達成」	「山」	2009年11月号	774号
諏訪部豊	「登山用具史」	山と渓谷	2010年4月1日	
長田義則	「女性の冬季富士山 －初登頂の通説と行方」	「山」	2010年5月号	780号
長田義則	「昭和天皇、皇太子時代の富士山」	「山」	2010年8月号	783号
有元利通	「静岡支部創立60周年記念行事」	「山」	2010年12月号	787号
長田義則	「富士山登頂1000回達成した 實川欣伸会員」	「山」	2010年12月号	787号
安間荘	「空沼小屋(秩父宮ヒュッテ)の憂える 現状」	「山」	2011年2月号	789号
安間荘	「空沼小屋(秩父宮ヒュッテ)の憂える 現状(続)」	「山」	2011年3月号	790号
大島康弘　書評	「三百名山完登と富士山三百登」 有元利通・著	「山」	2011年4月号	791号
山本良三	「ふたたび会員に問いたい」	「山」	2011年7月号	794号
有元利通　書評	「『毎日富士山』佐々木茂良著、『富士 山に千回登りました』實川欣伸著」	「山」	2011年10月号	797号
實川欣伸	「富士山に生かされ、登れる喜び」	「山」	2012年1月号	800号
山本良三　書評	「歩く事、登山は賢者のスポーツ」 大森薫雄・著	「山」	2012年2月号	801号
山本良三	「日本山岳博物館構想について」	「山」	2012年4月号	803号
山本良三	「宮下啓三さんを偲ぶ会開催」	「山」	2012年11月号	810号
竹淵　繭	「年次晩餐会記念懇親山行 『越前岳』に登る」	「山」	2013年2月号	813号
勝又一歩	50周年記念機関誌	愛峰山の会 記念誌	2013年9月30日	記念誌
	「富士山須山口復興の歴史」			
	「富士山世界遺産登録までの道のり」			
	「愛鷹山荘建設の経緯と現状」			
	「裾野山岳会」			
	「岳友の著書紹介」			
	「裾野市山岳協会愛峰山の会 50年の歩み」			
山本良三	部報「紫岳」13号	「紫岳」	2013年10月1日	13号
	「1998年東チベット偵察計画」			
	「部報『紫岳』について」			
	「静岡大学山岳部史概観」			
大島康弘	「第29回全国支部懇談会・静岡大会の報告」	「山」	2014年1月号	824号
白鳥勝治	南アルプスの自然保護とリニア中央 新幹線工事について	「山」	2015年2月号	837号

筆　　者	タ　イ　ト　ル	書籍名	発行年月	号数
書評	「日帰りしずおか低山ウォークBest20」廣澤和嘉･児平隆一著	「山」	2015年12月号	847号
白鳥勝治	「山の日」記念ハイキング「大日古道」に参加して	「山」	2016年12月号	859号
大島わかな	挨拶（年次晩餐会）	「山」	2016年12月号	859号
山梨・静岡支部	「冬山トレーニングで行く冬富士の厳しさについて再認識を！」			
有元利通	「怖いのは突風とアイスバーン」	「山」	2017年10月号	869号
有元利通	「『山の日』記念事業を４段の構えで実施」	「山」	2019年1月号	884号
山本良三	「『理事の定年と再任制限の再検討に関する報告』に対する反論	「山」	2019年2月号	885号
大島わかな	「指導者育成講習会に参加して」	「山」	2019年3月号	886号
赤石秀之	「北八ヶ岳の山々・苔と池と道」	山毛欅	2019年9月30日	第56号

静岡支部会員の海外遠征史

１．第１次海外遠征（支部50周年記念登山）

期　　間：2000年４月28日～５月２日
目標山岳：台湾「雪山」
隊員名簿：隊長（安間　荘）隊員（照内　豊、久保田保雄、大島康弘、横井孝江、有元利通、大村武敬、佐野洋二、青野興喜、黒柳公治）
結　　果：雪山主峰（3884m）登頂６名、雪山東峰（3150m）登頂９名。
詳細報告は、支部通信第48号参照。

２．第２次海外遠征（支部50周年記念登山）第２弾

期　　間：2001年10月11日～10月14日
目標山岳：韓国「雪岳山」1707m
隊員名簿：隊長（大石　惇）隊員（大島康弘、久保田保雄、横井孝江、照内豊、有元利通）
結　　果：全員登頂。詳細報告は、支部通信「不盡」第51号参照。

３．第３次海外遠征

期　　間：2002年８月17日～９月７日
目標山岳：天山未踏峰「チャラカラガイムスターク（仮称）、5192m」
隊員名簿：隊長（大石　惇）、副隊長（久保田保雄）、登攀隊長（有元利通）
隊員（照内　豊、青野興喜、大村武敏、荻野敏夫、大島康弘、山内真行、静岡大学学生－田丸佳寛、青木睦佳）
結　　果：登頂ルート上に急峻な岸壁が立ちはだかり、それを避けても雪壁を突破するにはそれなりの登攀用具と日数が必要と判断し、4150mで登頂を断念した。詳細報告は、支部会報「不盡」第52号参照。

４．第４次海外遠征

期　　間：2004年７月29日～８月７日
目標山岳：モンゴル「アスラルトハイルハーン山、2751m」
隊員名簿：総隊長（大石　惇）、隊長（大島康弘）
隊員（荻野敏夫、横井孝恵、山口康裕、青野興喜、熊岡達雄、
戸田睦治、登　三郎、早坂忠博）
結　　果：隊長大島博行（隊長の弟）や現地スタッフの協力を得て、隊員全員が登頂。詳細報告は、支部会報「不盡」第56号参照。

５．第５次海外遠征

期　　間：2006年６月26日～7月10日
目標山岳：パキスタン「ラカポシ、ナンガパルバート」
隊員名簿：隊長（山田　徹）隊員（河合俊夫、上村文平、岡田捷彦、鈴木　続）
結　果：ディランBCとメルヘンヴィーゼのトレッキング、タキシラのガンダーラ遺跡も見学。詳細報告は、支部会報「不盡」第60号参照。

６．第６次海外遠征

期　間：2011年７月２日～10日
目標山岳：モンゴル「アルタンウルギー、2656m」
隊員名簿：総隊長（久保田保雄）、隊長（大島康弘）、
隊員（大庭俊司、長谷川廣司、有元利通、實川欣伸、
会友・山崎郁郎、関西支部・中谷絹子）
結　　果：７年前のアスラルトハイルーンと同じく、乗馬による登山で全員登頂。詳細報告は、支部会報「不盡」第70号参照。

2020.03.19作成：長　野　和　義

静岡支部会報発行状況

（2001～2019年）

発　行　年　月	名　　称	号　数	頁数	会　報　担　当
2001(平成13)年３月	静岡支部通信	第49号	12	有元　利通
2001(平成13)年10月	静岡支部通信	第50号	12	有元　利通
2002(平成14年)３月	不盡(春)	第51号	20	大島　康弘
2002(平成14年)10月	不盡(秋)	第52号	10	大島康弘・加藤弘司
2003(平成15年)３月	不盡(春)	第53号	12	大島康弘・加藤弘司
2003(平成15年)10月	不盡(秋)	第54号	16	大島康弘・加藤弘司
2004(平成16年)３月	不盡(春)	第55号	16	大島康弘・加藤弘司
2004(平成16年)10月	不盡(秋)	第56号	16	大島　康弘
2005(平成17年)３月	不盡(春)	第57号	16	大島　康弘
2005(平成17年)10月	不盡(秋)	第58号	16	大島　康弘
2006(平成18年)３月	不盡(春)	第59号	16	大島　康弘
2006(平成18年)10月	不盡(秋)	第60号	20	大島　康弘
2007(平成19年)３月	不盡(春)	第61号	16	大島　康弘
2007(平成19年)10月	不盡(秋)	第62号	16	大島　康弘
2008(平成20年)３月	不盡(春)	第63号	16	大島　康弘
2008(平成20年)10月	不盡(秋)	第64号	12	片山　健
2009(平成21年)７月	不盡(夏)	第65号	16	大島　康弘
2009(平成21年)12月	不盡(冬)	第66号	16	大島　康弘
2010(平成22年)５月	不盡(夏)	第67号	16	大島　康弘
2010(平成22年)11月	不盡(冬)	第68号	16	大島　康弘　　(60周年記念号)
2011(平成23年)５月	不盡(夏)	第69号	16	大島　康弘
2011(平成23年)11月	不盡(冬)	第70号	32	大島　康弘
2012(平成24年)５月	不盡(夏)	第71号	16	大島　康弘

発　行　年　月	名　　称	号　数	頁数	会　報　担　当
2012(平成24年)11月	不盡(冬)	第72号	16	大島　康弘
2013(平成25年)６月	不盡(夏)	第73号	20	照内豊・諏訪部豊・熊岡達雄
2013(平成25年)12月	不盡(冬)	第74号	20	照内豊・諏訪部豊・熊岡達雄
2014(平成26年)５月	不盡(春)	第75号	20	照内豊・諏訪部豊・熊岡達雄
2014(平成26年)11月	不盡(冬)	第76号	36	照内豊・諏訪部豊・熊岡達雄
2015(平成27年)７月	不盡(夏)	第77号	20	永野　敏夫・八木　功
2015(平成27年)11月	不盡(秋)	第78号	20	永野　敏夫・八木　功
2016(平成28年)６月	不盡(春)	第79号	20	永野　敏夫・八木　功
2016(平成28年)11月	不盡(秋)	第80号	20	永野　敏夫・八木　功
2017(平成29年)６月	不盡(春)	第81号	20	長野和義・山崎洋・大島わかな
2017(平成29年)11月	不盡(秋)	第82号	20	長野和義・山崎洋・大島わかな
2018(平成30年)６月	不盡(春)	第83号	20	長野和義・山崎洋・大島わかな
2018(平成30年)11月	不盡(秋)	第84号	20	長野和義・山崎洋・大島わかな
2019(平成31年)５月	不盡(春)	第85号	20	長野和義・山崎洋・小嶋香織
2019(令和１年)11月	不盡(秋)	第86号	16	長野和義・山崎洋・小嶋香織

編集後記

記念誌を作成することは意外とすんなりと決まっていった。有元支部長がやる気だったことが大きい。私は75周年もあり得ると思っていたが結果的には、前回から既に20年が経過している。変化が激しい近年丁度いいタイミングかも知れない。

記念誌の意義については、不要論も含めていろんな意見があると思われる。しかし、私は毎年２回発行されている支部会報とは別に、過去を大きく振り返り、残すものは記録として留めて、次の人に繋いでいくべきであると考える。

体裁については、サイズはB5で横書きを選んだ。従来日本山岳会では、縦書きで２段或いは３段組みが採用されているが、図や写真の挿入には段組みなしの方が編集もやり易い。

次はその中身である。紙面に制約のある支部会報には盛り込めない個人からのボリュームある投稿、創立50年から70年までの20年間の会の出来事で記録に残しておきたいものなど、その内容について編集委員会で検討した。開催された委員会は10回を数えた。貴重な時間を割いて遠隔地より駆けつける若い委員も含め７名がその都度熱心に討議した。

本誌の目玉「今後の静岡支部に期待すること」は、当初座談会方式で行う予定であったが、変更してアンケートにした。ここで提起された貴重な意見は今後の支部活動に反映していかなければならない。本部や他支部も同じ問題を抱えていると思われるが、それらの解決には、ペイイットフォワード(Pay it forward)、即ち【恩送り】の精神で活動してくれるキーマンが不可欠である。そして次のキーマンを育てる。その好循環がなければ日本山岳会の存続は難しいと思う。

最後にこの記念誌は皆さんからの尊い寄付で印刷製本してお届けしました。改めて協力頂いた方々に御礼申し上げます。尚カットは、故望月福次会員の版画を使用させて頂きました。

題　字　故 牧野　　衛　会員(№3194)
カット　故 望月　福次　会員(№7736)
(P.8、P.100、P.112、P.117)

不盡

－日本山岳会静岡支部創立七十周年記念誌－

発 行 日　令和２(2020)年４月１日
発 行 者　静岡支部長　有 元 利 通

編集委員　◎長野和義、有元利通、木村勝利
八木　功、中野雅章、山崎　洋
大島わかな、小嶋香織
事 務 局　〒420-0948
静岡市葵区秋山町８-13　木村勝利
印 刷 所　静岡市駿河区中村町166
株式会社　三　　創
☎054-282-4031